
ドラゴン・レイヤー

夕咲 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン・レイヤー

【Zコード】

Z9402T

【作者名】

夕咲 紅

【あらすじ】

纏いし者と呼ばれる者がいる。それは人間と言つ種を超えた者に送られる名称

冒険者であるバナッショ＝ラウズコートはある田洞窟で美しい少女を助ける。人間の姿をした少女は実際には人間ではなく、真紅の火龍と呼ばれる至高の龍種であった。

バナッショは不本意にも龍の少女 ルルーセリア＝エルド＝ガーネットと契約を交わし、纏いし者となつたのだった……

* 一章完結しました。

紅き口付け（前書き）

一部誤字を修正しました。

内容に変更はありません。

紅き口付け

「くそつ！ なんでこんな事になっちまつたんだ……」

眼前に襲い来る炎を魔法のかかつた銀製の盾で防ぎながら、俺はそんな声を漏らした。

俺の後ろには真紅色の髪をした少女が倒れている。外傷は見当たらなかつたが意識がなく、どうしたものかと考え込んでいたのが失敗だつた。

勢いのついた炎が止み、俺は視線を上げる。

イビルドラゴン 人に仇名すモンスターの中でも上位に位置する龍種。その中では下位のモンスターではあるが、それでも人間一人の手には十分過ぎる程余る相手。口から放たれる炎は普通の鉄程度なら一瞬で溶かし、鋭利な爪は人の身など簡単に切り裂く。硬い皮膚は黒い鱗で覆われており、安物の武器では傷を付ける事すら難しい。普段は四足歩行だが後ろ足の方が発達しており、後ろ足だけで立ち上がる事が出来る。背には翼があり、人間の何倍もある巨体にも関わらずかなりの高速飛行が可能だ。

ここが広いとは言え天井のある洞窟じゃなかつたら、背後に倒れた人間を守りながら対峙する事は出来なかつただろう。俺の知る限りでは小振りなサイズだが、自由に飛び回れる程のスペースはない。不幸中の幸いと言える。

言えるんだが……

「この状況、どう打破したものか……」

自慢じゃないが俺は強い。最強とは言わないが、まあ世界中でもかなり上位の強さだと思う。当然人間の中ではだが。イビルドラゴンの炎を平気で防ぐ魔法の盾や、奴の鱗や皮膚を相手にしても負けない銀製の魔法の剣も持つてている。飛ぶ事の出来ない状況にある今なら、戦つて倒せない事はない相手だ。だがしかし、俺の背後には意識のない人間がいる。俺が逃げても戦つても、おそらく無事では

済まないだろう。そもそも、意識のない人間をモンスターの前に放置して逃げるなんて俺には出来ない。目を覚ましてくれると助かるんだが……

「さっきまで散々揺らしたり声をかけたりしたんだ。そう簡単には起きないだろうな」

なんて呟いた俺だったが、その予想は良い意味で裏切られる事になる。

再びイビルドラゴンが吐いた炎を防ぎ、一縷の望みをかけて振り返ると、少女が目を覚ましたのだ。

今まで意識を失っていたのが嘘の様にはっきりとした視線を俺に向けてくる。だがやはり寝起きの状態で意識がはっきりとはしていないのか、無言のまま俺を見るだけで何も言わない。仕方ないな。こっちから声をかけるか。

「大丈夫か？ 何があつたのかは知らないが、動けるなら早く逃げてくれ」

そうすればイビルドラゴンと真っ当に戦う事が出来る。

俺の言葉が聞こえなかつたのか、少女が動く気配はない。しかし、真っ直ぐと俺に向けていた視線を斜め上に上げた。少女の視線が捉えたのは、当然イビルドラゴンだ。

「今も危険な状況なんだ。分かつたら早く逃げてくれ」

今度は聞こえたのだろう。再び俺へと視線を向けた少女は、ゆっくりとだが立ち上がつた。

だが、これで逃げてくれるだろうと思つた俺の予想は裏切られる。少女は、ゆっくりとした足取りで俺へと近付いてきた。

良く見れば少女は素足だ。洞窟を素足で歩くなんて危険極まりない。足、痛くないんだろうか？

いやそんな事はどうでも良い。

「こっちじゃない。反対に逃げるんだよ」

そんな俺の言葉は通じない。一步、また一步と少女は俺に近付く。今まで意識していなかつたが、少女の顔はかなり整つている。歳

は十五くらいだろうか。幼さを感じさせる顔付きではあるが、大人へと成長する段階特有の可愛くも美しくもある顔立ち。真紅の髪は鮮やかで綺麗だ。幼女趣味は持ち合わせていない俺だが、それでも美しいと思える容姿、そして少女の持つ雰囲気に惹かれ呑まれてしまう。

今はそれ所じやない。そんな事は分かりきっている。それでも、目を奪われしまう。

「ルルーセリア＝エルド＝ガーネット」

俺の目の前までやつてきた少女が、小さな声でそう呟いた。

「……それが君の名前か？」

俺の言葉に、少女は頷いた。そして俺の目をじっと見つめ、小首を傾げる。

俺の名前を聞いているんだろうか？ 状況的にそう判断し、俺は自分の名を名乗る。

「俺はバナッショ＝ラウズコートだ」

「バナッショ？」

「ああ

「バナッショ＝ラウズコート。契約を」

確認の意であろう言葉に頷くと、今度は少女はそんな呟きを漏らしそし

自身の唇を俺の唇に含ませてきた。

「え？」

一瞬、何が起こったのか理解出来なかつた。少女が俺から唇を離し、ようやく現実を理解した。だが、なぜ……？ こんな事をした理由が分からない。

「バナッショ。わたしの名を

訳が分からぬまま、俺は少女に言われるままにその名を口ににする。

「ルルーセリア？」

俺がそう呼ぶと、少女はふるふると首を横に振つた。ああ……フ

ルネームで呼べって事か？

そう考えて、試しにフルネームで少女の名前を呼んでみる。

「ルルーセリア＝エルド＝ガーネット」

その刹那、少女の身体が光を放つ。紅い光だ。光は瞬時に強さを増し、俺は思わず目を瞑る。だがそれも一瞬だったのだろう。光が止み、俺は周囲の明るさに慣らす様にゆっくりと目を開けた。

そこには、少女の姿はなかった。だけど、ここにいる。そう確信出来る。なら、どこにいると言つのか……

そう考えて、自然と答えが思い浮かんだ。

彼女は、俺の中にいる。と

「とりあえず、あいつを片付けるか」

俺は前方へと視線を戻し、イビルドラゴンを見据える。未だに納めたままだった剣を抜くのと、イビルドラゴンの炎が止むのとはほぼ同時だった。

次の攻撃が来る前に片付ける。そう意識して跳躍する。まずは真っ直ぐ正面に飛び、イビルドラゴンとの間合いを詰める。その巨体故に機動力では確実にこちらに分がある。足の間を通り背後に回り、相手が反転するよりも早く再び跳躍。イビルドラゴンの背を利用し首元近くまで飛び上がり、弱点である首の後ろにある逆鱗へと剣を突き刺す。

本来ならば大きなダメージを与えはするものの、この一撃が致命傷になる事はない。が、今の俺が放つたその一撃は、イビルドラゴンの命を簡単に奪つた……

共生の始まり

自由貿易都市ガルニール。

ここリバルライド大陸の南端に位置し、大陸を統べるファルニード王国から自治権を認められた唯一の都市。

大陸では王都ファルニクエスに次いで大きな街で、港を利用して他の大陸と貿易を盛んに行なっている。当然、大陸内の貿易も盛んだ。商品の売買に関しては王都よりも盛んと言えるだろう。その最大の理由は、周囲に未踏破のダンジョンが多いと言う事だろう。

ダンジョンと一口に言つてもその種類は多様で、洞窟や迷宮、塔や遺跡等様々だ。いつ誰が作ったのか定かではないそれらからは、財宝と呼べる物が多く発掘される。しかし当然の様にモンスターが生息し、命を脅かす罠等もある。程度の差はあるどとも危険な場所である。それでも一攫千金を求めて、数多くの冒険者がダンジョンに足を踏み入れる。

世界各地に存在するダンジョンではあるが、ガルニールの周辺程度踏破されていないダンジョンが多く存在する場所はない。それ故に街自体も危険に晒される事があるが、多くの冒険者がいる為対応する事が可能な上、元々危険を見越している為自衛手段も多く用意されている。

そんなガルニールの街並みを今、俺 バナッショ=ラウズコートはゆっくりと歩いている。

「ねえねえバナッショ！ あれなーに？」

嬉々とした声色で背後からそんな言葉を投げかけてきたのは、鮮やかな真紅色の髪に、天真爛漫そうな金色の瞳をキラキラと輝かせている少女だ。見た目は15歳くらいの可愛らしい少女で、しかし美しさを兼ね揃えたその容貌は見る者の目を奪う。事実、さつきから周囲の視線を集めている。本人は全く気にした様子はないが……

「バナッショ？」

俺がなかなか答えられないせいか、少女 ルルーセリア＝エルド＝ガーネットが小首を傾げながら俺の名を呼んだ。心なしか悲しげに目を潤ませている。

「このまま泣かれても困るな……

「どれの事だ？」

「あれ！」

そう言つてルルーセリアが指差したのは、荷馬車用の荷台だ。馬は休ませていいのか、今はその場にはいない。別段珍しい物ではないが、俺が説明してやるとルルーセリアは楽しそうに「そつなんだー」と笑顔を浮かべる。

ルルーセリアは無知だ。さつきからずつとこの調子で、普通なら知つていて当然の事や、何でもない事を尋ねてくる。だがそれは仕方のない事もある。なぜなら、ルルーセリアは人間じやない。本人の口から聞いた訳ではないが、俺はその事実を自然と理解して否、理解させられた。

俺がルルーセリアと出合つたのは数時間前の事だ。下層へと進む洞窟タイプのダンジョンを探索している最中、倒れているルルーセリアを見つけた。そこにはイビルドラゴンがいて、最終的には倒した訳だが……

「はあ……」

思い出しだけで気が滅入る。溜息を吐いた俺を見てルルーセリアが「どうしたの？」と聞いてくるが「何でもない」と答える事が出来ない。なぜなら溜息の原因がルルーセリアだからだ。それを口に出せばこいつは落ち込むだろう。それはそれでまた面倒な事だ。俺は面倒な事は嫌いだ。とは言え、自他共に認めるお人好しでもある。困っている人間は簡単に放置したりは出来ない。損な性分だ。そのせいで、今こつして面倒事に巻き込まれている訳だが……

「なあ、今まで着いて来るんだ？」

「ずっと、だよ？」

どうしてそんな当然の事聞くの？ なんて具合に言葉を返される。

因みにこの問答、既に十回以上繰り返している。理由は聞いた。だが納得は出来ない。

「俺が纏いし者ねえ」

纏いし者 それはある種の超越者。精靈や力のある生物の精神体を一時に体内に吸収する事で、その力を借りる事の出来る者の総称。その手段は三つあり、方法によつて借りられる力に差がある。

一番簡単なのが相手を殺し、その力を無理矢理奪う方法。それでも子供が武器も持たずに下位のモンスターを殺す事が出来る位には力を得ると言われている。

次が対象から限定的にだが直接力を借りる方法。この場合一般的な冒険者が一般的な装備を身に着けた状態で、下位の龍種を倒せる位だろうか。この方法の場合はそもそも個体能力や相性等によって変動する為はつきりとした強化値は分からぬ。

そして最後が契約。特定の精靈等と契約を交わす事で、いつでもその力を借りる事が出来る様になる。直接力を借りる方法と同じ様に思えるかもしれないが、実際は雲泥の差だ。契約を交わしていくも状況によつてその強化具合は変わるが、少なくともきちんと手順を踏めばただ力を借りた時の十倍以上は強化されるだろう。

纏いし者になる事自体は難しくない。多少でも魔力を扱う事で出来れば可能だ。ただし、それは一番簡単な方法での話だ。それでも難しくないのは方法であつて、実際には力を奪える状況になる事自体珍しい。普通の動物やモンスターにも精神体は存在するが、力の弱い生物は死んでしまうと直ぐに精神体が霧散してしまう。そもそもが精神体に近い存在である精靈を殺すのは難儀であり、ならば強力なモンスターはどうかと言えば、そもそも倒す事が難しくなる。又、苦労して倒して力を奪つたとしても、この方法では長続きしない。役に立つ状況が少ない。その為技術として確立してはいるが、事実上纏いし者と呼ばれるのは契約を交わした者と考えて差し支えはないだろう。

ならば、俺は一体何と契約を交わし纏いし者となつたのか……

それこそが目の前にいる少女、ルルーセリアだ。それも、嬉しくはないが契約相手としては最高級の相手

ガーネット・ドラゴン

真紅の火龍。

契約者と共に生きる。それが撻なのだとルルーセリアは言つ。だが俺はそれを求めてはいない。契約を交わしたかつた訳でもない。助けようとした相手に必要もないのに助けられ、共に生きて行くと勝手に宣言されたに過ぎない。けど……

人間の街について何も知らない少女を一人置いていくのは心が痛む。ドラゴンである以上、そう簡単に殺される事はないだろうが、死ななければ良いと言う訳でもない。

「結局、しばらくは様子を見るしかないか……」

そんな俺の言葉が聞こえたのか聞こえてないのか……ルルーセリアは一瞬首を傾げ、その後は一コリと笑顔を浮かべた……

自由貿易都市ガルニール西方に、偽りの砂漠と呼ばれるダンジョンがある。ガルニールの街と同じ位の広さを持つこの場所は、かつては街があつたと言われている場所で、遺跡タイプのダンジョンとして認知されている。外周には石の壁があり、出入口は南部に一つあるだけ。ガルニールからこの場所までは草原地帯だと言うにも関わらず、遺跡の内部へ足を踏み入れればそこは砂に覆われた地面。本当の砂漠ではなく、遺跡の中だけが砂漠地帯になっている。その為、ここは偽りの砂漠と呼ばれている訳だ。

「さて。俺達がここに来た理由は分かってるな？」

そんな偽りの砂漠の入口で、艶やかな真紅色の髪、天真爛漫さが伺える金色の瞳、そして何よりも見る者を惹きつける可愛くも美しいもある容貌の少女 ルルーセリア＝エルド＝ガーネットに向かつて、俺 バナッシュ＝ラウズコートはそんな言葉を投げかけた。

「うん！ こはんのため！」

元気良く頷くルルーセリアを見て、一抹の不安を抱きつつもとりあえずは理解しているのだから良いかと自分を納得させる。

ルルーセリアは見た目に反してかなりの大食いだった。今は人間の姿をしているが、本来はドラゴンである事を考えればおかしくはないかもしねれない。しかし問題はある。一言で言えば金だ。食べ物はタダじゃない。当然金が必要だ。どうやって手に入れたのかは分からぬが、出会った時から着ていた服が上質な物で、衣服に関しては急ぐ必要はなさそうなのが救いだろう。

上質と言つたが、それは素材だけの話ではない。冒険者ならば大概は愛用するが、回帰の魔法がかけられた服を着ていたのだ。回帰の魔法がかけられた衣服は、多少の汚れや消耗をなかつた事にしてくれる効果がある。多少時間はかかるが、魔法をかけた状態に自動的に戻るのだ。冒険者にとつては必需品と言え、当然衣服だけでなく

装備品も回帰の魔法がかかつた物を用意する事が多い。多少値は張るが、それでも回帰の魔法がかかつているかどうかで随分と懐具合が変わつてくるからだ。

と言う訳で、当面は服の事は気にしないとして、問題は食費になる。俺一人ならしばらくは暮らせるだけの貯えはあるが、宿泊費も増え、食費も増え となると余裕はなくなつてくる。つまる所、俺達は金稼ぎの為にダンジョンへとやつってきた訳だ。

「そう言えば、お前その姿で戦えるのか？」

着いて来るなと言つても勝手に着いて来る事は分かりきつていたからここまで連れて來たが、戦う術があるのかどうかはかなり重要なだ。

「お前じゃない。わたしはルルーセリアだ」

そう言いながら頬を膨らませるルルーセリア。こいつやって頭の中で呼ぶ分には楽だが、正直少し言い難いんだよな。

「それじゃあ、ルルーでどうだ？」

「ルルー？ わたし？」

「ああ。その方が呼びやすいしな」

「……分かつた！」

俺の言葉の後に少し考へると、にぱっと笑顔を浮かベルルーセリ

ア 改めルルーは頷いた。

「それで、ルルーは戦えるのか？」

「戦えるよ！」

何故だか嬉しそうに笑顔を浮かべながらぶんぶんと右腕を回すルルー。はつきり言つて戦える様には見えない。けど、こいつドリゴンだしなあ……

まあ、最悪精神体化して貰えれば良いか。
アストラル

「分かつた。けど、基本的には俺が戦うから、ルルーは自分の身を守つていれば良いからな」

「うん」

俺の言葉にルルーは素直に頷く。聞き分けが良くて助かる。

「さて、一応この場所について確認しておくぞ。ここは偽りの砂漠と呼ばれる遺跡タイプのダンジョンだ。当然モンスターが徘徊しているが、地上部分はそれ程危険な相手はない。一部厄介な相手はあるが……それでも地上部分は全て探索されているし、金目の物はないだろうな」

モンスターの部位を持ち帰つて金に換える事は出来るが、それだけじゃあ大した稼ぎにはならない。ならどうするのか……

「俺達が目指すのは地下だ。数年前に、遺跡のほぼ中心地点にある建物から地下迷宮へと繋がる入口が見つかった。現在は地下3階辺りで探索が止まっているらしい。どこまで続くかは分からないが、まだ下層があるのは確かだ。おそらく今も他の冒険者が探索しているだろうが……そいつらを追い越してでも先に進み、お宝を手に入れる。まあそんな所か。何か質問はあるか？」

「大丈夫！ わたしはバナッショウに着いて行けば良いんだよね！」

「ああ。それじゃあ行くぞ」

「うん！」

ルルーの元気全開な返事を合図に、俺達は偽りの砂漠へと足を踏み入れた。

常に周囲を警戒しながら歩く俺は、モンスターの接近に逸早く気が付いた。

独特な羽音を鳴らしながら接近してきたのは、イージーフライと呼ばれるトンボの様なモンスターだ。ただし大きさは人間の赤ん坊程はある。大体は数匹で群れを作つて飛んでいるのだが、近付いてきたのは一匹だけだ。近くに群れの仲間がいるかもしだれないが、合流される前に倒せば問題ないだろう。そう判断し、俺は剣を抜く。イージーフライの攻撃方法は単調だ。石の様に固い頭部を利用して高速飛行で突進してくるだけ。突進中は殆ど方向転換も出来ないが、タイミングさえ掴めば避けるのは簡単だ。既に俺を標的として

見做しているのだろう。羽音に微妙な変化があつた。通常飛行から、攻撃の為の突進飛行へ変わつた音だ。

一匹が連携する様に時間差を置いて突進するつもりなのだろう。やや距離を開けて飛んでいるのがここからでも見える。なら

一匹目をかわし、二匹も当然かわす。が、一匹目はかわすと同時に剣を振るう。イージーフライは頭以外は脆い。高速飛行と言つても捉えきれない程でもない為、回避と攻撃のタイミングを合わせる事も難しくない。

難なく一匹のイージーフライを仕留め、一度通過したもう一匹へと視線を向ける。既に旋回し、再び俺へと標的を定めている様だ。なら次に俺が取る行動も決まった。一匹目と同じ様に、突進を避けつつ胴体を斬つて終わりだ。

結局一匹しかいなかつたイージーフライを倒した事で、偽りの砂漠に入つて最初の戦闘は難なく終わりを告げた。

俺は剣を横薙ぎに払い、襲いかかってくるマッドウルフを斬り飛ばした。

イージーフライとの戦闘後、特にモンスターと遭遇する事なく中心地に近付けたまでは良かった。が、後もう少しと言う所で狼型のモンスターであるマッドウルフの群れと遭遇してしまった。黄土色の毛並みのマッドウルフは、砂地に擬態するかの様に寝そべつて獲物を待つ。まあその存在には気が付いたから奇襲を受けた訳じゃない。数も五匹と多くはなかつた。が、三匹のマッドウルフを倒した所で別の群れが合流。しかもそちらさんは八匹となかなかの大所帯。殆ど普通の狼と変わらないマッドウルフではあるが、その生命力はモンスターの中でも上位に位置する。防御力が高い訳じゃない。とにかくタフなのだ。自然治癒力も高く、多少の傷は直ぐに塞がつてしまつ。大して強くはないが、数がいると面倒な相手だ。それが、今は十匹。油断しなければ負ける事はないが、ルルーの事が気がかりではある。

「くつ

正面から飛びかってきたマッドウルフを叩き伏せると、次の瞬間に右側からもう一匹が襲つて来る。それを迎撃しようとすれば今度は背後からと、それぞれの合間を縫う様に俺へと襲いかかつて来る。数匹同時の時もあり、正直ルルーの心配をしている余裕がない。だが、逆に言えばそれだけの数が俺に向かつてきていると言う事だ。正確に数を把握している訳ではないが、おそらく合流した八匹の群れが俺へと襲いかかつてきているのだろう。違う群れである一匹は、いくら同種族と言えど上手く連携が取れない為ルルーに向かつているんじゃないかと思う。

「出来れば地上で使いたくなかったんだがな……」

「そのまま体力が削られていくのも問題だ。俺は右手に持つ魔法剣

へと魔力を流し込む。俺自身は魔法を使う事は出来ないが、魔力を扱う事は出来る。俺の持つ魔法剣は、魔力を流し込む事によつてその力を顕現する。

「喰らえ！」

バチバチと電気を帯びた剣から、次の瞬間には雷撃が放たれる。一筋の閃光が走り、俺に向かってきていた一匹のマッドウルフが黒焦げになつた。

仲間が死んだ事で一瞬奴らの動きが止まつた。その隙を逃さず、再び魔力を込めながらルルーへと視線を向ける。するとわくわくとした表情でこちらを見つめているルルーの姿が目にに入った。どうやら襲われている様子はない。とりあえず心配はなさそうだ。

俺が視線を外した事で好機と判断したのだろう。三匹のマッドウルフが同時に俺に襲いかかつて来た。左方から跳んできた奴には雷撃を放ち、正面のマッドウルフに向かつて俺から近付く。やや身体を左にずらし、その胴体を斬り裂きながらそれ違う。右方の奴は俺が位置を変えた事で着地するまで標的を失う運びとなつた。

雷撃を受けた一匹は絶命した様だが、直接斬つた奴は鈍い動きで俺から離れて行く。代わりに着地した一匹と、残つていた内の二匹が跳ぶ。再び剣に魔力を込めながら、同時攻撃の合間を縫つ様に跳躍。そこに残りの三匹が透かさず襲いかかってきた。既に魔力を得た魔法剣には雷の力が宿つている。が、今度は雷撃を放たない。俺は群れから一番離れられる位置のマッドウルフへと向かつて跳躍し、帶電したままの剣を振るつた。その一撃はマッドウルフの右前脚を斬り裂く。これで死にはしないだろうが、機動力は失つたはずだ。それでも時間が経てば再生するのだろうが、まともに動けるのが後四匹になつた訳だ。ダメージを負つた一匹が回復する前に数を減らす必要がある。

「少し勿体無いが、アレを使うか」

ぼそりと呟きながら、俺は空いている左手でマントの内側にあるポケットから球状の魔法具を取り出す。手に平にすっぽりと納まる

大きさのソレは、重力場を発生させる魔法を顕現する道具である。使い方は簡単だ。誤作動防止の為のロックを解除し、発生させたい地点に向かつて投げれば良い。特に発動のキーワードを必要とせず、衝撃を与えると重力場が生まれる仕様なのだ。

「ほらよ」

衝撃は強くなくても良い。出来れば四匹同時に当たる所だが、基本的には俺を囲む様に動いている為それは難しい。だからこそ何とか奴らの攻撃を避けながら一か所に固まる様に誘導し、俺は魔法具を放つた。

魔法具が地面に落ちた刹那、その地点から暗い蒼色がドーム状に広がっていく。それこそが重力場で、上手い具合に三匹のマッドウルフを飲み込んだ。重力場の顕現される範囲は半径5メートル程度。そこに巻き込まれない様に距離を取りつつ、再び剣に魔力を流し込む。重力場に捕まらなかつた一匹は都合良く俺から離れる様に距離を取つた。だからこそ、今がチャンスだ。

「ジャッジメント裁きの雷！」

俺の持つ魔法剣は雷を操る。魔力を通せば雷を生みだし、そのまま放つ事も剣に雷を付加し攻撃力を上げる事も可能だ。だが、それは魔法剣としては最低限の能力に過ぎない。ある程度能力の高い魔法剣は、大概が特定のキーワードを紡ぐ事によつて真の能力を発揮する。裁きの雷は俺の持つ魔法剣のそんな能力の一つだ。

簡潔に言おう。先程から放つてゐる弱い雷撃とは比較にならない巨大な雷球を頭上に作り出し、それを落とす。ただそれだけの能力だ。が、威力は雷撃よりも格段に跳ね上がる。その上大きいが故に効果範囲が広い。とは言え、正直素早く動き回る相手には当たる難い。だがしかし、現状では最も適した攻撃方法だろつ。

巨大な雷球が、重力場に捕まり動けないマッドウルフ達をその熱量で焼き尽くす

マッドウルフは生存本能が強いモンスターでもある。まともに動ける最後の一匹。どうやら動けるくらいには回復したらしい手負い

が一匹。合計三匹のマッドウルフが、ここにきてようやく俺には敵わないと言つ事を悟つたのだろう。群れとして生き残る事を選んだらしく、俺達から逃げる様に離れて行つた。

「大丈夫か？」

剣を鞘にしまい、俺の戦いを見ていたルルーに声をかけた。

「うん」

と、笑顔で頷くルルー。

「それにしても、最初に襲つてきた奴らはどうしたんだ？ 気が付いたらもう逃げてたみたいだが」

ドラゴンとは言え今は人間の姿をしているルルーが、武器も持たずマッドウルフを短時間で跡形もなく消滅させるなんて不可能だと思つ。おそらく逃げて行つたと思うんだが……

「一発なぐつたら逃げて行つたよ？」

そう言いながらルルーは笑顔で拳を握りしめた。

たつた一撃を受けて、相手が格上のドラゴンだと気が付いたのだろう。そうに違ひない。素手の少女が自分が苦労して追い払つたモンスターを簡単に退かせたなんて思いたくない。

「よし。それじゃあ先に進もう」

ルルーを促し、俺達は殆ど崩れていないう石造りの建物へと足を踏み入れた。

砂漠の下の地下迷宮①

偽りの砂漠の地下に広がる迷宮。その最初の階層へと降りた俺とルルーは、真っ直ぐに下の階層へと続く階段を目指した。

この場所に来る前に、以前この迷宮を探索した冒険者達が作った地図を入手しておいたのだ。それなりの額を使つたが、それなりに信用の利く店で買ったので問題ないだろう。困った事に、こういった品は偽物が出回るのだ。

この地図に記されているは地下3階まで。一応地下3階は全てマップピングされている様だが、更なる階下に潜る事なく撤退しているのだから、地下3階に関してだけは不備がある可能性がある。その辺りは気を付けないと。

歩を進めながら改めて地下迷宮内を観察する。どうやらこの迷宮は石造りが基本らしい。外にある建物も石造りだつた事から、そもそも石造りが主流の街だつたのだろう。薄暗い通路ではあるが、所々に明かりを灯す魔法具が設置されている。灯せる明かりは極端に弱いが、空気中にある周囲の魔力を吸収する事で半永久的に明かりを灯し続ける魔法具だ。これは珍しくない代物で、こういったダンジョンには必ずと言って良い程設置されている。むしろ現在も人々の生活にはなくてはならない魔法具である。

道中モンスターと遭遇する事もなく、難なく地下2階へと降りる階段へと到着する。階段を下ろうとした所でモンスターとモンカウントなんて事は今度はなく、俺達は無事に地下2階へと到達。今度も真っ直ぐに階段へと向かう。

それにしても、モンスターがいなき過ぎる。モンスターと言えど生物である事に変わりはない。そこから自然発生する訳ではないが、地上にも地下にもモンスターは存在している。根城にしている場所はあるのだろうが、迷宮内をうろついていてもおかしくはないはずだ。いくら最短で階段を目指しているとは言え、もう少し

その姿を見かけても良いものだ。

「少し急いだ方が良いかもしないな」

「どうして？」

ふと俺が漏らした言葉にルルーが食いついてきた。

「モンスターがいなさ過ぎる。予想はしていたが、おそらく他の冒険者が俺達よりも先に進んでいるんだ」

その腕前までは分からぬが、せっかくここまで来たのにお宝を奪われたくない。まあ、それは向こうも同じだろうが。

ただ気がかりなのが、モンスターの死体さえ見当たらない事だ。道中で先を進む冒険者が倒したのなら、当然その死体が転がっているはずなのだ。

まあ、とりあえずは警戒しながら進むしかないか。

不安を消し去る様に思考を切り替え、少しだけ歩調を速めて先へと進む事にした。

俺が危惧した通り、地下3階の地図には不備があった。否、少なくとも階段までの通路は間違つていなかつたが、行き止まりだと記されていた道に奥があつたのだ。何故その事に気が付いたのかと言えば、地下4階へと下る階段に差し掛かつた時に見つけたモンスターに原因がある。

不死者

アンデッド 死んだ生物に闇の精霊が憑依する事で死する事のないモンスターへと変化した存在。闇の精霊と言つても自然界に存在する精霊とは違い、瘴気や惡意の塊と言える意志なき存在が闇の精霊だ。不死者と化したモンスターに生前の記憶等当然なく、ただ生気を求めて生物を襲う存在となる。普通の人間ではほぼ滅する事の出来ない存在だ。

倒せない訳ではない。が、戦つだけ不毛な相手だ。特に今回遭遇した相手は人間の形をしている。おそらく死んでからまだそれ程日が経っていないのだろう。血肉があり、困った事に所々壊れている

ものの鎧を着て武器まで持つてゐる。冒険者の成れの果てと言つ奴か……

「不死者がいるなんて情報はなかつたんだけどな……」

なんて呴いてみても意味がない。俺には不死者を浄化する手立てがない。戦うより逃げた方が確実な為見つからない様に移動した所、丁度良く隠れられそうな隠し部屋を見つけたのだ。地図でその位置を確認しようとした所、行き止まりになつていた訳だ。

今の所こちらに向かつて来る様子はないが、ここにいれば見つからないと言つ保証はない。しかし奴の位置が分からぬ以上は迂闊に動けない。さて、どうしたものか……

とりあえず何か役に立ちそうな物はないかと部屋の中を見回すが、見事に何もない。この部屋が何の為に存在しているのか分からぬ程だ。まあ、もしかしたら何かがあつたのかもしれないが。

難点はこの部屋が狭いと言う事だろうか。大の男が五人入れるか入れないかと言つた程度の広さだ。戦闘を行なうのなら、通路の方がまだマシだろう。となると、覚悟の上で階段に向かつた方が得策かもしけない。運が良ければそのまま階下に降りられるかもしねないしな。

「ルルー」

「なに?」

俺の考えを伝える為に、小さめの声でルルーに呼びかけた。予め俺の声量に合わせて喋る様に言つてあつた為、ルルーも小さな声で聞き返してきた。

「これからまた階段に向かうが、出来ればさつきの不死者とは戦いたくない。可能なら奴に見つかっても一気に階段を降りる。最悪戦闘になつても、相手の攻撃を防ぎながら下に向かう。良いな?」

「わかつた。でも、あんなの燃やしちゃえれば良いのに」

「何て、聞き捨てならない言葉を放つルルー。

「どう言つ事だ?」

「わたしの炎なら、あんなの簡単に燃やせるよ?」

そう言えば」「こつはドラゴン それも炎を得意とする火龍だった。

総じて不死者は炎に弱い。生半可な炎では意味はないが、身体がなくなつてしまえば最早モンスターとしては成立しないのだから当然だ。身体を消滅させる事が、不死者を滅する方法の一つだ。但し、それこそ再生不能なまでに細切れにしない限りは切断しても無駄だ。マッドウルフの様に無くなつた部位が再生する事はないが、ただ切れただけなら元の様にくつつく。最悪腕がなくても痛みを感じないがそのまま襲いかかってくる。足がなければ腕や反動を使って飛び掛つてくる。とまあ何とも気持ち悪い光景を見る事になるだけだ。俺の魔法剣では一撃で消し炭になんて出来ないが、確かにドラゴンの吐く炎なら可能だらう。

「いや待て。その姿でブレス吐けるのか？」

「ううん。バナッショウがわたしの力を使えば良いじゃない」「なるほど。纏いし者の力を使えば良いと言つ訳か。けど、それならやつぱり出来れば使いたくない手だな。俺は俺自身の実力で、冒険者として行ける所まで行きたいのだ。とは言え、死にたい訳じゃないからな……」

「それは最後の手段に取つておこう」

「そう？」

「ああ。よし、それじゃあ行くぞ」

不思議そうに首を傾げるルルーを促し、俺達は隠し部屋を出た。とりあえず、直ぐ近くに奴はない様だ。生き物ではない不死者の気配は希薄だ。そして奴らには殺意と言つものがない。足音なんかはするから、近くにいれば普通に気付く事が出来るはずだ。

無言で着いて来る様にルルーを促し、そのまま来た道を戻る。幸い、階段付近にも奴の姿はなかつた。不死者との戦闘を避け、俺達は地下4階へと進む事が出来た訳だが……

奴が下に降りた訳じゃないと、今は信じていい所だな……

砂漠の下の地下迷宮2

偽りの砂漠、地下迷宮地下4階。

そこは今までと変わらない石造りの迷宮ではあるが、地下3階までとは明らかに異質な雰囲気を醸し出していた。

「これは……瘴気か？」

全身を覆う空気がどことなく重苦しく、気分が悪くなつて来る。そもそも瘴気とは、特定のモンスター や魔族が持つ魔性の気配だ。しかし稀にこうして空氣中に充满する事もある。

瘴気は普通の生物にとつては害でしかない。それ程強い瘴気ではないが、これだけ満ちているのなら不死者が生まれてもおかしくはない。稀に自然発生する事もあるが、さてこの先に何がいるのやら

……

「バナッショ、じこ氣持ち悪いね」

どうやら、ドリゴンにとつても瘴気は害のあるものらしい。

「我慢出来るか？」

「……うん」

今までの快活さが感じられない、弱々しい返事だった。まあ、少なくとも気分が悪くなる以上の害はないだろ？。もつと瘴気が濃くなると話は別だが……

「慎重に進むぞ」

「うん」

周囲の気配を探りながら、ゆっくりと歩を進める。とりあえずモンスターの気配は感じられない。瘴気が邪魔して上手く気配を探れないが……多分大丈夫だろ？。

階段を降りた場所は小部屋になつており、出口は一つだけだった、通路に進むとしばらくは一本道だったが、天井や床、壁にも注意を払う。罠の類がある可能性もあるしな。

とりあえず視覚的にはモンスター や罠の類は見当たらない光景が

続く。しばらく進むと十字路へと差し掛かる。安全を確認してから、普段から持ち歩いているマッピング用の用紙を取り出す。

冒険者たる者、マッピング用紙を持ち歩くのは当然だ。既に踏破されたダンジョンに行く場合は持つて行かなくても問題はないが、もしかしたら未発見の部屋等が見つかる可能性もゼロではない。地図が作られていても自身の知りたい情報が足りていない事もある。その場合は既存の地図に書き足すと言つ手もあるが、大半の冒険者は分かりやすい様に自分で再マッピングを行なう。俺の場合は最低限の情報しか書き込まない為、自分で作ろうが他人の使つた地図に追記しようが大差はない。が、やはり未踏破のダンジョンに潜る事をメインにしている俺にとってこの用紙は必需品だ。

マッピングにおいて最も難しいのは距離を把握する事だ。用紙にも色々種類はあるが、俺の持つている物は完全なる白紙だ。感覚的な部分に頼る事もあるが、基本的に照明魔法具は等間隔に設置されている為それを用意に距離を測つてはいる。照明魔法具の数を記入し、分かれ道ではその印を付ける。そしてどの道を通つたか等、俺が行なうマッピングはその程度だ。

地下迷宮の厄介な所は広さが分からぬ所だ。地上から上に登る塔等はその広さを予想する事が出来るが、地下だと断定出来る要因がない限り予想する事すら難しい。一応、この場所で言えば偽りの砂漠そのものの広さ程度だと判断するのが妥当な線だろう。が、それにしても根拠はない。とにかく自分の目で確かめるしかない。

「どっちに行くの？」

しばらく黙つていた俺に、ルルーがそう尋ねてきた。単純にどこに進むのか迷つていてると思ったのだろう。まあそんな様なものだが、「とりあえず右に進もう」

判断材料が全くない場合、俺は分かれ道を右から進む事にしている。特に理由はない。

俺は答えて直ぐに歩き出しだが、ルルーがきちんと着いて来ているのを確認はしておく。

よし。問題なく着いて来てるな。

周囲に意識を巡らせながら、やや右曲がりになつた通路を進む。やはり罠は見当たらず、モンスターとも遭遇しない。数分歩くと、曲がっていた通路は再び直線の道へと戻る。おそらく階段のあった部屋の後ろを通過した様な形になつていて思われる。そのまま進むと、木製の扉が目に入ってきた。

手振りでルルーに止まる様に示し、それが伝わったのを確認すると足音を立てない様に、又気配を出来る限り絶ちながら扉へと近付いた。

どうやら鍵はない様だが、扉を開けた途端に罠が発動すると言つ可能性もある。

罠の有無を確認出来る様な道具もなければ、あつたとしてもそれを解除する知識も道具もない。俺にとつて罠は勘で回避するモノで、発動させてしまったとしても力付くで解決するのが常だ。しかしそれは一人だったから出来た芸当で、連れがいる場合にはなかなか難しい手だ。

一度ルルーのいる場所まで戻り、俺の考えを伝える事にする。

「ルルー」

「どうしたの？ 進まないの？」

話しかけた俺に対し、次の言葉があると思わないのかそんな風に聞いてきた。

「進むけどな……もしかしたらあの扉に罠があるかもしれないから、用心して欲しいって言おうと思ったんだが……大丈夫か？」

「うん。でも、あの扉には罠なんてないよ？」

どこかで聞いた事のある様な言い回しだ……ああ、ついさっき不死者に遭遇した時か……

「分かるのか？」

「うん。あの扉からは悪意が感じられないもん」

悪意、ね……

確かに、罠を設置する以上はそれなりに意志を込めるだろうが、

それが悪意とは限らない。と呟つか、ドラゴンにそんな能力があったとは知らなかつたな。

「悪意以外の何かが理由で罠があつたりはしないのか？」

「絶対とは言えないけど……でも、どんな理由であれ誰かを罠にかけようつて言う思惑は、たとえ小さなものでも悪意につながるはずだよ。その扉からは、そう言った感情がまったく感じられないの。だから、多分何もないはず」

なるほどな。一応納得は出来る。後はルルーの能力を信じられるかどうか……

「分かった。でも、万が一つて事もあるからな。一応この場所で警戒はしておいてくれ。問題なれば手招きするから」

「うん」

そんな会話を経て、再び扉へと近付く。

ドアノブに手をかけ、そつと奥へ開いた

何も起こらない。隙間から奥を窺い見るが、特に危険はなさそうだ。俺は離れているルルーを手招きで呼び、改めて扉を開き切り、追いかけていたルルーと共に扉の奥にあつた部屋へと足を踏み入れた。

不死者との戦い

「どう言つ事だよ……」

俺は腰に納めていた剣を抜く事を余儀なくされ、ルルーはルルーで腕をぶんぶん振り回しながら暴れている。

俺とルルーが部屋に入った所までは良い。扉に罠はなく、特に問題はなかつた。が、ルルーが扉を閉めた刹那、部屋の床が光を放つた。思わず目を閉じて、光が收まり目を開けると、そこには俺に向かつて剣を振り下ろす男の姿があつた。

結果、俺は咄嗟にそれを避け剣を抜き応戦している訳だ。ルルーも似た様なものだろう。

男の目には生気がなく、体中至る所に傷があり血も流れている。不死者と一度目の中カウント。一度目にして、今度は何体もの不死者と同時に遭遇。何て不幸だ……

元は人間だつた男の不死者が三人。皆当然武装している。そして元は普通のモンスターだつたであろう獣型の不死者が三匹。身体の一部が崩れている為元が何のモンスターだつたのかは良く分からないが、四足歩行のモンスターだつたのは判別出来る。生息地から察するにマッドウルフ辺りが妥当な線だろう。

そんな獣共を殴り飛ばし、再び襲つて来るとまた殴り飛ばす。そんな事を繰り返すルルーは置いておくとしてだ……

振るわれる剣を避けながら周囲を見回すと、ここはそれなりに広い大部屋だと事が分かつた。さつきまでいた部屋とは明らかに違う場所だ。どうやら開けた扉が閉じられる事で、転移の魔法が発動する罠が仕掛けられて様だ。それ自体はまあ仕方ない。が、問題は複数の不死者だ。さつきまでいた場所とそれ程瘴気の濃さは変わらない様に思えるが、こつも数がいると何かしらの意志が働いている様に思えてならない。

「……まずはこの場をどうするか考える方が先か」

幸い、部屋は密室ではない。少し距離はあるが扉が見える。どうやらこの部屋に扉はその一つしかない様だ。まさか、あの扉に罠があるなんてオチはないだろうと思いたい。

「ルルー！ この場は逃げるぞ。あの扉まで走れ！」

そう叫ぶと同時に、俺は扉へと向かって駆け出した。俺を囮む三人の不死者に対し雷撃を放ち、直ぐに追つて来れない様にしておく。ルルーも俺の言葉を素直に受け取り、むしろ俺よりも早く扉へと駆けて行つた。

ルルーが無用心にも扉を開け放つが、何も起こらなかつた為良しとしておく。まあ俺が注意しなかつたのも悪いんだが。

俺も扉に辿り着き、振り返り様に雷撃を放つ。特に的を絞つた訳ではないが、接近してきていた獣型の不死者に直撃していた。直ぐに扉を閉め、ルルーを促し部屋の外に伸びる通路を真っ直ぐに駆けて行く。この先に安全な場所があると良いんだが……

そんな思いも空しく、俺達が辿り着いたのは新たな戦場だつた。

「滅するは闇、不浄を祓う聖なる炎

ホリーフレア
聖光の炎！」

前方で戦う何者かが、そんな言葉と共に魔法を放つた。紡がれた言葉の通りに炎が顯現し、人の姿をした不死者を焼き払つた。

扉はなかつたが、通路が開け小広間と言つた感じの空間。そこには肩口で切り揃えた黒髪の女が戦つていた。

「どうやらちゃんとした人間が残つてたみたいだな」

女から少し離れた位置で立ち止まり、俺は邪魔にならない様に声をかけた。

「新手かと思つたら、そつちこそ真つ当な人間みたいね」

「手を貸すぜ。まあ、止めは浄化の炎を使えるあんたに任せることだな」

「……分かつたわ」

それは短いやり取りだつたが、冒険者にとつては十分なものだつた。ルルーには下がつておく様に言い、俺は走つている最中に納めた剣を再び抜き放つ。

「喰らい付く雷」
サンダーバイブ

剣を抜くと同時に魔力を込め、能力を発現するキーワードを紡ぐ。俺の剣から放たれた一筋の雷光が、対象となつた一人の不死者に巻き付く。それは蛇を模つた雷で、足元から頭上へと螺旋を描き伸びたと思えば、まるで大きな口を開いたかの様に先端が裂け、頭から丸のみにする勢いで降り注いだ。

ダメージは与えただろうが、これくらいで不死者を滅する事は出来ない。

「頼むぞ！」

「任せて！」
聖光の炎！
ホーリーフレイア

女が再び魔法を放つが、俺はその結果を見ずに次の相手へと向き直つた。

その瞬間に改めて状況を把握する。敵は人間型の不死者が三人。とは言え今の魔法で一人減つただろうから後二人だ。

対峙した二人目の不死者に雷撃を放ち、その隙に俺に接近してきたもう一人の剣戟を左腕の盾で防ぐ。

「舐めるなよ」

盾で不死者を押しのけ、態勢を崩した隙に魔力を込め帶電させた剣で斬り払う。その一撃は不死者の右腕を斬り落とし、持つていた剣が力ランと音を立てて落ちた。

「灼熱の怒り！」

当然腕を斬り落とされた程度で怯む不死者ではなかったが、そこに炎の魔法で追撃が入つた。浄化の炎ではない為それで滅する事は出来ないだろうが、十分な足止めにはなるだろう。距離を考えて俺が手を出す必要はないはずだ。なら、次は先に雷撃を放つた方だ。そう意識を切り替えた次の瞬間には、相手にしようと思っていた不死者が俺の直ぐ傍まで迫つてきていた。背後で女が魔法を放つ声が聞こえたが、それはもう一体に向けて放つたのだろう。ならば、もう一度浄化の炎を放つべきだな。

不死者の剣戟を剣で防ぐと同時に、剣に魔力を込める。

「裁きの雷」シャッジメント

頭上に現れた雷球が落ちて来る。俺と剣戟を交わす不死者はそれを避ける事は出来ないだろう。このままだと俺も巻き込まれる。が、俺は雷球が直撃する間合いを理解している。絶妙のタイミングで後方に飛び、雷球が不死者を飲み込む。これだけでもしばらくは再起不能にはなるだろうが、滅した訳ではない。

「聖光の炎」ホーリーフレイア

俺が指示する必要等無く、女は再び浄化の炎を放った。これで、この場にいる不死者は全て滅した訳だ。

「バナッショ！ 後ろから来るよ！」

ルルーの声で俺は追われていた事を思い出した。

「話は後だ。とりあえずこの場から離れよう」

「そうした方が良いみたいね」

女は俺の言葉に素直に頷いた。

安全な場所があるとは思えないが……

「あたしはそっちから来たの。とりあえず追われていた訳じゃないから、他に進むよりは安全だと思つわ」

見回すと、四方全てに道がある。どの道が正解なのかは分からない。となると……

「なら、そっちに行つてみよつ」

この女がどこまで信用出来るかはまだ判断出来ないが、少なくとも自分が危険になる様な事はしないだろう。

俺達は女が指した道へと進む事にした……

一時の休息（前書き）

階層の表記に一部不備がありましたので修正しました。

一時の休息

「「」の辺りなら大丈夫そうね」

通路をしばらく進んだ所で、扉のない小部屋の様なスペースに出た。そこで足を止めると、その女はそんな言葉を漏らした。

「今から結界を張るから、少しだけ様子を見てて。もし敵が入つて来る様なら足止めもよろしく」

そう言いながらマントの内側から四枚の紙を取り出す。それらを通路との境目を含む四方に置き、呪文を唱え始める。

「魔を祓いし聖なる光よ、我らに暫しの安息を与え賜え セイクリッド
方陣」 サークル

その言葉に応じる様に女から光が溢れ出し、四方に置かれた紙へと伸びる。すると紙からも光が溢れ出し、今度は四方の紙同士を光の線が繋ぐ。

「これは……？」

「魔方陣を利用した結界魔法よ。あたしの力じゃ本来は人一人分くらいしか展開出来ないんだけど、魔法の効果を高める魔方陣を利用して、このスペース全体に結界を展開したの」

俺の疑問に女は答えたが、少しだけ冷ややかな視線を送られた。

「悪いな。余り魔法には詳しくないんだ」

最低限の知識は持っているつもりだが、俺自身が魔法を使えないんだから仕方ないだろう。

「あら。別に何も言つてないわよ？」

……良い性格してやがる。

「まあいいさ。それで、この結界はどれくらい持つんだ？」

結界魔法とは、現象物質問わず外部からの干渉を封じる防御用の魔法だ。その範囲や効果時間は使用者によって異なる。魔法陣が魔法を補助するモノなのは知っているが、あんな風に紙に描いた物があるのは知らなかつた。

「三十分は持つと思つけど……瘴氣のせいで誤差は出るかもね」

「なるほど。それじゃあ、さつと話せる事は話しておいた方が良さそうだな」

「そうね」

俺の言葉に女も頷く。とりあえずは自己紹介か。

「俺の名前はバナッシュ。こいつはルルーセリア。見ての通り冒険者だ」

「見ての通り？ あなたはともかく、その子は冒険者には見えないんだけど……」

「まああいつは駆け出しだからな。それで、あんたは？」

ルルーの事を深く問われても答える訳にはいかない。イビルドラゴンの様な人に牙を剥くだけの下等龍種とは違い、真紅の火龍と言う知性の高い至高龍種の存在は稀有だ。その子供ともなれば人の手でも対抗する事が可能であり、狙われる可能性も出てくる。

俺は女の言葉を適当に流し、相手の自己紹介を促した。

「あたしはメリ亞。あんた達と同じく冒険者で、魔法使いよ」

ただの魔法使いじゃない様だが……まあ、言えない事があるのはこつちも一緒だ。お互い信用している訳じゃないしな。

「それで、あんた達は何人のパーティだつたんだ？」

「……へえ、意外と切れるのね」

俺の問いかけに、スウッと手を細め女人 メリアはそんな言葉を口にした。

「どう言つこと？」

そんな俺達のやり取りに、ルルーが不思議そうに言葉を挟んで来た。

「さつきから遭遇している不死者は比較的最近発生した奴らだつた。と言つ事は、俺達よりも先にこの場所にきた冒険者が死に、そのまま不死者になつた可能性が高い。で、浄化の炎を使える魔法使いであるメリ亞。さつきも一人で数人を相手にして引けを取つていなかつたから、おそらく仲間が殺され、敵が増えたんだろうよ。そこで、

その内の何人が仲間だつたのかつて聞いた訳だ」

「へえ、バナッショ頭良いね」

「そんな事ないさ……それで、どうなんだ？」

その答えによつては、まだまだ不死者がいる可能性もある。割と大事な情報だ。

「あたし達は五人でこのダンジョンに挑んだんだけど、途中で他の冒険者に会つたわ。そのパーティは四人パーティで、大所帯にはなるけど力を合わせる事にしたの。合流したのは地下3階で、瘴気の存在が気にかかつたからね。最初は手を組んで正解だと思つてたわ。不死者の群れと遭遇するまではね」

「不死者の群れだと？」

「ええ。地下5階にあつた広場で、あたし達は巨大なサンドワームと遭遇したの」

サンドワーム　そもそも大きなミニマズの様なモンスターだが、それが巨大つて……

「壁に穴が開いててね。その広場はサンドワームの餌場だつたらしくて、周囲には冒険者のなれの果てや小型のモンスターの死骸なんかがたくさんあつたわ。それでも気にせずサンドワームと戦つっていたんだけど……」

「死骸が不死者化したのか？」

「ええ。その時点であたし達はその場から逃げる事にしたわ。でも、即席のパーティじゃ逃走時にチームワークなんて發揮出来る訳がないじゃない？　それは悲惨な逃走劇だつたわ。後はあなたの想像通りよ」

なるほど。だが、やはり納得いかない部分がある。そこまで急に不死者化する程濃い瘴気ではない。だと言うのに、死して直ぐに不死者化している。と言う事は、やはり何者かの意思が働いているとしか思えない。

「どうやらあなたも同じ考え方の様ね」

メリ亞も同じ考え方を浮かべているらしい。まあ、ある程度瘴気に

ついての知識があれば誰でも同じ答えに辿り着くだろう。

「俺としては、ここから脱出する事をお勧めするんだが……あんたはどうだ？」

「そうね……正直魔力にも限界があるし、今が退き時だと思つわ。あなたとならそれも可能そうだし」

それは単身での脱出が難しいと言う事だらう。俺の場合、最後の手段としてルルーを纏う事で脱出可能だらうが、現状一人での脱出は厳しいのが現実だ。

「意見が一致して良かつたよ。上に戻る道は分かるか？」

「ええ。このまま戻れば階段があるわ」

そんなメリアの案内の元、俺達は階段へと向かつた。

その道中不死者やモンスターと遭遇する事はなく、階段のある大部屋まで辿り着いた。きちんと確認はしなかつたが、メリアの言葉から察するにここは地下5階。地下4階に上がってもメリアの案内なしにはスムーズに脱出する事は出来ない。この調子で敵と遭遇しない事を祈つておこう。

「まったく……困ったものですね」

突如聞こえてきたその言葉に、俺達は足を止めた。

姿は見えない。だが、気配は感じられる。

「誰だ？」

「このままあなた方を逃がす訳にはいかないのですよ」

俺の問いかけに答えるつもりはないらしい。どちらかと言えば高い声色だが、男の声だと判別出来る。未だ姿は見せないが、一体何者なのか……

「まあ、不自然な不死者化の黒幕つて所なんだろうが」
少なくとも無関係ではないはずだ。なら、ここで叩いておいた方が得策かもしれないな。

「いつまでも隠れてないで出て来なさいよ」

挑発する様な口調でメリアが言つたが、やはり相手は姿を現さない。気配はあるが、場所までは特定出来ない。さて、どうしたものか

「バナッショ」

「どうした?」

ルルーに声をかけられ、視線は逸らさずに聞き返す。

「あいつ、階段の正面にいるよ」

どうやらルルーには相手の姿が見えるらしい。俺達に見えていい事を理解したのだろう。ナイスだルルー。

「聞こえたか?」

「ええ」

俺の言葉に、メリアが笑みを浮かべ頷いた。メリアもここで叩いた方が良いと判断したのだろう。どうやら、俺とメリアは似た様な考え方をするらしい。

「先手必勝だな」

俺がそう呟くよりも速く、メリアは呪文の詠唱を始めていた。

黒炎の魔法使い

「 ^{フレイムベル} 灼熱の怒り！」

詠唱を終えたメリアが炎の魔法を階段付近に向けて放つた。俺の雷撃だと階段を破壊してしまう可能性があつた為、メリアの魔法は有り難い。

「ルルー、今どこだ？」

「動いてないよ。あいつ、魔法を書き消した」

どうやら一筋縄ではいかない相手らしい。が、存在しているのなら戦える。

「ルルー、敵が移動したらその動きを教えてくれ」「わかった！」

ルルーが頷くよりも早く、俺は階段の手前に向けて雷撃を放つた。メリアの魔法が効かない以上、おそらく魔法剣の雷撃も効かないだろう。しかしルルーの言葉通り魔法を焼き消したのなら、実際に効果がない訳ではないはずだ。だとすれば魔法による攻撃は牽制になる。

雷撃を放つた俺はすぐさま駆け出し、気配を読む事に集中する。眼前で雷撃が霧散したが、何かが移動した様な気配はないし、ル

ルーの声もからない。なら、奴は動いていない！

走りながら剣に魔力を込める。裁きの雷や喰らい付く雷よりも多くの魔力を必要とするが、現状では一番効果的な魔法剣第三の能力

「 ^{エレメントスパーク} 轟く雷鳴！」

俺がキーワードを発した刹那、俺の周囲を回転する雷の筋が現れる。その動きが止まれば、俺が雷の檻に閉じ込められた様になるだろう。十数本の雷の筋が周囲を回転する事で隙間をなくし、攻防一体の雷壁と化す。おおまかな位置は分かつても、剣で攻撃した所で当てる事は出来ないだろう。だからこそ、攻撃される事を見越して

の轟く雷鳴だ。

「動いたよ！」

ルルーがそう叫ぶのと、相手の姿がぼんやりと浮かび上がってきたのは同時だつた。

轟く雷鳴は撃き消す事が出来ないと判断したのか、敵は階段付近から俺の左側を通りメリアへと接近する。完全に視覚では捉える事の出来なかつたその姿が、移動すると同時に薄い影の様な姿が見える様になつた。その存在に当然気付いたであろうメリアが魔法で迎撃しようとした時には、その姿が完全に見える様になつていた。

黒いローブ姿で、頭にはフードを被つている為顔までは見えない。体格から察するに先程男だと判断したのは間違つてなさそうだ。とは言えどちらかと言えば華奢な身体つきをしている。姿を隠す術を持つていた事や、方法は分からないが不死者を作ると言う術を行なつていた事を考えれば魔法使いタイプなのだろう。だが、攻撃魔法を使う事なくメリアとの距離を詰める。直接攻撃の手段も持つてゐるのかもしねり。

「灼熱の怒り！」

メリアの炎の魔法が男を襲うが、走りながらも腕を前に出したかと思うと炎を搔き消した。魔法を使つた様子がない為、何か魔法具を持つてゐるのかもしねり。

男は腰からナイフを取り出し、そのままメリアへと振るう。が、魔法使いと言えどメリアだつて冒険者だ。それなりに身体も動かせなければ冒険者稼業は勤まらない。その一閃を難なくかわし、再び魔法を放とうとする。

「飽くなき探求」

男のそんな言葉と共に放たれた魔法。それは周囲の魔力へと干渉し、空氣中に魔力の渦を作り出す魔法だ。その効果範囲内では魔法を使つても渦に飲み込まれてしまつ為、余程の力量差がなければ魔法を無効化されたも同然となる。

魔法を放つ事を諦め、メリアは距離を取ろうと後ろへ跳んだ。男

はそれを追撃しようと再び駆け出す。

魔法同士のぶつかり合いにならないのなら、俺が手を出す事も可能だ。そう判断し、俺も一人に向かつて駆け出す。

「ルルーは少し離れてろ！」

「分かつた！」

俺の言葉に応え、ルルーは俺達から距離を取る様に離れて行く。

「まどろみの苦痛」

近付く俺に向かつて男が魔法を放つ。例え術者本人でも飽くなき探求の効果は受けるはずだ。だが

黒い靄の様なモノが俺に向かつて進んで来る。その魔法の効果は分からぬが、それに触れる事を俺の直感が危険だと訴えかけてくる。

俺は直感に従い左方へと跳んだ。黒い靄が追つて来る事はなかつたが、その場に留まり続けている。残留型の魔法の様だ。

「聖光の炎」

距離を取つた事で効果範囲から離れたのだろう。メリ亞が放つた

「净化の炎が、黒い靄を焼き消した。

「灼熱の怒り」

その隙に距離を詰めようとした俺に向かつて、男がメリ亞と同じ炎の魔法を放つてきた。慌てて魔法の盾でそれ防ぐ。

「慈悲深き炎槌！」

メリ亞が魔法で作り出した炎の槌を振り下ろすが、男は悠々と跳び退きそれをかわす。そのまま階段付近まで戻り、不適な笑みを浮かべた。

「少しは出来る様ですが、お遊びはここまでにしましょう」

「そう言うと男は、聞いた事のない言葉を紡ぎ始めた。

「古代魔法語！？」

驚きを隠せないメリ亞の言葉に、俺も同じ様に驚いた。

古代魔法語 遥か昔に使われていた強大な魔法を操る為の言語。

今ではその言葉を紡げる者は殆どないと言われている。男の紡ぐ

理解不能の言葉がそれだと叫うのなら、魔法を発動する前に止めた方が良さそうだ。とは言え、今から駆け寄った所で間に合わないだろう。俺は魔法剣に魔力を込め、直ぐに雷撃を放つ。が、左手を翳しただけで雷撃は焼き消されてしまった。

魔法具の事を忘れていた……

「待つて！」

仕方なく直ぐに駆け出そうとしたが、ルルーの声で留まる。その次の瞬間には、男の詠唱は完了していた。

「地獄の業火」

男が言葉と同時に手を翳すと、凄まじい勢いで黒い炎が現れた。

「逃げるわよ！」

そう言つてメリアは踵を返し通路を戻る。俺もそれに倣つて駆け出す。

「バナッショ！」

「ルルーも逃げるぞ！」

俺に駆け寄つて来るルルーにそつとが、ルルーは首を横に振つた。

「無駄ですよ。では、巻き込まれない内に私は失礼します」

そんな声を最後に、男の気配が消えた。転移の魔法でも使つたのだろう。

「ルルー？」

「あいつの言つ通り、逃げてもアレはしばらく消えないし、ずっと追つてくるから……」

そんなルルーの言葉で、何を求めているのかが分かつた。

「仕方ない。頼む。力を貸してくれ」

「うん！」

ルルーは俺の言葉に頷き、紅い光を放ち始める。既に黒い炎は近くまで迫つて来ていたが、不思議と恐怖は感じなかつた。

精神体化したルルーが俺の中へと入り込むのは一瞬の事で、炎の申し子である彼の龍の力を持つてすれば、古の魔法ですら超越し、

アストラル

アストラル

その存在を樂々と極め渡した……

パーティ結成

「まさか、その子がドラゴンだったなんてね……それに貴方がその纏いし者。それならそうと言つてくれれば良かつたのに」

ガルニールへと戻つた俺達は、今後の事を話す為に入り口から一番近い酒場へと入つていた。

そんな中、メリアが皮肉めいた言葉を放つてきた。道中は疲労感が増して殆ど何も喋らなかつたが、簡単に説明しておいた結果がこれだ。まあそう考えてもおかしくはない。が

「そう簡単に口にすると思うか？」

俺がそう切り返すと、メリアは「それもそうね」と直ぐに納得した。気を利かせて小声で言つた辺り、きちんと理由まで考えて口にしたんだろう。

ドラゴンの気配を感じ取つてか、街に戻るまでモンスターと遭遇する事はなかつた。地下迷宮を出た時点で纏いし者状態から元に戻つたが、偽りの砂漠内部でモンスターと遭遇しなかつたのは助かつた。正直、あれ以上戦闘を続けてたら今日中に街まで戻る体力がなかつただろう。

「それで、これからどうするつもり？」

「……とりあえず、明日の朝にでもギルドに報告に行くさ」

「」の街に限らず、ある程度の大規模な街には必ず冒険者ギルドが存在する。俺達冒険者はギルドで様々な道具や情報を売り買いし、又クエストと呼ばれる依頼を受ける場所もある。

ダンジョンに不測の事態や問題が起つた場合は、ギルドに報告をするのが通例となつていて。決して義務ではなく、この場合は情報の正否が確認され次第報酬金が貰える。これも情報の売買の一種と言える。

「まあ、これ以上無駄な死人と不死者を生み出す訳にもいかないしね。それは当然として……」

メリ亞が何を聞きたいのかは分かっている。俺達は命を狙われた。おそらく死んだと判断されているだろうが、いつかは生きている事がバレるはず。そうなると色々と面倒な事になる。なりばどりするのか……

「ギルドが事件と判断して介入するつもりなら、そのメンバーに志願はするさ。そうじやなくても、敵を知っている俺達にはギルドから要請が来るだろうしな。ギルドに介入の意思がないなら、勝手に動くだけだ」

受身ではいつ危険に晒されるか分からぬ。早めにこいつから攻めに出る方が得策だろう。

「なるほどね。あたしも貴方と同意見よ。だから」

「そう言つて、メリ亞はじつと俺の目を見つめてくる。

「しばらく、あたしと手を組まない？」

それは何となく想像出来た言葉だった。ドライゴンとその纏いし者と組めると言つのは、冒険者にとってかなりのプラスになる。冒険中の安全面は勿論、危険が減る事によって財宝を追い求め易くなる。メリ亞の人となりは分からぬが、そう考えるのが普通だ。それに現状からすれば、メリ亞も俺と同じく命を狙われるであろう立場にある。となれば、俺と組んでおくと言つのは例え俺が纏いし者でなくともプラスになる。つまりそれは、俺からしても同じと言う事だ。「俺からも誘おうと思つたくらいだ。とりあえずは、今回の事件が片付くまでは宜しく頼む」

そう言つて俺は手を差し出す。「よろしくね」と手を差し出すメリ亞と握手を交わした。

「それじゃあ今更かもしれないけど、改めてお互いに挨拶でもしましょう?」

手を離すと、湿っぽくなつていた空気を一掃する様に明るい調子でメリ亞はそう言つた。

確かに、緊急時だつた事もあつてちゃんとした自己紹介すらしてない。今後パーティを組むのなら、お互の事は知つておくべき

だろう。

「そうだな」

そう考え、俺は納得の意を込めて頷いた。

「それじゃあ、あたしから。あたしはメリア＝アルハラド。双炎の魔法使い。ギルドではそんな風に呼ばれているわ」

「双炎の魔法使いだつて！？」

メリアの自己紹介に俺は驚きを隠せなかつた。冒険者ギルドでは一定の功績を残した者に、その功績や能力に沿つた二つ名が与えられる。二つ名が付けば名指しの依頼も増え、仕事に困る事がなくなる。それに加えギルド内部での信頼は増し、関連施設の利用等にサービスが付いたりと恩恵もある。真つ当な冒険者ならば一度は二つ名を貰う事を夢見るものだ。二つ名があると言つ事は一流の冒険者である証になるのだから当然だろ？

「そうよ。あたしの場合はまだ名前は余り知られていないけど、二つ名はそれなりに有名だつて言つ自負はあるわ」

「謙遜の必要が全くないくらい有名だろ？ うまい話……」

「そう？」

俺の言葉に笑みを浮かべるメリア。やつぱり二つ、良い性格してやがる。

双炎の魔法使いと言えば、一年前に史上最新少で二つ名を得たと一時期騒ぎになつた冒険者だ。その名の通り炎の魔法を得意とし、新たに魔法を編み出した事で二つ名を得たと言われている。勿論それだけではないだろうが、間違いなく新魔法の創作が決定打となつたはずだ。それ程魔法を編み出すのは難しいとされている。

「確か二年前、十八歳の少女が二つ名を得たつて言っていたはずだから……メリアは今二十歳つて事か」

「そうだけど、余り女性の年齢を詮索するものじゃないわよ？」

特に怒つた様子ではないが、そんな風に諫められ俺は大人しく頷いておく。

「それもそうだな……すまない」

「炎の魔法が得意なのは言うまでもないと思うけど、さつきも見せた通り炎属性なら浄化の魔法も使えるわ。それと、簡単なものなら結界魔法と風の魔法も少し使えるわね」

風の魔法まで使えるのか……

魔法には属性があり、魔法使いと呼ばれる者でもその全てを使える訳ではない。個人によつて得意とする属性があり、当然不得意な属性も存在する。そこには個人差があり、不得意な属性でも魔法として発現出来る者もいればそうでない者もいる。しかし無理して不得意な魔法を使つたとしてもその効果は期待出来ない為、魔法を学ぶ者は自身の得意な魔法を重点的に学んで行くのが常識だ。

わざわざ使えると言つたからには、メリアは風の魔法もそれなりの効果で発現する事が出来るのだろう。

「一応短剣くらいは持つてるけど、剣術を学んだ訳じやないからあくまでも魔法が使えない時の為の保険ね。体術は冒険者になる前に多少学んだから、接近戦になつてもある程度は戦えるわ。他に何か聞いておきたい事はある？」

見知らぬ冒険者がパーティを組む時は、こうして自分に何が出来るかを伝える。作戦を立てる様な状況になれば一人一人の能力は知つておかなければならぬし、個人の戦闘であつてもどう手を出せば良いか等様々な判断材料になる。その全てを語る者は少ないが、手の内を全く見せようとしない者は信用されない。

「特にないな。実際の戦闘能力はさつきも見せて貰つたし

「なら、次はそつちの番ね」

「そうだな。俺はバナッショウ＝ラウズコート。残念ながら二つ名は持つていないが、一部ではそれなりに名は知られてると思う」

対抗心を燃やした訳じやなく、事実一部には有名だ。特別ギルドに貢献してきた訳ではない為二つ名こそ貰つていないが、腕つ節には自信があるし、数多くのダンジョンに足を運んできた。困つた人間を放置出来ない俺は人助けも数多くしてきた為、俺の持つ魔法剣の力から雷鳴のバナッショウなんて呼ばれる事もあるくらいだ。ギル

ドから贈られる一つ名とは別に、自称する者や俺みたいに他人から付けられる一つ名も存在する。恥ずかしいから俺は自分では名乗つた事はないが……

「もしかして、人助けのバナッショウ？」

「ああ……そんな風に呼ばれた事もあつたな」

「なるほどねえ。何となく分かるわ」

何が、とは問わない。割とキツイ印象を与える顔立ちをしているが、滲み出るお人好しのオーラがあると言われた事もある。

「雷を操る魔法剣と、結界魔法のかかつた魔法の盾を持つてる。剣技にはそれなりの自信がある。ついでに、最近纏いし者になつたばかりだ」

最後は声を小さくしておく。余り知られたくはないからな。

「貴方が人助けのバナッショウならその実力に不満なんてないわ。たとえ纏いし者じゃなくてもね」

そう言つてウインクしてくるメリア。

「そいつはどうも」

「あら、つれないわね」

やや憂いを込めた声音でそんな事を言つメリアだったが、冗談だと分かつていてるので相手にしない。

「それで、こいつはルルーセリア＝エルド＝ガーネット。人の成りをしているがドラゴンの子供だ。俺はルルーって呼んでる」

俺とメリアの間の席で一人懸命に飯を食べているルルーを指差し、俺は小声でそんな紹介をした。

「改めてよろしくね、ルルーちゃん」

そう言いながらメリアが手を差し出すが、ルルーは全く見向きもしない。

そう言えば……出会つてからここまで、一度も直接言葉を交わしている所を見ていない。

「ルルー、挨拶くらいはしておいた方が良いぞ」

俺がそう言つと、思いつきり渋々と言う感情丸出しでルルーはメ

リアへと視線を向けた。

「わたしはお前がキレイだ。でもバナッシュの為にガマンしてやる」
俺達の会話を聞いて、行動を共にする事がプラスだと言つのは理解しているのだろう。ふてぶてしい態度でルルーはそんな風に言い放つた。それから握手を交わすでもなく、ルルーは再び食事に戻ってしまった。

「……まあともあれ、ようじへつて事で」

「ええ」

微妙な空気になりながらも、その後俺達はルルーを除き頼んでおいて手をつけていなかつた夕食を食べた。

時間経過と共に多少味は落ちていたが、それでもそれなりに美味いと思えた。どうやらこの酒場を選んだのは正解だった様だ。

食事を終えた後はお互に疲労している事も踏まえ、その場は解散となつた。今後は泊まる宿も統一した方が良いかもしないが、流石に今日明日で襲撃される事はないだろう。そう考え、明日の朝ギルドが開く9時にギルドで合流する事にして、俺達はそれぞれの宿への帰路へ着いた……

地鳴りの洞窟1

偽りの砂漠から帰還した翌朝、約束通り9時に冒険者ギルドへ足を運ぶと既にメリアの姿があった。

軽く挨拶を交わしそのままギルドへと入り、昨日の事の顛末を受付で話した。

「分かりました。これから調査隊を組みますので、三日後にまたお越し頂けますか？」

すると淡々とした口調で受付嬢にそう告げられた。

「ああ」

まあそんなものだらうなと考へ、俺はそう答えて後ろで待つルルーとメリアの元に戻った。

「聞いた通りだ。調査隊が無事に帰つてくれれば、おそらくその後討伐隊が組まれる事になるだらうな。俺達が動くのもそれからになる訳だが……」

「どうしたの？」

歯切れ悪く言葉を止めた俺に、ルルーが不思議そうに聞いてきた。メリアは俺の懸念を理解しているらしく、特に口を挟まない。

「奴が俺達が生きて逃げ延びた事に気付いてるとしたら、既にあの場所にはいない可能性が高いと思つてな。情報の漏洩を防ごうとして俺達を殺そうとしたんだ。どうしてもあの場所でなければならぬ理由でもない限りは場所を移すのが普通だ」

そうなると、最悪の場合近隣のダンジョン探索に制限がかかる可能性もある。今回の件を、ギルドがどう解釈するかにもよるが……

「そういうものなの？」

「断定は出来ないけどな。ギルドと足並みを揃えるのが一番安全だとは思うが、俺達だけで奴を探して攻めに出るつて手もある。二人はどう思う？」

ルルーに聞いても仕方ないかもしれないが、悔しいが今回の敵は

ルルーの力を借りる必要がありそうだ。一応ルルーにも聞いておくべきだろ？。メリアは、多分俺と同じ考え方だと思つが……

「わたしはバナッシュに任せるとよ」

「あたしはギルドの調査を待つべきだと想つわ。こちらから攻めるにしたつて、居場所を探すのには人手があつた方が良いだろ？しねやつぱり、大体想像していた通りの反応が返ってきた。

「そうだな。奴の件に関しては、ギルドの調査結果を待とう。それで、これからどうするかなんだが……実を言うと、金に余裕がないんだ。偽りの砂漠に行つたのも単純に資金稼ぎが目的だつたくらいでな」

「ギルドからの報酬は待てないの？」

「確實に貰えるとは限らないしな。ただ生活するだけなら問題ないが、これから戦いに備えるとなると心許ないのさ。そんな訳で、出来れば資金稼ぎにどこかのダンジョンに行きたいと思つてゐる」

「……仕方ないわね。あたしも一緒に行くわ。もしかしたら、奴と遭遇しちゃうかもしれないしね」

「助かるよ」

「それで、どこか田処はあるの？」

「ああ。俺がルルーと出会つたダンジョンに行こうと思つてゐる」

「それってどこなの？」

「地鳴りの洞窟さ」

地鳴りの洞窟 ガルニールからやや北東に位置するそのダンジョンは、街から近いダンジョンの中では唯一踏破されていないダンジョンだ。岩山にぽつかりと開いた入り口から入り、地下へと進むタイプのダンジョンで、発見されてから何十年も経つてゐるにも関わらず、未だに地下50階で探索は止まつてゐる。それよりも更深い階層があるのは確かなのだ。何せ下に降りる階段が目に見えるのだから。だがしかし、その階段付近には魔法の結界が張られ

ており近付く事が出来ない。その結界を解除する方法が分からず、力付くで解除出来る者も現れていない。俺がルルーを見つけたのがその地下50階だった。

「やっぱり取りこぼしはないか……」

地鳴りの洞窟地下40階。地下30階までは最短ルートで降り、そこからは未発見の隠し部屋等がないか念の為探しながら進んだ。今でも先に進む方法を探して多くの冒険者が訪れる為、モンスターの数もあまり多くない。安全面を重視したが、資金稼ぎ場所としては失敗だったかもしれない。

「あたしもここには何度か来てるけど、取りこぼしはないと思うわよ。まあ、この階層辺りからはモンスターも結構いるだろうからお金稼ぎは出来そうだけどね」

肩を竦めながらそんな風に呟くメリ亞。言つてる事はもつともだが、俺だって考えなしにここを選んだ訳じゃない。

「そうだな……とりあえずはモンスターを倒しながら下に進もう」「バナッショ！」

俺の言葉尻に繋げる様に、ルルーが慌てた様子で俺の名を呼んだ。どうしたとは聞かない。俺もメリ亞も、直ぐにその存在に気が付いた。背後からモンスターが現れたのだ。現れたのはフリー・ズリザード。皮膚から冷気を放つ大型犬くらいの大きさのトカゲ型モンスターだ。

「何でこんな所にフリー・ズリザードがいるんだ？」

フリー・ズリザードと距離を取りながら剣を抜き、俺はそんな言葉を漏らした。

「さあ、ねつ！」

メリ亞がそう答えながら炎の魔法を放つ。しかしフリー・ズリザードの口から吐かれた冷気と衝突し、どちらも消滅した。

フリー・ズリザードは気温の低い地域に生息するモンスターで、地鳴りの洞窟は勿論この周辺で発見された事はない。考えられる可能性は一つ。何者かが他の地域から連れて来たか、更なる地下から登

つて来たかだ。もし後者だとするのなら、今なら先に進むことが出来るかもしれない。そう考えるとやる気も出てくる。

「まあ、とりあえずはこいつを倒さないとな！」

剣に魔力を流し込み雷を纏わせる。メリアが魔法を放とうとしていない事を確認し、俺はフリーズリザードとの距離を一気に詰めた。フリーズリザードは口から放つ冷氣にさえ気を付ければそれ程驚的なモンスターではない。接近する俺に対し冷氣を吐いてきたが、動きを良く見ていれば首を動かす予備動作を視認して避ける事が出来る。機敏とは言えないその動きは読み易く、横をすり抜けて背後に回つても直ぐに転回する様子すらない。冷氣を放つ皮膚はそれなりに硬いが、帶電状態の魔法剣ならば切り裂く事は難しくない。上から真っ直ぐと振り下ろした俺の斬撃は、フリーズリザードの身体を真っ二つに切り裂いた。

地鳴りの洞窟 2

フリーザードを倒した俺達は、出来るだけモンスターとの戦闘を避けつつ最短距離で地下50階へと降りた。

更なる階下へと進む階段のある部屋の前まで辿り着き、先程浮かんだ考えが正解だった事が判明した。

「結界が、解かれてる……」

「ああ。やっぱりさつきのフリーザードは下から登つて来た奴みたいだな」

驚きの意が含まれたメリ亞の呟きに、俺はそう答えた。どうやらメリ亞は俺と同じ考えには至らなかつたらしい。

「貴方はそう考えたのね。あたしはてっきり、どこかのバカが連れてきたのかと思つたわ」

「その可能性も考えたさ」

そう言いながら、俺は階段へと近付く。

下の階から冷気が流れてきたりする訳ではないから、フリーザードの巣窟になつているつて事はなさそうだ。

「さて、心の準備は良いか?」

「当然でしょう」

「うん！」

俺の問いかけに、二人がほぼ同時に答えた。

封印が解かれた理由が気がかりではあるが、この機を逃す手はない。俺も決意を固め、俺達は階下へと進んだ。

マッピングをメリ亞に任せ、俺達は慎重に洞窟内部を進んだ。地下51階では財宝の類は見つからず、又モンスターと遭遇する事なく一応踏破し更なる階下へと進んだ。

その先も財宝はなく、数匹のフリーザードと遭遇はしたがそ

れ以外のモンスターと遭遇しないまま地下55階まで来てしまった。その探索中、洞窟内部の空気が冷えて来たのを察知して足を止めた。

「どうしたの？」

「この先から冷気が流れてきてるな。もしかしたら、フリーズリザードの巣があるかもしれない」

「良く分かるわね。殆ど気温変わつてないと思うけど」

確かに僅かな変化だ。おそらく以前の俺なら気が付かなかつただろう。

「バナッショウはわたしどつながらつてるから、冷たい空気にはびんかんなんだよ」

何故か嬉しそうにルルーが口を開いた。が、まあそう言つ事なんだろう。纏いし者状態にならなくとも、やはり俺は纏いし者であるルルーの契約者だ。そう言つた変化は付き物らしいから不思議ではない。

「なるほどねえ。ねえルルーちゃん、あたしとも契約しない？」

「いやつ！」

メリ亞の誘いを即答で拒否するルルー。と言つより、普通ならば何人もと契約を交わす事は出来ない。特殊なケースも存在はするが、同一個体の契約対象は一人と言うのが通例だ。メリ亞もそれは知っているはずだから、冗談のつもりで言つたのだろう。

「嫌われちゃつたわね」

なんておどけて言うメリ亞。

「とにかく、気を付けて進もう」

周囲に注意を払いながら先に進むと、思つた通りフリーズリザードの巣があつた。奴等が放つ冷気のせいで、洞窟の壁や天井、床も全て凍りついている。フリーズリザードの巣は大概この様になる。

「中にいるのは……五匹だな」

そつと中の様子を窺い見て数えると、大小合わせ五匹のフリーズリザードの姿が見えた。

フリー・ズリザードは群れで行動する事は少ないが、仲間意識が強く一つの巣で集まつて生活している。餌を求めて巣を出るのはほぼ単独行動で、巣以外での戦闘は先程の通り大して苦労はしない。だが、巣での戦闘となると話は違つてくる。

「微妙な数ね。先に道はあるの？」

「ああ。巣の向こうに道が見える。とは言え、ここ以外にも道はあつたし……どうする？ 一度引き返すか？」

「五匹くらいなら倒せるでしょうけど、その方が無難かもね」

引き返した結果行き止まりしかなく、巣を突破しなければならぬという可能性もあるが……その時は巣の中の数が増えていない事を祈つておこう。

俺達が踵を返し、来た道を戻ろうとした刹那

洞窟全体が揺れ始め、轟音とも呼べる地響きが鳴り揺れも強くなつた。立つてている事すら難しく、俺達は各自壁に手をつき揺れが収まるのを待つた。壁や天井が崩れなかつたのは幸いだ。

「今の揺れは……いつもの地鳴りとは違つたな」

この洞窟が地鳴りの洞窟と呼ばれるのは、頻繁に地震や地響きがあるからだ。不思議な事に揺れているのは洞窟内部だけで、内部のどこかが崩れたと言う話も今の所聞かない。魔法的な要素で地震が発生している為と言われているが、明確な理由は判明していない。

「確かに大きかつたわね」

等とメリ亞が頷いたが、異変は直ぐに訪れた。

「バナツシユ！」

ルルーが俺の背後を指差しながら叫ぶ様に俺の名前を呼んだ。直ぐに振り返り、ルルーの慌てている意味を理解した。

「逃げるぞ！」

フリー・ズリザードの団体様が、俺達に向かつて突進してきていたのだ。巣にいたはずの五匹どころではなく、その数は一見しただけでは数え切れない。

普段なら戦闘中でさえ機敏とは言えないフリー・ズリザードが、ド

シドシと足音を立てながらそれなりのスピードで追いかけてくる。その様子はあるで、何かから逃げているかの様な

「メリ亞！ 炎を維持させる事は出来るか！？」

「出来るけど……どうしようって言うの？」

走りながら尋ねた言葉に、意外と余裕のある声で返事が返ってきた。

「おそらくあいつらは何かから逃げてる。だから、障害物があればそれを避けて通ると思うんだ」

「なるほどね」

細かい事を伝えなくとも、俺がどんな風に魔法を展開して欲しいのか理解した様だ。

「我が矛、我が盾と成りし炎よ、その力を持つて我が前に姿を示せ

焰の剛球！」

焰の剛球は本来、炎の球を生み出し標的に放つだけの魔法だ。メリアくらいの使い手ともなれば詠唱せずとも簡単にその効果を発現する事が出来る。しかし敢えて詠唱を含めその魔法を発現したのは、緻密なコントロールをする為だ。

本来ならば両手に収まる程度の大きさで放つのが普通である魔法だが、今は大の男を余裕で包み込める程大きな球体を作り出している。走りながら詠唱をし、足を止め振り返ると同時に発現した炎の球を、メリ亞は前方に突き出した両手の先で維持している。放つ為に顕現した魔法をコントロールし停滞させるのは簡単な事ではないだろう。それに通常よりもかなりの魔力を要したであろう大きさだ。双炎の一つ名は伊達じやないと言う事か。

俺とルルーはその後ろに隠れさせて貰い、フリー・ブリザードの群れは炎と言う自身と相反する障害物を避けて俺達の横を通過して行つた。

黒い悪夢の来訪

俺達には目もくれず走り去つて行くフリー・ズリザードの群れを見て、俺は自分の予想が的中したのだと判断した。それはつまり、フリー・ズリザードよりも厄介な相手が現れたと言う事だ。

現状俺達には一つの選択肢がある。フリー・ズリザードの後を追う形で撤退するか、強大な敵と戦う覚悟で先に進むか。

結局何の財宝も見つけていない事を考えれば、先に進みたい気持ちはある。だが、俺は思い出した。俺はこの洞窟でイビルドラゴンと戦つた。そもそも、上の階ではフリー・ズリザード同様イビルドラゴンが発見されたと言う話はなかつたにも関わらず。あの時はルルーの事で頭が一杯で気にしなかつたが……

それ所か、ルルーだつてドラゴンだ。それはつまり、魔法の結界によつて封印されたこの洞窟の奥地には、ドラゴンが住んでいると考えられる。となると、この先に現れたのは

「ドラゴンかもしれないな」

ぼそりと、俺はそんな呟きを漏らした。

「どう言つ事？」

フレアボール

焰の剛球を放つ事なく魔力を用いて分解したメリआが、俺の言葉を耳にして口を開いた。

「言つただろう。俺がルルーと出会つたのがこの場所だ。更に言えば、実はその時にイビルドラゴンと戦つたんだよ……」

「つまり、この先はドラゴンの住処があるかもしれないって訳ね」

「ああ。そう考えられなくもないって所だが……どうなんだ、ルルー？」

俺達の思い浮かべた推論の答えを知つてゐるであろうルルーに、今更かもしれないがそう尋ねた。

「……分からぬ」

だが、返つてきた答えはそんなものだつた。

気落ちしたかの様に俯き、弱々しい声の返事だった。本当に分からぬのか、それとも知らないフリをしているのかは判断出来なかつた。

「それは置いておくとして、どうする？　俺達も逃げるか、それとも戦うか」

「この先にドーラゴンがいるかもしないなら、今は逃げるべきじゃない？　倒せるくらいの下等種だったとしても、無事じや済まないと思うし」

「そうだな。結界の事も含めてギルドに報告しに戻るか」

最近は資金稼ぎすらまともに行えない。まったく、運が悪い……

そんな風に考え溜息を吐いた刹那、更なる悪運が舞い込んで来た。言葉では表現出来ない雄叫びが聞こえたかと思うと、周囲の景色が一変した。洞窟内部である事に変わりはないが、ドーム状の大きな空間へと変わったのだ。一部床が凍っている事から、その場所がフリーズリザードの巣だったと思われる。つまり、突如洞窟の内部構造が変化したのだ。

「どうなつてやがる……」

なんて陳腐な言葉は、再び聞こえてきた雄叫びによつて搔き消された。

俺達の視線の先には、低空に浮かぶ黒いドーラゴンの姿があつた。巨大とは言わぬが、先日戦つたイビルドラゴンよりも一回り程大きいだろうか。イビルドラゴンと良く似ていて皮膚は黒い鱗で覆われており、後ろ足の方が発達した四足歩行である姿。浮いているのだからその背に翼があるのは当然だろうが、その浮力が翼から生まれている訳ではないのは一目瞭然だ。何せ、翼は一切動かしていない。おそらく魔力を用いて浮遊しているのだろう。

風貌だけ見ればイビルドラゴンと見間違えるかもしねりないが、その存在感はまるで別物だ。下等な龍種ではない。おそらく、ルルーと同じ至高の龍種……

『やはり貴様だったか、真紅の姫よ』

紅い瞳をギロリと動かし、黒き龍はそんな言葉を紡いだ。言葉ではあったが、それは声ではなかつた。魔力を用いたテレパシーとも言えれば良いのか、その言葉は直接脳に響いてきている様だ。

『一度逃げ遂せたのだから、戻つて来なければ良かつたものを……

そこの人間にでも唆されたか？』

おそらく、黒き龍はわざと俺達にも分かる様に言葉を紡いでいるのだろう。

その内容から察するに、ルルーをこの場所に連れて来るべきではなかつた様に思える。

『この地に戻つた以上は、見逃す事は出来んぞ』

その言葉を紡いだ刹那、黒き龍が光に包まれた。それも一瞬の事で、直ぐに光が晴れる。そして黒き龍が浮かんでいた場所には、一人の男が立つっていた。

腰近くまで伸びた長い黒髪、冷たい眼差しの紅い瞳、異様な程に整つた顔立ち、身体付きもバランスの取れた体型をしており、その全てが異彩を放つている。

「人の姿を取るのは幾年振りだらうか……」

その言葉が、男が黒き龍だと物語つてゐる。ドラゴンが人の姿になれると言う話は聞かないが、ルルーの事もありそれ自体は別段驚く様な事ではない。

「貴様は契約者の様だな。ああ……我が眷属を屠つたのは貴様か」男が俺へと視線を向けた瞬間、反射的に剣を抜き構えた。殺氣の類は感じられない。それなのに、俺は今命の危険を感じた……

「我等は仇討ち等と言う考え方をしないが……真紅の姫と契約を交わした事を悔むのだな」

仇討ちはついでにとでも言つ様に、男が言葉を紡ぎゅつくりと動き始めた。それは本当に緩慢な動きとしか思えなかつたが、気が付けば男は俺の目の前まで辿り着いていた。

驚きの声を上げる暇もなく、俺は首を掴まれ宙に浮かされていた。そう理解した次の瞬間には、片腕で持ち上げられた俺の身体は地面

に落とされていた。

思い出したかの様に俺は呼吸を取り戻し、空気を吸い込み息を整える。

横を見れば、そこにはさっきまで少し離れた所にいたはずのルルーがいた。黒き龍と遭遇してからは言葉を失ったかの様に何も喋らず、呆然としていたはずだった。しかし今のルルーにはしっかりと意思が感じられる。

どうやら俺は、ルルーに助けられた様だ。

「やはり苗床を手放すのは惜しいか？ まあ、どちらも逃がすつもりはないが……」

「わたしは死なないし、バナッショは殺させない！」

その瞳には力強い意思が込められていた。出会った時の静かな雰囲気でもなく、ここ数日行動を共にしていた天真爛漫な雰囲気でもなく、それはどこか厳かで、とても凜々しい雰囲気

「面白い。一族の力を借りて漸く逃げ遂せる事しか出来なかつたと言つのに、我と戦うと？」

男は嘲笑を浮かべ、それでいて本当に可笑しそうに笑い声を上げる。

本能が俺に語りかける。

逃げるなら今しかない

本能が俺に語りかける。

一矢報いるなら今しかない

それは相反する二つの感情。メリアの方は見ない。おそらく絶対的な力を持つ強者を前に、メリアも硬直してしまっているだろう。だから俺は一人で決断するしかない。否

俺の傍には、魂で繋がり合う存在がいる。

俺達が力を合わせれば、きっと……

そんな気持ちが湧き上がつて来る。それは俺一人の意思ではなく、彼女が抱いている意思でもある。だから俺は、その名を呼ぶ。

「ルルー！」

「うん！」

俺の呼びかけに、
ルルーが応えた

刹那の死闘

ルルーの身体が一瞬光に包まれ、次の瞬間には精神体化し俺の身体
魂の中へと入り込んだ。

纏いし者と呼ぶに相応しく、俺の身体の周囲には紅いオーラの様なものが現れゆらゆらと揺れている。

「ほう」

なんて感嘆に近い言葉を漏らした男との距離を瞬時に詰め、剣を持たない左手で男の腹部に全力で拳を叩き込んだ。俺の動きが予想以上だったのか、男はその拳を防ぐ事もなく後方へと吹っ飛んだ。ドーム状になつた洞窟の端まで飛び、その壁にぶち当たる。物凄い衝撃音がしたから、おそらく壁が崩れたと思う。距離は100メートル程だろうか。人間では考えられない腕力だ。

「メリ亞！ 今之内に逃げろ！」

その力に酔つている場合ではない。今の一撃で倒せる様な相手ではない。そして何より、ただの人間であるメリ亞はこの戦いでは邪魔にしかならない。

「分かつたわ！」

それは恐怖心からの返事ではない事が十分に窺えた。さっきまでとは違うその声にはちゃんとした意思が感じられる。メリ亞自身、足手まといにしかないと理解しているからこそ返事だ。

メリ亞は踵を返し階段がある方向に向かつて駆け出す。俺はそれを見送る事はなく、真つ直ぐに男の方へと視線を向ける。

「それが人間達の編み出した纏いし者と呼ばれる力か……太古の契約術を元にしただけあって、素晴らしい力だな」

そんな声が、まるで直ぐ近くにいるかの様に聞こえてきた。

そう思つた瞬間、俺は目の前に現れた男によつて殴り飛ばされた。宙に浮いた状態で身を捻り、何とか態勢を整え着地する。

お返しとでも言つたかったのか、同じ様に腹部を殴られたがそれ

程のダメージはなかつた。

動きを捉え切る事は出来なかつたが、それでも戦う意思を挫かれたりはしない。絶望的な差があつた先程とは違い、今なら対等に渡り合えると確信が持てる。

一度抜いた剣を鞘にしまい、体術の構えを取る。強度の高い魔法剣とは言え、ドラゴンの力には耐えられないだろう。

地を蹴り男との距離を詰める。男は余裕の表情を浮かべ俺を待ち受けるが、フェイントを混ぜ背後に回ると通り抜ける瞬間にその表情が驚愕の色に染まるのが見えた。しかしその表情が俺の油断を誘うものだと直ぐに気付かれる。

背後に回り込むと同時に後ろ回し蹴りを放つた俺だが、その蹴りは空を切る結果に終わった。そんな無防備とも言える態勢の俺に、真横から男の拳が迫ってきた。そう知覚すると同時に男との間に炎を顯現するが、瞬時に出した程度の炎は物ともせずにそのまま拳を放つて来る。だが俺が炎を出したのは攻撃や防御の為ではなく回避行動の為だ。何とか男に手を向けその平から噴射する炎の勢いを利用して態勢を変える。飛ぶと表現する程の勢いを生む事は出来なかつたが、相手の攻撃から逃れる程度の出力で今は十分だ。

炎の勢いで身を捻ると同時に屈んだ俺は、頭上で拳を空振りした状態になっている男に向かってアッパーを放つ。しかしそれを跳躍する事でかわされた。男が少し離れた所に着地する間に俺も態勢を整えた。

お互に一度動きを止める。それは一瞬だが、とても長い時間に感じた。否、ここまで動きの全てが人間の動きを超越した動きの為殆ど時間は立つていない。だと言うのにこんなにも長く感じ、身体はともかく精神が疲労している。超スピードの戦いに脳が着いていくていのいのだろう。戦いと言う行為そのものに着いていくだけマシとも言える。

「もう限界か？」

表に出したつもりはないがそんな俺の心情を察したのか、男はそ

う尋ねてきた。だが、俺はその言葉に答えない。

地力を考えれば俺は圧倒的に負けている。ならば、相手に攻めさせる訳にはいかない。そう考え、奴が攻勢に出る前に再びこちらから動く。

再度の跳躍。と同時に炎の力を練り込む。その一部を拳に纏わせ攻撃力を底上げする。余力を残しつつ今度は正面から殴りかかると、俺が突き出した右手は男の左手の平で簡単に止められてしまつた。男の手が傷を負う事も炎に包まれる事もない。それ所か男は俺の手を掴もうとする。しかし俺は直ぐにその手を引いた。

全力で殴りかからなかつたのは連撃を放つ為だ。男の意識が軽くでも左手にある内に、右腕を引くモーションに合わせ左手を突き出す。今度は頬を狙つて拳を放つたが、その一撃は身を捻る事でかわされてしまつた。しかし迎撃する暇は与えない。僅かに身体をずらし今度は右拳を腹目掛けて放つ。余り力を込められなかつたが、その分スピードがあつた為その一撃は男の腹を捉えた。吹き飛ばす程の威力はなく、大したダメージを与えた訳でもないだろう。だが、まだ俺の攻撃は終わらない。

一瞬の怯みを逃さず、渾身の力を込め右足でハイキックを繰り出す。俺より身長の高い男の首元まで届かせる事は出来ないと判断し、肩辺りを目掛けて放つた。その一撃は狙つた通り男の左肩を捉え、確かな手応えを感じた。が

突然目の前に拳が迫つて来たかと思えば、そのまま顔面を殴られ幾らか後方に吹つ飛ばされた。何とか態勢を整え着地はしたもののかなりの痛みを感じる。それでも顔面が崩れたり拉げたりしなかつたのは纏いし者として強化されているおかげだろう。

本来なら肩の骨を碎いてもおかしくない一撃だつたが、俺の顔面が潰れなかつたのと同じ様に、人間の姿をしているとは言え男はドラゴンだ。ダメージがあつたとしてもあの一撃で骨が碎けたりはしなかつたのだろう。

「今のはなかなかの一撃だつた。だが

男がそんな言葉を紡いだ刹那、再び洞窟が大きく揺れ地鳴りが鳴つた。

「ふむ……どうやら遊びが過ぎた様だ」

「どう言つ意味だ？」

「これ以上戦う気がないのか、今まで感じていたプレッシャーを感じなくなり俺はそう尋ねた。

「力の一部しかないとは言え、我とここまで対等に渡り合つた。その事実を賞して少しだけ真実を教えてやろう。この洞窟には幾重にも結界が施されている。私はその結界の綻びを利用して、力の一部だけを結界の外へ通した。それが今の我だ」

つまり、本当のこいつはもっと強いつて事かよ……

「その綻びも我が付けた傷だが、どうやら回帰の魔法により修復された様だ。そのせいで、綻びを抜け出た我の存在は本体との繋がりを失い消えようとしている。貴様も、真紅の姫も実に運が良い」

助かつた。そう思うが、まだ油断は出来ない。今気を抜けば奴が消えるまでの間に殺される可能性もある。否、そもそも奴が言つている事が本当だと言う確証はない。

「また幾許の時を重ねなければ、結界を傷付ける事は叶わぬとは思うが……もしぬるに顔を合わせる事があれば、その時は貴様等の命、ないものと思え」

そう言つう男の表情は、今までに見た事がないくらいに禍々しく、それでいて楽しそうなものだった。

そして男の言葉が真実であったと証明する様に、その身が薄く掠れて行く。直ぐにその姿は完全に焼き消え、搖れも地鳴りも収まつたその場所は、少しの間静寂に包まれた……

ルルーと話をしなければならない。そう思つたが、言葉にはない意思が早く上に戻つた方が良いと語りかけて来る。

纏いし者状態のまま駆け出し、上の階を目指す。人の身で進むよりも断然素早く移動出来る為、殆ど時間をかける事なく上階への道を進む。地下50階へと辿り着くと、上がった部屋の出口付近にメリアの姿があつた。

「バナッショ！」

俺に気が付いたメリアが、慌てた様子で呼びかけながら手招きをしている。何事かと思つたが、緩やかに修復していく結界が視界に入りルルーとメリアの焦燥が理解出来た。

結界が元通りになる前に外に出なければ、いくらルルーの力があつたとしても簡単に外に出る事は出来なくなるだろう。

俺は速やかに結界の外まで出て一息吐くと、纏いし者状態を解除する。

「倒した……訳じやなさそうね」

俺とルルーの表情を見たメリアが、そんな言葉を呟く様に言った。俺は無言のまま頷き、ゆっくりと息を吐く。

「……とにかく、一度街に戻ろう」

「その方が良さそうね」

俺の言葉にメリアがそう答えて頷いた。ルルーがその提案に反対するとも思えず、特に言葉を向ける事なく俺は歩き出した。メリアも俺に続いたが、意外にもルルーはその場から動かなかつた。それを察した俺もメリアも足を止める。

「ルルー？」

「……ごめんなさい」

ぽつりと小さな声で、ルルーは謝罪の言葉を口にした。声音から涙ぐんでいるのだと、俺は直感的に理解した。その涙が、その言葉

が、どんな感情から発せられたのかは想像出来なくもない。だが、それも含めて判断するのは話を聞いてからだ。今まで何も聞かなかつた方がおかしい。今回は俺のお人好しつぶりにも我ながら嫌気が差す。

「良いから。とりあえず、今は戻る」

出来るだけ優しく、俺はルルーにそんな言葉を投げかける。

「……うん」

悲しげな瞳で俺を見つめ、ルルーは小さく頷いた。

結界を抜けたフリー・ズリザードや、ラビバットと呼ばれるウサギの顔をしたコウモリ型のモンスター等、幾らかの戦闘があつたもの、疲弊した俺を労わってくれたのかメリ亞が殆どのモンスターを魔法で蹴散らしながら地鳴りの洞窟を後にした。

殆ど会話もなく、重い雰囲気のまま俺達はガルニールへと戻つて来た。

周囲に聞かれると拙い類の会話になるだろうと考え、俺が泊まっている安宿よりも確実に防音設備が整つているであろうメリ亞の泊まっている宿へと足を運ぶ事にした。メリ亞も頷いてくれた為、俺達はそのままメリ亞の宿を目指す。

メリ亞の泊まっている宿はガルニールの中心街にある宿で、街の中では一、二を争う程の高級宿だった。

「驚いたな……」

女が一人で泊まると言つ事を考えれば設備を重視するのは分かるが……それにしても、接客等のサービスも含めてトップクラスの宿だ。

「そう?」

「ああ。余りこいつ言つた事に金をかけるタイプだとは思わなかつたからな」

「まあ、一つ名持ちとしての体裁みたいなものかしら

俺の言葉に、メリ亞は苦笑混じりにそんな言葉を返してきた。

「着いて来て」

宿に入るメリ亞の案内の元、2階に上がりメリ亞が泊まっている部屋に入る。

メリ亞に促され、俺達は客用であるソファへと腰を掛ける。丁度良く一人掛けのソファが三つあった。

間取りを見れば隣りの部屋とは多少の間があるらしく、おそらく叫んだりしなければ隣りの部屋に声が聞こえる事はないだろう。細かい原理は知らないが、防音効果のある造りをしている宿だと有名だ。今更疑つた所で仕方ないし、少なくとも俺の泊まっている宿よりもその効果があるのは目に見えている。

「さて……メリ亞が聞きたいと思う事もあるとは思つが、まずは俺が確認したい事から聞かせて貰つて良いか？」

「構わないわ」

今回は巻き込まれたと言つて過言ではないメリ亞へ一応の確認を取り、俺はすつと黙つたまま後を着いて来ていたルルーに向き直つた。

「これだけは確認しておきたい。お前は、人間に仇名す存在か？」
短い期間だが一緒に過ごして、ルルーが人間に害を及ぼす存在だとは思わない。だが、知性の高い至高龍種とは言えモンスターはモンスターだ。正直に答えるかは別として、その意思だけは確認しておかなければならぬ。

「わたしは、バナッショの味方だよ」

「それは俺が契約者だからだろう？　俺が聞きたいのはお前自身の

意思だ

ガーネット・ドラゴン

真紅の火龍と呼ばれる龍種が人間と全面的に争つたと言つ史実はないが、人間の前に姿を見せなくなつて随分と経つ。やはりその確認はしたい。

「別に、わたしは人間と争おうなんて思つてないよ。あいつらは、違うみたいだけど……」

あいつら、と並ののはやはりあの黒き龍の事だろ。複数形なのが気になるが……

「さつきは分からなって言つたが、やっぱり地鳴りの洞窟の奥にはドライノの住処があるのか？」

黒き龍の存在を知つてはいるのだから、洞窟深部から来たであろう相手を知つてはいる以上ルルーもそこから来たはずだ。知らない訳がない。

「正確に言えば、洞窟の中にあるわけじゃない。けど、洞窟の奥にはわたし達の住処に繋がる穴があるの」

「穴？」

「そう。穴……昔の人間は龍穴って呼んでたらしきけど、わたし達はただ穴って呼んでる」

「どう言う事だ？」

「わたし達の暮らす世界は、この世界とは隔離された世界なの。でも時々、こっちの世界と繋がる穴が現れる事があつて、わたし達の種族はその穴をふさぐ為に結界を作つて管理してた。でもある日、あいつらが現れて結界を解けと言つてきた。わたし達は決して頷きはしなかつたけど、あいつらは諦めなかつた……」

そこまで言つて、ルルーは一度大きく深呼吸をした。直ぐに続きを言葉にはせず、暗い雰囲気で俯く。

今のルルーの雰囲気、そしてあの黒き龍の言動を思い出し、俺の推測が一つの答えに辿り着いた。言い難そうにしているルルーを見て多少心が痛んだが、本人に語らせるよりはマシだろ？と思いつつ、俺はその推測を言葉にする。

「真紅の火龍を滅ぼしてでも、力付くで結界を解こうとした……」

俺の言葉を聞いて一瞬驚きの表情を浮かべ、ルルーは黙つたままゆっくりと頷いた。

「はげしい戦いが続いて、やがてはわたし達の一族が押され始めて……結界の維持に力を注いでいるせいもあって、わたしの父さまは一族の終焉が来たのだと判断したの。父さまはわたしに外側から結

界を強化しろと黙つて、結界を一時的に通過できる術をかけてくれた。けど、わたしに父さまの結界を強化できるほどの力はないから、たぶんわたしを逃がすための方便だつたんだと思つ……

「そうして逃げている最中、俺と出会つた訳か……あの時のイビルドライコンは追手つて所か。余り強くなかったのは、結界を越える為に力を抑えられでもしてたのか？」

その言葉は別段ルルーに問いかけた訳ではなく、自問に近い言葉だつたが律儀にもルルーから返事が返ってきた。

「抑えられていたわけじやなくて、たぶんわたしが通る時に生まれた搖らぎを利用して通つたと思うから、その状態で通れる様な力しか持たない個体が選ばれたんだと思つ

「なるほどな」

あの黒き龍の言葉からも察するに、結界はより強い力を持つ者を拒む様な造りになつてゐる様だ。

「ともあれ、あの黒き龍の言葉を信じるならしばらくは安心だらう。とすると、やっぱ眞面の問題は昨日の魔法使いだな」

「……許して、くれるの？」

息を吐きながら俺が言葉を漏らすと、ルルーが上目遣いで恐る恐ると言つた風に聞いてきた。

「元々怒つてた訳じやないしな。ただ、本当の事を知りたかっただけさ」

「でも……わたしの言葉が真実だつて証拠は

「信じるよ」

証拠はない。やつとおつとしたであろうルルーの言葉を遮り、俺はそう断言した。

「契約のおかげか、ある程度はお前の感情が伝わつてくるからな紡いだ言葉に、その悲しみの感情に嘘はない。俺は、そう感じる。だからこそ、俺はルルーを信じる。

「と言う訳だが、メリアは俺達に何か聞きたい事はあるか？」

「証拠なんてもののない単純な感情での信頼関係。そんな俺達と一緒に

緒に行動するのはリスクを伴う。それでもメリアが一緒に行動するのかはまだ分からないが、巻き込んでしまった以上は出来る限りのケアをするべきだろう。

「……今は特にないわ」

少し考えたかと思うと、メリアははつきりとそう答えた。

「貴方の人となりは知っているつもりだし、たとえ噂とは違つたとしてもパーティを組む決心をしたのはあたし。あたしはあたしを信じてるし、今貴方達を疑うつもりもない。だから今のパーティは続行。良いでしょ?」

「ああ。ルルーも良いよな?」

ルルーはメリアを毛嫌いしている様だったから、一応聞いておいた方が良いだろう。

「……うん」

流石にこの状況で否定的な言葉は口にしない。

「でも、出来る限りお互いに隠し事はなしにしましょう。その方が、お互いを信用出来るでしょうしね」

「分かった。まだしばらく宜しく頼む」

「……よろしく」

「ええ。こちらこそよろしくね」

そんな挨拶を締めにして、また明日改めて資金稼ぎに出かける約束を交わし俺とルルーはメリアの宿を後にした。

一夜明けて

宿に帰るまでは少し離れた位置で着いて来ていたルルーだったが、眠る時には俺のベッドに潜り込み背中側から寝巻きをギュッと掴んで来た。俺は特に何も言わずそのまま眠った。

そんな夜を過ぎし、目覚めた時にはルルーの様子は一見普通に戻つていた。

「おはよう」

「おはよう」

俺が挨拶をすれば、こんな風に元気良く返事もした。

昨日の今日で少し気まずい思いをしているんじゃないかとも思つたが、案外大丈夫そうだ。

「そうだ。もう一つ確認しておきたい事があつたんだが良いか?」

「なに?」

少しも泣く様子もなく、ルルーは素直に聞き返してきた。

「実際問題、地鳴りの洞窟の結界はどれくらい安全なんだ?」

「結界が完全に破られる事はないと思うよ。でも、昨日みたいにあいつの分身を送り出すくらいの歪みなら、数年もあれば作れるんじゃないかな」

「もう少し具体的には分からぬいか?」

「うーん……今回はわたしが通過した時の歪みを利用したと思うから、あんまり正確には分からぬ……」

顎に手を当てて首を傾げながら小さく唸つたかと思うと、ルルーは困った様な表情でそんな結論を口にした。

と言う事は、推察するしか手がないか……

「なら……穴つてのは地下何階にあって、ルルーはどれくらいの時間かけて地下50階まで昇つて来たんだ?」

「数えながら昇つて来たわけじゃないから正確には分からぬけど、たぶん地下100階くらいだと思う。何日かはかかったと思うけど

……どれくらいかはちょっと分からぬかな

「そ、うか……分かっ、た。ありがとうな」

俺が礼を言うと、ルルーは笑顔で頷き、どういたしまして。と言葉を返してきた。

あの黒き龍自身の言い方を考えれば、やはりそれ程早く結界に傷を付けられる訳ではなさそうだった。となれば、少なくとも年単位で考えても問題はないだろう。しかし確証がある訳でもない。どこまで話せるか分からぬが、やはりギルドに協力を仰ぐしかないか

……
まずは昨日の約束通り、メリ亞を迎えて行くか。

「準備は良いか？」

「うん」

そもそも出掛ける準備を終えてから話をしていた事もあり、ルルーはしつかりと頷いた。

俺達は宿を出て、メリ亞の泊まる宿へと向かつた。

約束の時間は昨日よりも多少遅めの10時にしておいた。纏いし者の力を大分引き出したせいか、昨日はかなり疲弊していたからだ。それ程疲れを引きずらなかつたが、実を言えば少しだけ気だるさが残つてゐる。

だからと書いて一日何もしないと言つ訳にはいかない。メリ亞は休めと言つてきたが、俺の意思を通した結果とりあえず詳細は明日話すとして資金稼ぎは行なう方向で決まつた。なのに氣だるいなんて言えば、メリ亞は確実に休めと言つて来るだろう。俺が心配と言つては、戦力的な意味で。

ともあれ、メリ亞と合流した俺達はまず遅めの朝食を済ませ、それからギルドへと向かつた。

また貴方ですか。等と昨日と同じ受付嬢に視線で語られたが、それでも報告はしておいた方が良いと地鳴りの洞窟について伝えた。

こちらも調査隊が組まれる事になつたが、結界が修復された今となつては重要視される事もないだろう。まあ、それについては調査が済んだ後に交渉する事にしよう。

「さて、俺としてはやつぱりダンジョンに資金稼ぎに行きたいんだが……」

ギルドへの報告が済んだ後、ギルドの向かいにあるカフェで一息吐きながら俺はそう切り出した。

「あたしは反対。何だかバナッシュって、トラブル体质みたいなんだもの」

そんなメリ亞の反応は尤もだが、納得のいくものではない。

「そんなつもりはないんだけどな……ただ、ここ最近だけで言えば否定は出来ない」

だからと言って、資金不足の問題は放つておけば悪化する一方だ。何かしらの策は必要だろう。

「街の中で出来る依頼を受けるとか、安全なものじゃダメなのかしら?」「

「生活資金の足しにはなるだろうが、その手の依頼じゃあ魔法具の類を揃えたりは出来ないだろ?」

街の住人からギルドに送られる依頼ではその報酬も高が知れている。魔法具はそれなりに高価な物だ。出来ればある程度は一気に稼ぎたい。

「……分かった。今回の準備資金はあたしが立て替えるわ。貴方の力は必要だし、生き残れなければ意味がないもの」

「良いのか?」

命に関わる可能性があるとは言え、大して知りもしない相手に高額の金を貸すと言うのも珍しい話だ。

「実を言えれば、あたしも困つた人は見捨てられない方なのよね」なんておどけた感じに答えるメリ亞。凜とした見た目とは違い、良くこう言つた姿を見る。意外とお茶目な奴だと見解を改める。

「ありがとう。今回の件が片付いたらきちんと返す」

「当然でしょう。あたしは立て替えるだけなんですかいらね」

「ああ。分かってるよ」

そう言って苦笑し合い、少し休んだ後に俺達は装備を整えるべく
まずは武器屋へと向かった。

バッドバルン

ガルニールには武器を扱う商店が五店舗ある。その中でも一番質が良いと言われているのが、ここバッドバルンだ。

店構えは至って普通。しかし扱う品は一級品。それが世間様の見解だ。

「オヤジ。飛び切り頑丈な魔法剣はあるか？」

特別な能力は必要ない。今俺が求めているのはドラゴンの力に耐えられる代物だ。

「剣を鈍器にでもするつもりか？」

「そんな訳ないだろ？」

返ってきた店主の言葉に、俺は即答でツッコミを入れた。

「だらうな。それだけ上等な魔法剣を持つていいんだ。だがそうなると、一体どんな剣を求めているんだか分からんな」

割と恰幅が良く、それでいて無愛想な店主であるが、扱う品同様にその目利きも大したものだ。魔力を感知する力にも長けているのか、俺の持つ魔法剣の存在にもしつかりと気が付いている。

「切れ味は二の次で良い。とにかく強度の高い剣が欲しいんだ。過剰な魔力付与にも耐え得る強度で、硬化や回帰の魔法が強くかかっていると助かるな」

「やはり鈍器として使うんじゃないのか？」

「……言つてて否定出来ない気がしてきたな」

そうなると別に剣じゃなくても良い気もするが、そこはやはり慣れた武器の方が扱い易い。斬る動作と殴る動作では力の入れ方等も変わってくるが、まあその辺りは慣れるしかないだろ？

「剣に硬化の魔法をかける奴なんてそうは居ないだろ？」

まあそれもそうか。しかしそうなると、どんな武器を用意するべきか悩むな。

「だがまあ、強度なら一級品の剣はあるぞ」

剣を諦めようかと思い始めた時、店主のそんな言葉を聞いて驚きを隠せなかつた。

「詳しく聞かせてくれ」

「魔法剣アリエステス。名工ウダンジャの鍛えた真銀の剣、そして一流の魔法使いであるエアロスによつて切断と斬魔、回帰の魔法がかけられた超一級品だ」

ウダンジャもエアロスもこの筋では超が付く有名人だ。その二人の合作な上に名前付きともなればかなりの逸品だろう。しかし、ともなれば代金も跳ね上がるはず……

「名前付きの魔法剣なんて久々に聞いたわ」

俺が小さく唸り声を上げながら頭を悩ませていると、自分用の武器を見繕つていたメリアがやつてきてそう言った。

「是非、実物を見たいんだけど良いかしら?」

店主を疑つている訳じやないだろうから、単純にエアロスのかけた魔法が気になるのだろう。メリアは真剣な面持ちで店主に尋ねた。「構わんよ。ちょっと待つていてくれ」

そう答え、店主はカウンターの奥にある部屋へと入つて行つた。田玉になりそうな品だから、人目に付く場所に飾るのが普通だと思つんだが……まだ仕入れたばかりなのか、それともそれ程の逸品と言う事なのか……

「これだ」

戻つて来た店主が、シンプルながら黒く統一された秀麗な鞘に納められた剣をメリアへと手渡した。

「抜いてみても良いかしら?」

「ああ。抜けるのならな」

意味深な返事をした店主だったが、メリアは気にせず剣を抜こうとする。が

「抜けないわね」

店主の言葉通り、剣を鞘から抜く事出来なかつた。

「その鞘には選定の魔法がかけられていてな。一定条件を満たした

者しか抜けない様になつてているのを」

「俺も試して良いか?」

「勿論」

店主の返事を聞き、俺はメリアから剣を受け取る。両腕を目の前に突き出す形で柄と鞘を持ち、小さく息を呑む。

選定の魔法は使い手を選ぶ為の魔法。その判断基準は魔法をかける時に設定する為様々だが、多くは魔力等の能力によつて選定される。だからと言って魔力を込めたりする必要はなく、触れてさえいれば選定の魔法は自動的に発動される。つまり、力む必要はないし何か特別な行動をする必要も一切ない。それでも、これだけの逸品に試されるともなれば多少は緊張もする。

左手に持つた鞘と、右手に持つた柄を同時に動かす。スウーッと静かな音を立て、その美しい銀の剣身が姿を現した。

「まさか、そいつに認められる奴が現れるとはな……」

俺が剣を抜いた姿を見て、店主は心底驚いた様子でそんな言葉を漏らした。

「どう言う事だ?」

「本当の事を言えば、妥協点を見つけさせる為にそいつを出したのさ。絶対に誰にも抜けないと思つていたからな」

良い物を見せ、それが手に入らないのならば違う品を探すしかない。それだけ良い物があるのだから、他の物だつて十分に良質の物だろうと思う。そんな心理を利用した商法は良くある話だ。だが、俺が聞きたいのはそう言う事ではない。

「どうして誰にも抜けないと思つっていたんだ?」

「ウダンジャヤとエアロスの二人が決めた選定の内容が、ドラゴンに匹敵する力を持っている事だからさ」

「なつ……」

驚きを隠せなかつたが、何とか声を出すのは押された。メリアは完全にポーカーフェイスを保つていて。

「お前さん、ドラゴンを倒した事があるのか?」

一瞬ドラゴンの纏いし者である事がバレたのかとも思ったが、どうやらセリフ詰でもないらしい。内心安堵しつつ、俺は店主の言葉に答える。

「まあな。イビルドラゴンなら何度か倒した事があるし、もう少し上位のドリゴンと戦つた事もある」

「なるほどな。倒す事で条件を満たす詐じやないだろうが、少なくとも選定の魔法はお前さんをドラゴンと対等であると判断したんだろ？」「うう」

細かい選定の条件は魔法をかけた者にしか分からぬし、店主も聞いてはいないんだろう。何にしても、この剣を逃がすのは惜しい。

「この剣、幾らだ？」

「……そいつは持つて行つて良い」

思ひもよらない店主の言葉に、俺は思わず変な声を出しちゃった。

「どうせ使えない剣を買つ奴なんていらないしな。鑑賞用にと大金を出さうとするバカもいるが……剣は、使ってこそ剣だ。だから、そいつはくれてやる」

「……本当に良いのか？」

「べビィぞ」

そう答える店主の口は真剣だ。なら、これ以上の確認は逆に失礼

だろう。

「分かった。ありがたく貰つて行く」

「ああ。大事に使えよ」

金をかけずに武器を調達出来たのはラッキーだった。しかも、おそらくドラゴンの力に耐え得る逸品。真銀とはそれだけ強度の高い金属だ。

「俺は外で待つてるぞ」

「分かったわ」

外でルルーを待たせている為、まだ自分の武器を決めていないメ

リアにそう声をかけ、俺は先にバッドバロンの外に出た。

メリ亞が出て来るのを待つてから、俺達は続いて道具屋へと向かった。防具は特に必要ないと判断した為バス。

一言で道具屋と言つても取り扱いの品は店によつて様々だ。俺達が向かつたのは、魔法具を専門に取り扱う道具屋で、店名をファンタズムと言う。俺が重力場を生み出す魔法具を買ったのもこの店だ。「これはこれは、アルハラド様にラウズコート様。珍しい組み合わせですね」

どうやらメリ亞もこの店の常連らしく、まだ若いが低姿勢で接客を心得た店主がそんな風に出迎えた。

因みに今回もルルーは外で待つている。

「いつもの1セツトと、魔調薬を十個くれる?」

俺が言葉を発するよりも早く、メリ亞が店主に向かつてそう言った。

魔調薬とは、簡単に言えば魔力を回復する薬だ。しかし一步間違えば劇薬となり、身体に不調を来たす。その度合いは人によつて異なる為、薬をどれだけのペースで、どれくらいの量を摂取しても平気なのかを把握しておく必要がある代物だ。とは言え、本来は時間の経過でしか回復しない魔力を瞬時に回復させるこの薬は、魔法使いは勿論、俺の様に魔力を必要とする魔法剣を扱う者には重宝されている。

「いつものつて何だよ?」

「いつもの? 秘密よ」

なんて俺に笑顔を向けるメリ亞。何となく苛立たしい。

「少々お待ち下さい」

そう言つて奥の部屋に消える店主を見送り、俺は店内を見て回る。自分で魔法を使えない俺にしてみれば、魔法具は一つ一つ効果を確かめながら見て回らなければどんな物なのか理解出来ない。じつく

りと説明を見て、分からなければ店主にでも聞く。それが基本スタイルだ。まあ、今回はメリ亞もいるから聞く相手には困らないだろう。

一通り見てはいるが、今現在主に必要な道具は浄化能力のある物だ。相手が不死者を意図的に作り出すと言ひ離れ技を持っている以上、浄化の手立ては少しでも多い方が良い。しかし浄化の効果を持つ魔法具と言うのは意外と少なく、この店には一種類の道具しか置いていない様だ。

「浄化の魔法具を探してるの？」

自分の買い物を済ませたのだろう。メリ亞が店内を物色する俺の所に来てそう聞いてきた。

「ああ。メリ亞にだけ任せたのだろう。メリ亞が店内を物色する俺の所に越した事はないからな」

「そうね。あたしとしては、そっちの方がお勧め出来るかしら」

そう言つて並んだ二つの浄化魔法具の内の一つを指差すメリ亞。メリ亞が指差したのは小さなナイフ型の魔法具で、その刃で傷を付けたモノに浄化魔法を施す代物だ。もう一つは重力場を生む魔法具と同じく球状の魔法具で、使い方もほぼ同様で相手に投げつける事で浄化の魔法が発動する。

価格に結構な差があるが、消耗品か否かと言ひ事を考えればおかしくはない。

「なら、こっちのナイフを一本買っておくかな」

「それだけで良いの？」

「ああ。消耗品の類はまだストックがあるからな。買っておくに越した事はないが、今は金を借りる身だし無駄に買う必要はないだろう」

「備えはあるに越した事はないと思うけど……まあ、持ち運べる量にも限界があるしね。貴方がそれで良いって判断したなら信じるしかないわね」

そう言つて魔法具のナイフを一本手に取り、メリ亞は再びカウン

ターへと向かった。

「これもお願ひ」

「一本で20000一ードですが、宜しいでしょうか？」

一本10000一ード。それがあの魔法具の価格だった。一ードとはこの国の通貨を示す名称で、国が発行している紙幣によって成り立っている。紙幣価値としては、一般成人男性の一食辺り1000一ードあればそれなりに満足のいく食事を取る事が出来ると言つた所が。浄化の魔法がかかつた魔法具で10000一ードと言えば破格の値段とも言えるが、おそらく恒久的に使える代物ではないのだろう。

「ええ」

店主の言葉に頷き、メリアは代金を払うと魔法具を受け取りこちらに戻つて来た。

「はい」

「ありがとう」

俺は礼を言い魔法具を受け取り、セットになつていて革製の鞘ごとベルトの隙間に差した。

「それじゃあ行きましょう」

「ああ」

魔法具の買い物を終え、俺達はファンタズムを後にした。

外で待つていたルルーと合流した後、俺達はもう一度ギルドに足を運ぶ事にした。どちらにせよ資金稼ぎは必要な為、街の中で済ませられそうな簡単な依頼を探す事にしたのだ。

「またいらしたんですか？」

受付嬢にどことなく嫌な表情で出迎えられたが、基本的に目の前の受付嬢は表情の変化が乏しい。おそらく氣のせいだろう。氣のせいだと思いたい。

「ああ……街で完遂出来る依頼を知りたいんだが」

「「」自分でリストを見たらいかがですか？」

ギルドに通された依頼は専用のボードで確認する事が出来るが、ガルニール規模の街ともなればその量は膨大だ。その中から自担当の依頼を探すのは一苦労と言える。その点、受付嬢はその仕事柄依頼内容をある程度は把握している。特に目の前の受付嬢は街での依頼を担当している為、今求めている依頼を尋ねる相手としては最も適しているだろう。

「そう言わずに教えてくれ」

「何かご希望の依頼種はありますか？」

一度は突き放す様な言葉を向けられたが、プロとしてきちんと通すべき筋は理解している。

「半日以内に済ませられそうな依頼が良いな」

もうじき午後になる事を考えれば、一つの依頼に実質半日もかけていては時間が勿体無い。が、日安とするならそれくらいが妥当だろう。

「そうですね……では、これなんてどうでしょ?」

そう言いながら受付嬢が、一枚の依頼書を取り出した。その用紙を見れば、そこには廃材の処理と書かれていた。運搬系の依頼の様だが、もしかするとメリア一人いれば簡単に片付きそうな依頼だ。運搬先で再利用する類の物なら話は別だが、それなら最初から処理と言う言葉は使わないはずだ。

まあ、どちらにせよそう苦労する依頼ではなさそうだな。そう判断して、俺がその依頼を受けると言おうとした刹那、ギルドの扉が勢い良く音を立て開かれた。

扉から入ってきたのは、酷く慌てた様子の男だった。白を基調としたローブを纏った若い男で、そのローブはギルドの調査隊員の正装だ。男は誰とも会話をする事なくギルドの奥へと入つて行つた。

「今のはもしかして……」

普通に考えれば、昨日の今日で偽りの砂漠に向かつた調査隊が戻つて来たとは考え難い。しかし、そう頻繁に調査隊が組まれる様な

案件は出て来るものじゃない。それに俺の勘が、俺とは無関係じゃないと告げている。

「偽りの砂漠に向かつた調査隊のメンバーですね」

調査隊の面子を知つていいのだろう。受付嬢のそんな言葉で俺の勘が正しかつた事が証明された。

「やっぱり依頼は受けないでおく。それより、あの調査隊員の報告が終わつて情報が出たら直ぐに教えてくれ。休憩所にいるから……分かりました。貴方は通報者ですからね。上に確認する必要はありませんが、多分報告する事になるでしょう」

「宜しく頼む」

そう言つて踵を返し、俺達はギルド内部に設置された休憩所へと足を運んだ。

ギルド長との会談

休憩所でしばらく時間を潰すと、ギルドの職員に呼ばれて俺達はギルド奥部にある会議室へと案内された。会議室と言つてもイスやテーブルは置かれていない。今はどかしてあるだけなのか、常にこの状態なのは知らないが……

「さて。まずは自己紹介をしておこう。私はガルニールの冒険者、ギルド長で、ウォード＝ラッセズと言つ

ギルド長を名乗った壮年の男 ウォードが手を出して来た為、俺はそれに応え握手を交わす。

「君達を呼んだのは他でもない。偽りの砂漠についてだ」
まあ当然だろうな。

「結論から言えれば君達の報告は正しかつた。だが、現状は最悪に近い……」

「そう言葉を続けるギルド長の表情は暗い。
詳しく聞かせてくれ」

「うむ。既に瘴気は地下迷宮内部に充満しており、不死者の数もかなりのものだつたらしい。その為、調査隊は地下1階で撤退を余儀なくされたそうだ。しかし撤退も上手くいかず、生きて帰つて来れたのが一人だけだつた程だ。そこで我々ギルドは、今回の件を解決する為のチームを編成する事にした。君達にも参加して貰いたいのだが構わないか？」

「予想通りの流れだな。だが問題もあるはずだ。

「そのつもりでいたから問題ない。けど、どう言つ風にチームを作る気なんだ？ 敵の数やダンジョンが踏破されていない事を考えれば人数を確保した方が良いんだろうが、半端な奴を連れて行けば敵を増やす事にもなり兼ねない。やはり少數精銳で行くべきなんだろうが……」

瘴気を操り、不死者を意図的に作り出す。これは特異な事で、今

回の件が難解な事件である最大の要因だ。敵が範囲殲滅型の古代語魔法^{スペル}を使えると言うのも難度に拍車を掛けている。

「今日一日で、ガルニールに滞在している最高ランクの冒険者に直接交渉していくつもりだ。五人一組のチームを三チーム作ろうと思っているが……そこは集まつた人數次第で調整するつもりでいる。何か意見があれば、人數が確定した時に聞こう」

なるほどな。こつちとしても人數が確定していない以上特に口を出す事はない。

「分かった。それで、俺達はどうすれば良い？」

「明日の朝9時、ギルドに来て欲しい。ああ、もし他に誰か仲間がいるのなら連れて来てくれ。勿論、今回の作戦に参加出来るだけの腕は必要だが……その辺りは君達の判断に任せよう」

「分かった。それじゃあ、今日の所は失礼させて貰う」

踵を返そうとした俺だが、ギルド長に呼び止められ動きを止めた。

「今回の報告報酬を用意した。受付で受け取ってくれ

「分かった」

ギルド長の言葉に頷き、今度こそ踵を返し俺達はギルドの会議室を出た。

受付で報告報酬として20000ニードを貰った。報告報酬はその事件性で報酬額が変わるが、今回の額はかなりの高額と言える。ルルーは元々俺と同行していた為、俺達とメリ亞で半分ずつに分ける事にした。そのまま俺達の取り分である10000ニードもメリ亞に渡し、メリ亞への借金を減らす事にした。

良く考えたら一番金の掛かりそうな新しい武器をタダで手に入れられた為、残りの10000ニードを返してもやりくり出来そうだ。

「生きて帰つて来てからで良いわ

金を返すと言った俺に対し、メリ亞はそんな返事を返してきた。

メリ亞もなかなかに人が良い。

俺はメリ亞の厚意に甘える事にし、改めて先程受けそびれた依頼を受けようと再び受付に向かおうとする。

「どこに行くの?」

そんな言葉でメリ亞に止められ、俺は当然の事を聞くなと言わんばかりに「受付だが?」と答えた。

「お金に余裕が出来たんだじょ? だったら今日は休んでおきなさいよ」

「そりは言つてもな……まだ寝る訳にも行かないし、簡単な依頼をこなすくらいなら問題ないだろ? 金はあるに越した事はないしな」「分からぬもないけど……そつだ!」

俺の言葉に苦笑を浮かべたメリ亞だったが、何かを思いついたらしく笑顔を浮かべてながら声を上げた。

「暇なら、ちよつとあたしに付き合わない?」

「別に構わないが……何かするのか?」

「するつて言つ? 一人役に立ちそうな奴がいるのよね。あたし達のパーティーに加えられたらと思うんだけど、仲間に入れるとしたら貴方の許可も必要だろ? し一緒に来てくれた方が手間が省けると思つたのよね」

「なるほど。メリ亞が役に立つって言つなら信用出来ると思うが、どうせ顔を合わせるなら早い方が良いかもしねないな」

「それじゃあ着いて来て。ルルーちゃんも良い?」

俺の言葉に一度頷き、メリ亞は俺の背後にいるルルーに向かつてそう尋ねた。ルルーはやはりメリ亞の事が好きではないらしく、しかし無視すると言つ事はなく無言のまま頷いた。

「そいつがいる所は近いのか?」

「ええ。ギルドの直ぐ近くの宿に泊まつてゐるはずよ」

「そつか。部屋にいるといいな」

「あ

俺の何気ない言葉に、メリアが驚いた様な表情で声を上げた。

今の反応はもしかして……

「いない場合の事、考えてなかつたのか?」

「そ、そんな訳ないじゃない。さ、行きましょう」

「……そうだな」

何となくいたたまれない雰囲気になりながらも、メリアの案内の元近くの宿に向かう事になった。

「おや、メリアじやないか」

ギルドから歩いて10分程の宿にやつて来ると、丁度中から出て来た青年がメリアの名を呼んだ。

こいつがメリアの言つていた役に立つ奴か？

「あたしの日頃の行ないが良い証拠ね」

なんて言つて俺にワインクをするメリア。

「久し振りね、レイズ。元気だつた？」

「まあね。そう言つメリアも元気そうで何よりだよ。それで……そつちの二人は友達？」

なんて言う青年の目は優しげだ。第一印象は優男。口調も柔らかだし、本物かもしれないな。正直余り好きなタイプではない。が、まあそれを作つていてる訳じやないのなら仕方ない。

「まあそんな所ね」

「バナッショだ。こつちはルルー」

俺達の事を紹介しようとするメリアを制し、俺は自分から名乗りルルーの事を紹介した。

「僕はレイズ＝タンブルード。よろしく」

簡単にしか名乗らなかつた俺に対し、律儀にフルネームで挨拶を返してきた。やはり本物か……

「失礼した。俺はバナッショ＝ラウズコート。こつはルルーセリア＝エルド＝ガーネットだ。よろしく」

改めて自己紹介をし、俺とレイズは握手を交わす。

「それで、僕に何か用かい？」

レイズの性格が作られたモノだとしたら、自意識過剰の奴だとバカにする所だが……こいつの場合は単純に状況からの推察なんだろう。

「ええ。明日からしばらく暇はあるかしら？ 暇なら、あたし達の

パーティに入つて欲しいんだけど

「丁度暇になつた所ではあるけれど…… 一体何をしようつて言つんだい？」

なるほど。少なくとも冒険者として低能ではない様だ。メリ亞とは随分親密な様だが、何も聞かずに仲間になると言つ程お人好しでもないらしい。

「偽りの砂漠を攻略しようと思つてゐる。貴方の力が借りれたら楽になるかと思つてね」

「偽りの砂漠ね…… 確か、昨日不死者が出たつて言つ情報がギルドに報告されたと思うんだけど、それと関係があるのかい？」

情報にも敏い。メリ亞が推すだけあって有能そうじやないか。

「やっぱり簡単には頷いてくれないか…… 仕方ないわね」

そう言つて咳払いをすると、メリ亞は今までの態度と打つて変わつて真摯な表情でレイズを見つめる。

「ギルドから情報が掲示されるとは思つけど、今偽りの砂漠では異様な程に瘴気が発生して、不死者が大量に生まれてゐるわ。これは自然現象ではなく、何者かが意図して起こしてゐる現象よ。あたし達は黒幕と思われる人物とも戦つてゐるから間違いないわ」

「瘴気を操つてゐるのかい？ 俄かには信じられないな……」

それが普通の反応だ。俺だつて未だに信じられない。実際に瘴気を操つてゐる姿を見た訳ではないが、奴の存在やその言動が今回の事件性を物語つてゐる。

「確証はないけど、まず間違いないわ」

「……どうやら、昨日の情報提供者は君達と言つ事みたいだね」

レイズのその言葉に、俺もメリ亞も無言で頷いた。

「偽りの砂漠の攻略をしつつ、大量の不死者を駆除。そして黒幕を捕まえるなりして事件を解決する。はつきり言つてかなりのハードワークね。でも、今回の作戦はギルド先導で行なわれるからかなりの報酬が期待出来ると思うわ。どうかしら？」

「一つ聞いておきたいんだけど、黒幕らしき人物と戦つたと言つた

よね？」

「ええ」

「その場で捕まえる事も倒す事も出来なかつたと言つ事は、かなりの強敵なんだろ？　勝算はあるのかい？」

「貴方がいれば、十分にあると思つわ」

メリアははつきりとそう答えた。俺はレイズの実力を知らないから断言は出来ないが、余程のモノと考えても良いのだろうか……

「……分かつた。他でもないメリアからの誘いでもあるしね。期待に沿える様頑張るよ」

「ありがとう、レイズ。貴方ならそう言ってくれると思つてたわ」

「俺からも礼を言つ。ありがとう
「まだ活躍した訳もないし、お礼はいらないよ。僕は報酬に釣られただけだしね」

そう言いながら苦笑を浮かべるレイズ。ここまで人が良い奴はなかなかいない。レイズに対する認識を改めておこう。

「ここですつと立ち話をしてるのも何だし、カフェ辺りでもう少し詳しい話を聞かせてくれないかい？」

「そうね。バナッショウも良い？」

「ああ」

俺達は近くのカフェで話の続きをする事にし、周辺に詳しいレイズの案内で移動を始めた。

レイズを含めた俺達四人は、軽い軽食を取りつつお互の戦闘能力について話をした。とは言つても、お互いが既に知つていてメリアには聞き役に徹して貢つたが。ルルーについても至高龍種である事は伏せたがドラゴンである事実は話した。俺が纏いし者である事も含めて。

レイズの能力を聞けば、確かに役に立つ存在だった。

まずレイズの基本武器は弓矢だ。短剣を使った近接戦闘、簡単な

魔法も使えるらしく単純な戦闘能力は低くなさそうだった。しかし何よりも、彼の持つ魔法弓が異彩を放っていた。

魔法弓ルナティック その名を聞いた事はないが、弓に魔力を込める事でその方向性を制御し、矢に様々な効果を付加させる事が出来ると言う。その限度は分からないが、魔力を込めるのであって魔法を込める訳じゃないのがミソだ。本来魔法の武器は、武器自体に込められた魔法を魔力を通す事によって発動させる物だ。一つの能力しかない訳ではないが、決められた能力しか発揮出来ないのが普通の魔法具である。だが、ルナティックは違う。魔力さえ込めば、使用者本人が本来使えないはずの魔法でもある程度は矢を通してだが発現出来ると言う。

レイズ自身の魔力量の問題上、それ程強い効果は発揮出来ないらしいが、浄化の魔法も発現出来るらしいのでそれだけでも十分な戦力になる。それにあの男……魔法を無効化する魔法具を持つていたが、魔法を付加された矢ならば通る可能性もある。後は、奴に古代語魔エングイ^{ント・スペル}法を使わせない様にすれば何とかなるだろう。と言つのが俺達の見解だ。

一通りの話を終えた俺達は、また明日ギルドに直接集合する事にしてその場は別れた。

偽りの砂漠の状況が悪化したと言う事は、おそらく奴はまだあの場所にいるのだろう。俺の予想は悪い方向で裏切られた事になるが、探す手間が省けたと言う意味では有り難いとも言える。

明日は、激しい戦いになるだろう。今日の所はゆっくり休もう。自分の宿に戻った俺とルルーは、晩飯を済ませ身を清めると、特に雑談をする事もなく眠りに着く事にした……

地下迷宮攻略への第一歩

翌朝、ギルドに集まつた俺達は、ギルド長仕切りの元パーティ一分けをされた。と言つても、元々パーティを組んでいた俺達が分散される事はなかつた。チームワークが要求されるダンジョンに潜るのだから当然と言えば当然だ。まあ、昨日初めて会つたメンバーもいるが……

それはさておき、ギルド長の思惑通りには事が運ばず、俺達を含めメンバーは九人にしかならなかつた。ルルーの存在を公にしたくない俺にとつては都合が良く、俺達のパーティと、集まつた五人のパーティで探索に向かう事になつた。

ギルド長からすれば心許ない様だが、鳥合の衆が集まるよりは現状の方がマシなのは事実。ギルド長もそれを理解しているからこそ、それを言葉には出さない。

「頼んだぞ」

自己紹介と、一通り俺達の持つ情報を伝えた後、ギルド長のそんな言葉で俺達は偽りの砂漠へと向かい街を出た。

道中は九人全員の旅路だ。ギルド長の選りすぐりだけあつて、全員かなりの腕を持っていた。道中に現れる雑魚モンスター等物とモゼズ、かなりのハイペースで進み昼前には偽りの砂漠へと辿り着いた。

「さて、今回の作戦を確認しておこうと思うんだが良いか?」

今回の報告者と言つ事もあり、一応は俺がまとめ役と言う事になつた。既にガルニールで作戦内容は話し合われたが、ダンジョンに入る前に再確認を行なつておきたい。全員無言で頷き、俺の言葉を待つ。

「まずは、偽りの砂漠唯一の出入り口であるここに淨化魔法を施した結界を張る。地上にまでは瘴気が漏れ出ていない様だから、地上の探索はせずに九人で地下迷宮を目指す。途中で不死者を発見した

場合、必ず浄化を行なう」

不死者は瘴気によつて生まれた存在と言つても過言ではなく、その身には瘴気を孕んでいる。放つておけば周囲に影響を与えかねない為、必ず浄化しながら進んで欲しいと言うのがギルドからのお達しだ。

「地下迷宮の入り口にも結界を張つた上で、一一手に分かれる。迷宮内部にいる不死者を浄化するチームと、ダンジョンの踏破を目指しつつ今回の黒幕を探し出すチームだ。敵と戦つた事のある俺達が後者を担当する」

「一応確認しておくが、勝算はあるんだろうな？ 一度負けているんだろう？」

そんな言葉を挟んできたのは、俺達とは別パーティの一人であるクロースと言う男だ。大柄で逆立てた赤髪が特徴的な男で、武器は斧を使う。

「逃げられたのは事実だが、負けた訳じゃない。十分に勝算はある。これで満足か？」

言葉を幾ら取り繕おうが、戦いにおいて絶対など存在しない。俺達が勝つ等と証明する事が出来ないのだ。それでもクロースがそれを尋ねてきたのは、気持ちの上で負けていいかを確認したかったのだろう。

「ま、せいぜい負けない事を祈つておくぜ」

「済まない。続けてくれ」

肩を竦めて呟いたクロースの言葉に続けて、別パーティのリーダーである青年、フレンツがそう言った。見た目も言動も好青年風ではあるが、冒険者の間ではその実力と共に性格の悪さも評判だ。

「俺達は階段に結界を張りながら進み、フレンツのパーティは各階を探索し不死者を浄化して回る。と言つのが、地下3階までの基本的な行動になる。地下4階からはまだ未踏破な為、俺達はまず地下4階の踏破を目指す。フレンツ達が追い着いた場合、その階の踏破を任せ先に進む。その繰り返しで事件の解決を目指す。大まかな流

れはこんな感じだ。何か質問はあるか？」

細かな部分も含め一度は話しあっている為、俺の言葉に質問を投げかけてくる者はいなかつた。

「それじゃあ、まずは地下迷宮への入り口を田指そう

俺の言葉に、その場にいる全員が頷いた。

フレンツのパーティにいる初老の魔法使いカートンとメリアが協力して、それなりの効力を持つ結界を張つてから俺達は先に進んだ。

瘴気の存在は未だに解明されている訳ではなく、むしろ分からない事の方が多い。地上に瘴気が漏れていらないのは性質によるものなのか、それとも奴が何らかの手を打つているのか……

地上では不死者には一切遭遇せず、しかし普通のモンスターとの戦闘は多少なりにはあつた。とは言つても偽りの砂漠までの道中同様、このメンバーで苦戦する様な相手はおらず、地下迷宮の入り口まですんなりとやって来れた。偽りの砂漠の入り口同様カートンとメリアが地下迷宮の入り口にも結界を張り、俺達は作戦通り一手に分かれ地下迷宮を進む。

既に一度は通つた道程。しかも最近通つたと言う事もあり俺達のパーティは簡単に地下へ進む階段まで辿り着く。

調査隊の報告通り瘴気が充满しているが、地下1階はそこまでの濃度ではなかつた。俺達は不死者とも遭遇せず、メリアが階段に結界を張つてから下に降りる。

真つ直ぐに階段まで進んだとは言え、モンスターとも不死者とも遭遇しなかつたのは運が良かつたのだろう。が、それは同時にフレンツ達が大変な思いをすると言う事でもある。調査隊がほぼ全滅する様な状況だつたのだ。かなりの数の不死者が地下1階にもいるはずだ。

しかし俺達のパーティの目的は不死者の殲滅ではない。当然見つければ浄化するべく戦闘するが、主だった目的は先に進む事だ。地

下1階の事はフレンツ達に任せれば良い。

緊張と瘴気による嫌悪感や気持ち悪さを抑えているせいか会話もない。俺達は無言のまま、地下3階へ続く階段を真っ直ぐに田指した。

実力の見せ合い

地下3階へと続く階段が見えて来ると同時に、隣りの通路から不死者が現れた。殆ど元の形を残しているマッドウルフの不死者が三匹、顔の半分が崩れ落ちた人型の不死者が一人、右上半身を失った人型の不死者が一人。

俺達の存在に気がついていないらしく、緩慢な動きで移動している。階段を下る訳じゃないとしたら、通路的にこちらに向かってくる可能性が高い。なら、気付かれる前に攻撃するべきだ。

「レイズ、頼む」

レイズの持つルナティックの性能を見る良い機会だ。今まで前衛がモンスターを蹴散らしてきた為、まだどれ程の効果があるのか知らない。

「了解」

俺が何を求めているのか理解しているのだろう。特に質問してもなく、レイズはルナティックを構え矢を射る。数本の矢を片手で器用に持ち、連続で矢を放つその腕はかなりのものだろう。

最初に放たれた矢は炎を纏い、マッドウルフに刺さった。その剝那刺さった部分から炎が広がりマッドウルフを包み込む。周囲の不死者がこちらの存在に気がつくが、レイズの放った矢は全部で五本。二本目は炎に包まれたマッドウルフに刺さり、浄化の魔法が付加されていたらしくマッドウルフが光に包まれたかと思うと動きを止める。とは言つても、まだ完全に浄化仕切れた訳ではない様だ。

三本目がもう一匹目のマッドウルフに刺さり、一本目と同じくマッドウルフが炎に包まれる。四本目は同じマッドウルフに刺さり浄化。五本目は一早くこちらに向かおうとしていた三匹目のマッドウルフに向かっていたが避けられてしまつた。否、最初から牽制に使つつもりだったのだろう。その矢には何の魔法も付加されていない様だった。

俺達が動く間もなく、レイズは既に新たな矢を左手に掴みルナティックを構えていた。素早く再度連續で放たれる五本の矢。一本目には風の魔法が付加されたらしく、通常では考えられないスピードで人型の不死者へと至り武器を持つ腕を貫通した。当たったのは右上半身のない不死者で、左手に持っていた手斧を落とした。

二本目はもう一人の不死者に迫ったが、左手に持った盾に防がれてしまつた。これもどうやらレイズは読んでいたらしく、何の魔法も付加されていない様だつた。おそらく足止めの為だろう。

三本目は先の一撃で一步下がつたマッドウルフに向かつて。これにも風の魔法が付加されていたらしく、一本目と同じくらいのタイミングでマッドウルフに迫つて。完全にこちらに向かつて掛け始めていた為今度は避けられず、前右足を貫く。これも機動力を奪う為に狙つた様だ。

四本目と五本目はそれぞれ一度浄化の矢を当てたマッドウルフに刺さつた。殆ど動けなくなつていてこの一匹には簡単に矢が刺さり、命の代わりに動力源となつていていた瘴気が祓われた事でその活動を完全に停止させた。

「ここから下がつても良いかい？」

「そうだな。ここからは俺が行こう」

おそらくもう一度レイズが矢を放つ余裕はあるだろうが、そうすると俺が前に出るのがギリギリになつてしまいそうだ。レイズにきちんと俺の動きも見て貰つた方が良いだろうと、メリ亞に手を出さない様に言つておく。

前に出ると同時に雷の魔法剣を抜き、まずは牽制にと小さな雷撃を放つ。不死者となつた事で超再生能力を失つたマッドウルフは足を引き摺りながら雷撃を避けようとすると叶わず、雷撃を受けた熱量によつて直撃した顔面が焦げる。が、それでは止めにはならない。まあ、足の傷もあるし少なくとも機敏な動きは出来ない。

俺は迫り来る人型の不死者に向き直り、魔法剣に魔力を流し込む。

「サンダーバイト 嘰らサンダーバイト 付く雷！」

俺の紡いだキーワードに応じて、魔法剣から蛇を模した雷が伸び顔半分がない不死者を縛り上げる。雷の化身とも言える蛇に縛り上げられている為、それだけで不死者はダメージを負つていく。左腕に装着されている盾はともかく、右手に持つていた剣を落とし、それでも何とか抜け出そうと身を捩る不死者。ダメージはあっても痛みは感じないからこそ出来る動きだろう。俺は不死者へと接近しながら腰に提げた净化の短剣を左手で抜き、喰らい付く雷最後の工程である頭上からの一撃に合わせ逆手に持つた净化の短剣で喉元を切り裂いた。瘴気に感染した血を浴びない様にと瞬時に後方へ飛び、最早体当たりをするか左腕を無理矢理振り回す事しか出来なさそうなもう一人の不死者へと視線を送る。どうやら落とした武器を拾おうとしていたらしいが、レイズが貫通させた矢は上手く筋を傷付けているらしく手斧の柄を握る事が出来ない様だ。武器を持った方が有利だと言つくらいの知能は残つている様だが、状況を判断する知能は残つていらない様だ。典型的な質の悪い不死者と言える。

俺が視線を残つたマッドウルフに向けると、ダメージが抜けたのかノロノロと動きを再開していた。本来の機動力を失い、足の傷で更に機動力を失つたマッドウルフからは何の脅威も感じられない。左手の浄化の短剣を持ち直し、マッドウルフの脳天目がけて投げる。避ける動作する見せないマッドウルフに短剣が突き刺さり、净化の効果を發揮しマッドウルフが光に包まれたかと思うとその動きを止めた。

喉元を裂いた人型の不死者に視線を向ければ、やはり净化の効果を受け既にその活動を停止していた。危険を感じなかつた為きちんと確認していなかつたが問題なかつた様で良かつた。

残るは未だに武器を拾おうと躍起になつているバカな不死者のみ。俺は魔法剣を鞘にしまい、もう一本の净化の短剣を右手で抜く。どちらの手でも抜ける様に腰の左右に一本ずつ提げておいたのだ。

こちらに注意を向ける暇を与えない様に一気に接近し、こちらに顔を向けた不死者の顔に短剣を突き刺した。刹那に净化の魔法が発

動し、最後の不死者もその活動を停止させた。

「メリ亞、こいつらの浄化を頼む」

一度浄化したものの、まだ身体が残っている以上再び不死者になる可能性がある。俺やレイズでは灰にするだけの火力を持つていな
い為、浄化の炎と言う不死者に対して最も有効な手立てを持つてい
るメリ亞に最後の止めを任せた。

「任せて。滅するは闇、不淨を祓う聖なる炎

ホーリーフレア
聖光の炎！」

僅かに残った瘴気を祓うと同時に、聖なる炎が闇に落ちた身体を
灰に帰す。相手の体力や魔法に対する抵抗力によって与える効果に
差が出るが、唯の死体である今ならばその身を燃やすのはメリ亞に
とつて簡単な事だろう。滞りなく、俺達の前に現われた不死者の一
団は全て浄化し終わった。

「よし。それじゃあ階段に結界を張ってくれ

「言わねなくともちゃんと張るわよ」

そう言つて階段に近付き、出会つた時と同じ様に札を利用して結
界を張るメリ亞。その間にレイズが地面に落ちている矢を拾う。回
帰の魔法がかかつたそれらの矢は、当然再利用する事が可能だ。

「早い所先に進もう」

俺の言葉に全員が頷き、俺達は地下3階へと降りた……

フレンツ達の戦い

「おらあ！」

大柄で赤い髪を逆立てた男が、叫び声を上げながら両手斧を振る。上から下に振る事で重力を味方にした那一撃は、人型の不死者の右腕を簡単に両断した。

「切断の魔法が附加されているとは言え、とても人間技には見えないな」

きめ細やかな青髪を綺麗に揃えた好青年が、やれやれと言った風に肩を竦めながらそんな言葉を漏らした。

しかし青年は立ち止まっている訳ではなく、細身の剣を振るいながら人型の不死者と戦っている。

「クロースの斧は特別製ですからね。成り立てならともかく、腐敗が進行した不死者の骨くらいなら簡単に切断出来るでしょう」

青年の言葉に答えたのは、肩口まで伸ばした黒髪の青年。髪同様に黒いローブを纏い、木の杖を構えている事から魔法使いである事が窺える。

「違いない」

魔法使いの青年の言葉に苦笑を漏らしながらも、青髪の青年は舞う様に動き不死者を圧倒する。致命傷を与える様な重い一撃は放てないが、その剣技が素晴らしいモノだと言うのは剣を使わない魔法使いの青年にも理解出来た。

「そろそろ浄化出来るだろ？ エリック、頼む」

「分かりました。大気に住まう清らかなる風よ、邪悪なるモノを清め賜え

セイントウインド

セイントウインド

净化の風

净化の風はその名の示す通り風属性の净化魔法だ。魔法を定義付ける詠唱の通りこの魔法は大気中に存在する風を利用する為、瘴気で満ちた場所では効果が落ちる。しかしエリックと呼ばれた青年は己の中にある魔力を用いて、その効果を無理矢理高めて発動させる。

決して吹き荒れる様な強い風ではなく、そよ風と呼べる程度の風が吹き不死者を包み込む。それは決して魔法の効果が弱いからではなく、この魔法が起こす風は元からそよ風程度の勢いしかない。その代わり対象を逃す事なく、ほぼ確実に包み込む。

浄化の風に包まれた不死者はその動力源である瘴気を失い、やがて動きを止める。

「オレは次の不死者と戦つから、エリックはクロースが散らかした不死者の浄化を頼む」

「分かりました。心配ないとは思いますが、フレンツも気をつけて下さい」

「ああ」

そんな言葉を交わし、青髪の青年 フレンツとエリックは互いに笑みを浮かべ合って散開した。

「大地の精霊よ、その力を我が前に示せ ノーマドーム 土精霊の豪腕！」

肩より少し先まで伸ばした金色の髪に、やや細く釣り上がった碧い瞳の少女がそう叫ぶと、地面から大きく野太い茶褐色の腕が現れ少女の眼前に迫る人型の不死者を殴り飛ばした。

少女の両耳の先端は尖つており、人間の平均よりも十分に整った顔立ちは少女がエルフと呼ばれる種族である事を示している。更に言えば、今少女が使った精霊魔法と呼ばれる術もエルフが使う術として有名である。エルフだけが使える訳ではないので、それが証となる事はないが。

「我が前に立ち塞がりし敵を穿て ロックンード 尖岩の剣」

精霊魔法は周囲の地形を壊して発動する類の術ではないが、黒いローブ姿の初老の男 カートンの魔法は周囲の地形を利用して発現する。魔力を用いて無理矢理岩を生成する事も可能だが、周囲を利用すればその分魔力を浪費せずに魔法を発現出来るのだ。迷宮の床や壁は石によつて舗装されているが、所々に崩れおり

元来の土や岩と言つた物が露出している部分もある。それに加えて石と言う素材自体がカートンの魔法の素材にも成り得る物であり、その一部を利用して生成された岩が尖った様な形をした塊が、先程殴り飛ばされた不死者目掛けて飛ぶ。岩の先端が不死者の胸に突き刺さり、残つていた血液が飛び散る。

「滅するは闇、不浄を祓う聖なる炎

ホーリーフレア
聖光の炎

追撃をかける様にカートンは浄化の炎を生み出し、大きなダメージを負つた不死者に放つ。最早抗うだけの体力のない不死者は、炎に焼かれ浄化されて行つた。

「やるじゃない」

「お主もな」

種類は違えど同じ魔法を扱う者として、互いの実力を認め合つ二人。

「エリザと言つたかの。出来ればこれからも仲間としてやつていきたいものだ」

カートンはまだ年老いたと言つには早い年齢であるが、その口調は既に老人に近い。それは彼が持つ魔法使いのイメージから作られたものであるが、そう言つた年齢に近付いているのも事実であり誰もおかしいとは思つていながら現状だ。尤も、もつと若い頃から今の様な口調だつた為良くからかわれたのも事実だが。

「そうね……まあ、考えておくわ」

エリザと呼ばれたエルフの少女は、苦笑とも呼べる笑みを浮かべてそう答えた。

エリザ以外の四人は元々フレンツの率いるパーティのメンバーで、一人だけ急増のメンバーであるエリザはどこか居心地の悪い思いをしていた。どちらのパーティに入つても似た思いはしていただろうと思い特に気にしていなかつたエリザだが、仲間として認めて貰える事自体は悪い気がしない。異種族である事もそう言つた思いに拍車をかけているのかもしれない。

「今クロースが戦つている奴を浄化すれば、下の階に行けるな」

一通りの不死者を浄化し終わり、エリザとカートンの会話に入つて来る様にフレンツが声を発した。その後ろにはエリックの姿もある。

「そうみたいね」

「うむ。ではワシが浄化しに行こつ」

エリックが動こうとするよりも早くそう言い出て、カートンが少し離れた所で戦っているクロースの元に向かう。

戦闘を行なつてゐるクロースを除いた全員が、その瞬間は氣を抜いていた。

「生きて逃げた鼠が、仲間を連れてやつてきた様ですね」

その言葉は、どこからともなく聞こえてきた。クロースとその場を離れたカートンの耳には届かなかつた様だが、その場に残つた全員が一齊に氣を引き締め各自の武器を構える。

声のした方向へと全員が視線を向けたが、そこには誰もいない。ただ地下迷宮の景色が広がつてゐるだけだ。しかし、全員樂觀等する訳がない。この場にいる者達は相手が姿を隠す魔法或いは魔法具を持つてゐると知つてゐるからだ。

「少しば私の事を聞いてゐる様ですが……あなた達では、少々役不足ですね」

「言つてくれるぢゃないか。二人共、援護は頼んだ！」

一見冷静そうなフレンツではあつたが、実の所短氣と言える性格をしている。それでも普段はリーダーとして冷静さを保とうとしているが、思いも寄らない所での黒幕との接触に高揚を隠せず、そこに追い打ちの如く浴びせられた嘲笑を含んだ声に冷静さを保つ事が出来なかつた。例え不死者との戦闘中であつても、クロースとカートンを直ぐに呼び戻すべきだつたのだ。

フレンツは声と氣配を頼りに細身の剣を構えたまま移動を始めた。その読みは正しく目指す先には確かに声を発した張本人は立つてゐる。しかし

「閉ざすは数多の光、暗き闇の抱擁

ダークネスブリズン
漆黒の牢獄」

その言葉が紡がれた刹那、フレンツの周囲に幾つもの黒い柱が現れ牢を形成する。柱が全て繋がるとその内部を暗闇が覆う。

それぞれ魔法を放とうとしていたエリックとエリザだったが、一瞬の目配せを合図に攻撃と救援の役割分担を決める。

いざ魔法を放つ為に呪文を紡こうとした刹那、二人の周囲にも黒い柱が出現する。

「な！？」

「いつの間に！？」

エリックとエリザが驚愕の声を上げるが、結果は変わらない。そのまま魔法を放ち対抗しようとするも、二人が使った魔法は風に連なる魔法。そのどちらも闇を司る魔法を打ち破る事は出来ず、フレンツ同様に黒い檻に閉じ込められてしまった。

そこで漸く異変に気付いたカートンとクロースだったが、殆ど抵抗する事も出来ずに黒い檻に捕らえられてしまった。

「このまま処分しても良いですが……そろそろ、実験を次の段階に移しても良い頃合かもしませんね」
そんな咳きを残し、未だに姿を見せないその男は五つの黒い檻と共に姿を消した……

地下迷宮・地下4階

地下3階も難なく通過する事が出来た。不死者との戦闘は数回あつたが、現状の戦力で遅れを取る様な団体様が現れた訳でもなく、勿論多少の疲労は感じるが余裕がなくなつた訳でもない。

偽りの砂漠の地下迷宮。その地下4階と言えば、つい先日俺とルーが転移系のトラップに引っかかった階層だ。俺が簡単に作った地図と、前回メリアが作った地図とを合わせある程度の地図は出来上がっているが、完全に踏破されたと言う訳ではない。出来上がった地図は当然フレンツ達にも渡してある為、既に階下へ進むルートを把握している俺達はそう困る事はない。ここまで遭遇率を考えると、ギルドの調査隊が力不足だつただけではないかと思えてくる。

「そこを左よ」

今回も地図を持っているメリアの言葉に従い、俺達は差し掛かった十字路を左に曲がる。

「ここからはしばらく一本道ね。道を抜ければ少し広い部屋になつてて、そこに階段があるわ」

そう言えば、確かにこんな道を通りた覚えがある。まあ、ダンジョンには似た様な造りが多くあるから確証はないが。

「フレンツ達は、今頃どの辺りにいるんだろうな？」

周囲への警戒は怠らないまま、俺はふとそんな疑問を口にした。彼らは一流の冒険者と言えるパーティだ。浄化能力を持つ者も多かつたから、不死者を殲滅しながら進んでいると言つてもそう遠くない内に追いつかれるんじやないかと思つ。

「まだ地下2階辺りじゃないかと思うよ。各階層全エリアを見て回る訳だからね」

一通りこのダンジョンの地図に目を通しているレイズが、そんな風に答えた。俺の読みも同じだ。

「メリアはどう思つ?」

「あたしも地下2階にいるくらいだと思つわよ。あのメンバーなら流石に地下1階を回り終えてないって事はないだろ？し、かと言つて地下2階を回り切る程の時間はまだ経つてないだろ？しね」

地下2階をどの程度回り終えているかは別として、俺達の見解はほぼ同様だった。

「ねえねえバナッショ」

俺が一人納得していると、一番後ろを歩いていたルルーが俺に近寄つて来た。

「どうした？」

「わたしには聞かないの？」

どうやら仲間外れにされたとでも思つたのか、寂しげな表情を浮かべながらそう聞いてきた。

ルルーは決して頭が悪い訳ではないが、冒険者としては新人と言つが、そう言つ知識をそもそも持つていない。考える力はあるのだから、意見を聞く事が無意味だとは思はないが期待は出来ない。そう考えていたからこそ、ルルーに聞かなかつた訳だが……

そうだな。ルルーだって立派な仲間だ。それに見合つだけの力だつて持つていて。見た目通りの子供じやないと言う事も分かつているんだ。まあ、今みたいな面は子供っぽいと思うが……何にしても、もう少し仲間として見るべきなんだろう。俺自身が、そう認めたのだから。

「悪かつた。ルルーはどう思う？」

「あの人達の強さとか良く分からぬいけど、上の階にあいつがいたつて事はないのかな？」

ルルーの言葉に、俺はハツと息を呑んだ。見ればメリアとレイズも似た様な反応をしていた。フレンツ達の実力に疑いはないが、ルルーの言つあいつ 黒幕と思しきあの男と遭遇した場合の事は考えていいなかつた。

転移の魔法を使える以上、今突然目の前に現れる可能性だつてある。当然、1階や2階でフレンツ達の前に現れる可能性だつてある

だろう。

フレンツ達のパーティは前衛が一人、後衛が三人のパーティだ。その後衛は全員魔法使いタイプ。相手が魔法を無効化する術を持っている以上、少なくとも有利とは言えない。手数で相手の攻撃を妨げれば勝機はあるだろうが、確実とは言えないのも事実だ。

「俺達もまだまだ精進が足りないな」

「そうみたいね」

「まったくだね」

俺の言葉にメリアとレイズが頷き、ルルーはそんな俺達を不思議そうに見上げてきた。

「どうしたの？」

「ルルーが凄くて驚いたって所だ」

「そう？ ありがとう」

俺の言葉に照れた様にえへへと笑みを浮かべながら、ルルーが礼の言葉を口にした。

礼を言われる様な事を言つた訳じゃないんだけどな……

「まあフレンツ達の状況はどうあれ、俺達は予定通り先に進むしかないんだけどな」

どこかのほほんとした空気を変えるべく、俺はそんな言葉を口にした。と言つても、メリアとレイズはマジメに周囲を観察しつつ注意を払つてゐる。俺も気配くらいは常に探つてゐるが、ルルーとの会話で集中力が落ちた事は否めない。

「うん」

俺の言葉にルルーが頷き、真剣な表情を浮かべた。

俺も意識を切り替え、しっかりと周囲への意識を広げる。そうすると直ぐに、一本道の終わりが見えてきた。

「どうやら、この階での戦闘は免れた様だな」

「まだ分からないわよ。部屋の先にも通路はあるもの」

俺の何気ない言葉にメリアからツツコミが入つた。

「そうだったか？」

「ええ。もつ少し近付けば、部屋に敵がいるかどうかは分かるでしょ」「う

「そうだな」

一層気を引き締め、俺達は広まつた部屋へと向かう。慎重に、しかしまだ武器は抜かない。

しばしの沈黙。部屋の近くに辿り着くまで大して時間はかからず、中の様子を窺えるくらいの距離まで辿り着く。

「……どうやらモンスターも不死者もいないみたいだな」

部屋の中からは全く気配が感じられず、俺は一息吐きながらそう言った。他の皆も同じ判断を下したらしく無言で頷きつつ息を吐いていた。

「行こう」

それでも最低限の注意は払いながら先に進む。下の階から不死者が上がって来ない様に先に結界を張つておき、地下4階の踏破を目指し奥の道に進んだ。

それからモンスターや不死者と何度も戦闘を行ないながら、メリアによるマッピングがこの階を踏破したと判断し階段のあつた部屋へと戻る。

再び敵と遭遇する事はなく、俺達は無事に階段のある部屋へと戻つて来た。

メリアに結界を張り直して貰い、俺達は地下5階へと向かい階段を降りた。

生命への潮流（前書き）

更新時間が予定よりも遅れました。申し訳ないです。

地下5階へと足を踏み入れた瞬間、俺はつい先日の戦闘風景を思い出した。忘れていた訳ではないが、脳内にあの時のイメージが湧き上がってきたのだ。

知らず知らずに、俺は両の拳を握り締めていた。遅れを取つたとは思わないが、相手にダメージを負わす事なく悠々と逃げられた結果そのものに憤りを感じていると自覚出来る。

「そう言えば……」

そんなレイズの声で我に返り、俺はレイズへと向き直る。

「どうしたんだ？」

「地下迷宮に入つてから、生糸のモンスターと殆ど遭遇していないと思わないかい？」

今更と思えるその言葉を、今このタイミングで口にしたのには意味があるのだろうか……

レイズの言う通り、俺達がエンカウントしたのは殆どが不死者だ。生きたモンスターとも遭遇しなかつた訳じゃないが、比率で言えば一割にも満たない。

「そんなの今更じゃない？」

メリ亞も俺と似た様な事を考えたのか、レイズに對して軽い口調でそう答えた。

「確かに、地下に潜るに連れて瘴氣は濃くなつてゐるから、不死者が多く生まれるのは分かるよ。でも、だからと言つて生きたモンスターがいなくなる道理はないんじやないかな。不死者は生氣を求めるなんて言われているけど、不死者がモンスターを襲つてゐる所なんて見た事がない」

「俺も見た事はないけどな……」いつも生きたモンスターがいなつて事は、やっぱり不死者がモンスターを襲つて、その結果更なる不死者が生まれているんじやないのか？」

「そうかもしないけど、そうじゃないかもしない」

俺の言葉に、何かを考える様な仕種をしながら言葉を返すレイズ。

「僕が懸念しているのは、傷の少ない不死者が多いくて事なんだ」

「そう言えば……五体満足とは言わなくとも、結構身体的には無事と言える様な奴が多かつたわね。特に小型のモンスターなんかは」レイズとメリアの言葉を聞き今までの戦闘を思い返すと、確かにメリアの言つ通り小型のモンスターは無傷と言つても良い様な奴さえいた程だ。

そう理解し、レイズが危惧している事にも思い至つた。

「まさか、そんなハズはないだろ?」

それは、とてもじやないが信じられない事だ。推論だと言つても、そんな事があつて良いハズがないと頭が拒否する。

「そうよ。貴方、とんでもない事を考えるわね……」

メリアも同様に、レイズの考えを否定する。

「どう言つ事?」

単純に俺達の話に着いて来れなかつたのか、ルルーが何の恐れも抱かずに純粋に疑問をぶつけてくる。それが、口に出す事も憚れる様な内容であるにも関わらず。

「僕が説明するよ。言い出したのは僕だしね」

と、苦笑を浮かべながらルルーへと向き直るレイズ。ルルーもレイズから聞く事に反対する意思はないらしく真つ直ぐにレイズへと視線を向けた。

「瘴気を操り、生ある者を不死者へと変える。もしかしたら、そんな実験が行なわれているんじゃないかな……現状から、僕はそんな風に考えたんだよ」

「それは、普通に不死者が生まれるのとは違うの?」

「ああ。不死者は死んだ者から生まれる。今僕が言つたのは、生ある者を生きたまま不死者に変えると言つ事。本能のままに動く生きた死体ではなく、理性ある生きた死体を生み出す。これは、生命そのものへの冒瀆としか思えない。それこそ、理性ある人間の所業と

は思えないね」

そんなレイズの言葉を聞いて、ルルーは何を思つたのだろうか。無言のままレイズから視線を外し、何やら考え始めた様だが、…ルルーはドラゴンだ。人間とは違つた感性をしていてもおかしくはない。だが、彼女の仲間はあの黒き龍に殺されている。その事に悲しみを覚えているのは確かだ。ならば、生命の尊さは人間と同じ様に感じているはずだ。

「ルルー、大丈夫か？」

俺はルルーに近寄り、出来るだけ優しくそう問いかけた。

「……うん」

いつもの様な元気は一切なく、それでもしつかりと頷いた。

「そろそろ行こう。この階は殆ど踏破出来ていないしな」

俺のそんな言葉に各々が頷き、俺達は先に進み始めた。

最初の部屋から先に進む道は一本しかない。その為真つ直ぐにその道を進む。決して広くはない通路を進んで行くと、見覚えのある小部屋に辿り着いた。

小部屋と言つても扉がある訳ではなく、部屋の先に同じ様に通路があるだけのスペースで、先日メリアが結界を張つた部屋だ。

「マッピングはどうなつてるんだ？」

俺とルルーは転移させられた大部屋からの道順をメリアに伝え、俺達よりはこの階層を探索したであろうメリアに分かる範囲で地図を作成して貰つた。メリアにマッピングを任せているのはそうついた経緯もある。

「この辺りはまだはつきりしてゐる。この先で四方に道が分かれてる少し広い部屋があつて、一本は前回バナッショ達が転移させられた大部屋。一本があたし達がサンドワームと遭遇した大部屋に繋がつてゐる。他の一本の道はあたしも進んでないから、直接確かめるしかないわね」

「なるほどな。俺としてはサンドワームを先に片付けておいた方が良いと思うんだが、皆はどう思つ?」

「正直、あいつとは関わらない方が良いと思うけど……」

俺の問いかけに、メリ亞が渋い表情を浮かべる。

「とは言え、あいつを放置すれば不死者が増える可能性も高くなるのよね」

と言葉を続ける。

サンドワームはモンスターさえも餌にする。特別凶暴な性質をしている訳ではないが、雑食であり食に関してはかなり貪欲だ。つまりサンドワームが生きている以上、餌場に迷い込んだ小型のモンスターの食べ残し何かが不死者化する可能性が高い。しかしそれ以上に厄介なのが

「サンドワーム自身が不死者化してなければ良いんだけどな」「それは最悪だね」

俺のぼやきに一番早く頷いたのはレイズだった。サンドワームはマッドウルフ同様生命力が高いモンスターだが、厄介なのは再生能力よりも分裂する事だ。分裂する条件の詳細は判明していないが、ある程度の体積があれば分裂の条件を満たすと言われている。倒す時には色々と注意が必要なモンスターだ。不死者になればおそらくその特性は失われるだろうが、基本的に身体の一部が残つていれば動き続ける様なモンスターだ。それが不死者ともなればを完全に倒すのは浄化魔法があつても苦労するだろう。

「じゃあ、不死者化する前にやつつけないとね！」

「そうだね……まだ不死者化していない事を願つて、先に倒しに行くべきかもしね」

ルルーの言葉にレイズがそう続いた。

「サンドワームとの戦闘中にあいつが現れない事も、ね」

「……それは本当に最悪だな」

メリ亞の言つた状況は、本当に最悪の状況だ。

「メリ亞、サンドワームの餌場はどうちだ？」

気が付けばメリ亞と出合つた部屋に辿り着いていた。

「右よ」

まだ渋々と言った感じではあったが一応は納得したのだろう。メリアは大人しく俺の質問に答えた。

メリアの示した通り、俺達は右の道へと進んだ。

巨大サンドワーム戦

結論から言えば、サンドワームは不死者化していなかつた。しかし、以前メリアが言つていた通りそのサンドワームは確かに巨大だつた。

情報として伝わつてゐる中で最も巨大なサンドワームは、全長5メートル程で、幅は2メートル程と言われてゐる。しかし目の前に現れたそいつは、おそらく10メートルは超えているであろう全長に、ほぼ口だけで構成される頭部の幅は4メートル以上ありそうだ。記録上の最大値と比べざつと倍の大きさを誇るサンドワームを前に、意味合いは違えど俺達は全員言葉を失つた。

しかし呆けている暇など当然ありはしない。周囲の温度で獲物を察知すると言われているサンドワームには目がないが、確實に俺達を認識してゐた。

「来るぞ！」

一ヶ所に固まつてゐる俺達に向かつて突進して来る姿を見て、俺は瞬時にそう叫んでいた。

各自にサンドワームの突進を避け、結果俺達はばらばらに位置取る形になつた。しかしこれは都合が良い状況だ。

「メリアは周囲の食べ残しを浄化して回つてくれ！ ルルーはその手伝いだ！」

「分かつたわ！」

「うん！」

咄嗟の俺の指示に一人が頷く。

「レイズ！ 俺達はとりあえず足止めだ！」

「了解」

俺が剣を抜くよりも早くレイズは弓を構え、矢を射る体勢に入つてゐた。その早業に一瞬驚いたが、上の階で見せて貰つた腕を考えれば当然のスピードかもしれない。

レイズが連續で放つた矢は炎を纏いサンドワームに迫る。サンドワームの皮膚は決して堅い訳ではなく、炎の矢を受ければそれなりにダメージは負うはずだ。にも関わらずサンドワームは一切矢を避けようとはせず、先に武器を構えていたレイズへと突進した。三本しか矢を射る事が出来ず、レイズは接近するサンドワームから距離を取る様に跳躍した。俺がいる方向とは反対方向だが、奴に的を絞らせ難くしたい俺の意図には気付いてくれている様だ。

「これでも食らいな！」

再びレイズを矢を射る時間を稼ぐ為、そしてメリア達を標的にさせない為に俺は魔法剣に魔力を流し込み雷撃を放つ。

どうやら標的をレイズに定めたサンドワームの背面に雷撃が直撃したが、その熱量で多少の火傷を負わす程度しかダメージを与える事なかつた。それでもその注意を俺に向ける事が出来、頭部をこちらに向けた事でレイズに余裕が生まれた。瞬時に放たれる五本の矢には全て風の魔法が附加されたらしく、凄まじい勢いでサンドワームに突き刺さる。貫通はしなかつたが、矢が半分程身体に埋まる程深く突き刺さつた為、先程の様にそのダメージを無視する事が出来なかつた様だ。痛みを感じ身をうねらせるサンドワームに追撃をかけるべく、俺は再び魔法剣に魔力を流し込む。

「シャッジメント裁きの雷！」

魔法剣が空中に生み出した雷球は、本来ならば対象に落とす事でダメージを与える。しかし殆ど天井近くに頭があるサンドワームの上から落とすのは至難の業と言える。そこでキーワードを必要としない通常の雷撃同様に、魔力を用いる事で対象に向けて飛ばす様調整する。その動きは緩慢とも言えるものだつたが、そもそも距離が近かつた事もありサンドワームが避ける暇はなかつた。

直撃。その身を消炭にすると言う事はなかつたが、皮膚には大きな火傷を負わせ、かなりのダメージを与えたのは間違いない。その証拠に、痛みを感じているサンドワームは先程よりも盛大に暴れ回つてゐる。

「もう一発……！」

「ジャッジメント裁きの雷！」

再びキーワードを紡ぎ、巨大な雷球を発生させる。その間にレイズが反対側で矢を放った様だが、今度はその詳細を見ている余裕はなかった。それでもサンドワームにダメージを与えているのは確かに、より一層暴れる。そこに追い打ちをかけるべく、雷球を出来る限り先程と同じ位置に向け放つ。

刹那、サンドワームが人間では認識出来ない雄叫びを上げた。痛みを感じながらも、再度自身に向かってくる雷球　高熱源を危険だと判断したのだろう。雄叫びは気合を入れる為のものだったのかもしれない。

雷とは反対方向　レイズに向かつて突進するサンドワーム。飛んで来る矢等氣にも留めない。と言うよりは認知出来ていないのだろう。むしろ正面を向いた事で自身を傷付けるはずの矢さえも巨大な口で呑み込んでしまう。レイズは既に回避行動へと移つており、何とか側面を狙おうと移動している。しかしサンドワームもその熱源を追い頭の位置を変え移動する。

多少の痛みを我慢し攻勢に出たサンドワームを、速度の襲い^{ジャッジメント}裁きの雷で捉えるのはほぼ不可能だろう。俺の持つ雷の魔法剣には欠点があり、それは能力の同時発現が出来ない事だ。つまり、ゆっくりと壁へと向かう雷球が消滅するまで他の能力を行使する事が出来ない。一応、魔力を使って無理矢理消す事も出来るが……

雷球の存在はサンドワームに対して牽制にも腹にもなり得る。ならば、このまま残しておくのも手だろう。

「レイズ！　向こうに気が向かない程度で良いから、出来るだけ雷球の周囲で戦うぞ！」

レイズに向かつて叫ぶ様に伝え、俺は俺でサンドワームとの距離を詰める。サンドワームの攻撃方法は少ない。基本は体当たりか丸呑みの一択しかない。サンドワームの体内　胃には強力な酸があり、稀にその酸を逆流させ飛ばしてくる事もあるらしいが、どうやら胃酸を逆流させると言つ行為がサンドワームの食道を傷付ける恐

れがあるらしく滅多にない攻撃方法だと言われている。とは言え、命の危険に晒されれば胃酸攻撃をしてくる可能性も十分にある。サンドワームの正面には出来るだけ立たない様に位置取り、何度か剣撃を与える。しかし、マッドウルフ程ではないが再生能力の高いサンドワームには多少の傷を与えた程度では殆ど意味がない。上手く切断出来たとしても分裂しては意味がない。

現状だけを見れば優勢なのは間違いないが、決定打を与える事が出来ず消耗はしていく。最初の雷撃で与えた火傷がすっかり再生している事も考えれば、このままではいつ劣勢になつてもおかしくはない。

仕方ないな。やはり雷球は消そう。もうしばらくすれば壁に到達して消滅するだろうが、悠長に待つている暇もなさそうだ。

「魔法解除」^{レイズ}

魔法剣に魔力を込め、発現させている魔法剣の能力を強制的に解除する為のキーワードを紡いだ。魔法剣が一瞬光を帯び、直ぐに収まると同時に雷球も消失した。

その間にレイズが矢を放ちサンドワームの注意を引き付けてくれていた為、俺は新たに魔法剣に魔力を流し込む。

「喰らい付く雷！」

キーワードに応え魔法剣から発現した雷の蛇が、サンドワームの腹部へと迫りその名の通り喰らい付く。^{サンダーバイト}基本的に俺の魔法剣は固定の能力を発揮する事しか出来ないが、喰らい付く雷は発動時に多少だが動きを変化させる事が出来る。それは発現する能力の定義さえ当てはまつていれば、その能力を発現させる事が出来る為だ。^{ジャッジメント}裁きの雷を落とす動作から飛ばす動作に変えたのも同じ理屈だ。

いつもの様に相手に巻きつかせる訳ではなく、ただその身へと喰らい付く。それだけでもダメージは与えられるし、電撃も同時に与えられる為痺れさせる事も出来るだろう。サンドワームにどの程度効果があるかは分からぬが……

喰らい付く雷が消える前には魔法剣に魔力を通しておき、効果が

消えるタイミングを見計らつて今度は通常の雷撃を連續で三発放つ。その全てがサンドワームを捉えダメージを与えてる。反対側からはレイズの矢が何本も放たれ、最早サンドワームは攻撃に転じる余裕がないのかただ暴れ回つてているだけの様に見える。どうやらその巨体故なのか、胃酸を飛ばす機能が低下している様だ。

痛みに堪えられなくなつたのか、サンドワームの巨体が下がる。

人間で言えば蹲つた様なものだろうか。何にしてもチャンスだ！

「裁きの雷！」

魔法剣へと魔力を込めキーワードを紡ぐ。魔力が変換され現れた雷球が、落下させると言う発現能力の流れと重力の影響を受け、それでも決して速くはないスピードだがサンドワームへと向かつて落ちる。

雷球が胴体部分へと直撃し、熱量と電撃で直撃部位を死滅させた。人間では決して聞き取れない異音の断末魔を上げ、そのまま完全に倒れ込むサンドワーム。

断末魔と言つたが、実際にはまだ完全に死んだ訳じゃない。電撃による痺れもあるのかもしれないが、ダメージとショックそのもので気絶したのだろう。まだ身体が痙攣しているかの様に動いている。「メリア！ そつちは終わつたか？」

遠くの方にいるメリアに向かつて大声で呼びかけると、同じ様に大きな声で言葉を返して来る。

「もう少しよ。たまに不死者化する奴もいて、ちょっと手を焼いてるわ」

それもそうか。地下1階に比べ大分瘴気も濃くなつていて、緊張感や使命感もあり何とか耐えているが、気持ち悪さは拭えていない。これだけの瘴気なら不死者が生まれるのは当然だろう。

「レイズ、メリアと代わつて来てくれ。こいつを不死者化しない様に片付けるには、メリアの魔法が必要だ」

「分かった」

レイズは俺の言葉に頷き、メリアの方へと駆けて行つた。直ぐに

メリアがこちらに来て、未だに活動を再開しないサンドワームへと視線を向ける。

「って言つた、これだけの大物を良く」こんな短時間で倒したわね「まだ倒した訳じゃない。それに多分、こいつも瘴気の影響を受けてるんだろうよ」

モンスターと言えど生物である事に変わりはない。瘴気によつて悪影響を受けるモンスターの方が多いと言われている。このサンドワームも、おそらく何かしらの悪影響を受けていたはずだ。

「そうかもしないけど……まあいいわ。それで、こいつを浄化すれば良いわけね」

「話が早くて助かるよ」

「どう致しまして」

そう答えて、メリアは呪文の詠唱へと入る。

「滅するは闇、不浄を祓う聖なる炎

ホーリーフレイア
聖光の炎！」

メリアの放つ浄化の炎に焼かれ、その身が灰へと変わつていくサンドワーム。このサンドワームはやはり瘴氣に中あてられていたのだろう。通常以上に浄化作用に弱くなっている様だ。それでも小さな不死者を滅するよりも長くその炎を操り、しばしの時間をかけて巨大なサンドワームは完全に消滅した。

その時にはレイズが残つた死体を全て浄化し終えた為、この大部屋 いや、この階層での大きな戦いはこれで幕を閉じたと言つても良いだろう。

大したダメージを受けた訳じゃないが、魔力や精神力の消耗は激しい。俺達はそれを持ってきたアイテムで補い、少しの間休憩する事にした……

瘴気を内包せし者

十数分の休憩後に探索を再開した結果、地下5階にはこれ以上の大物がいなければ特別な仕掛け等もなかつた。隠し部屋の類も見つからず、数回不死者との戦闘はあつたが問題なく地下5階の踏破を終えた形となる。

地下6階へと続く階段のある小部屋へと足を運び、メリアに結界を張つて貰う。その行為 자체はこれまで何度か繰り返してきたものだが、知られている限りまだ誰も足を踏み入れていらない地下6階へ足を踏み入れるかと思うと、多少は胸が躍ると言うものだ。尤も、今回の黒幕と言う存在を考えれば前人未到ではないだろうが。

お宝が眠つているのではないかと言う僅かな期待を持ちつつ、強大な敵が待ち受けている事を考えれば緊張もする。そんな相反する感情を抱きながら、俺達は地下6階へと進んだ。

地下6階に降りてた瞬間　　否、降りている最中から既に、俺達はその異様な光景に圧倒されていた。

地下6階は、かなり広大な一つの部屋だった。一応端までは見渡せるが、サンドワームがいた部屋や俺とルルーが転移させられた部屋とは比べ物にならない程の大部屋。階段は部屋の端にあつた為、否応もなしに俺達の目に巨大な魔方陣が入つてきていた。

描かれている紋様は良く分からぬが、とりあえず不気味さだけは伝わってくる。そしてその異様さを際立たせているのが、魔方陣の中心へと向かつて渦巻いている大量の瘴気だ。はつきりと目に見える程濃厚な瘴気が集まつてゐるその様子は、見てゐるだけでも気持ち悪くなつてくる。

「一人増えている様ですが……」

突然聞こえてきたその声に、俺達は瞬時に武器を抜き構えた。

「ようこそ。我が研究所へ。そうですね、まずは偽りの砂漠にある地下迷宮の最下層への到達をお祝いしておきましょ。おめでとう

「ござります」

聞き覚えのある男の声が、とても本心とは思えない祝福の言葉を紡ぐ。

「まあ、研究所と言つてもこの大部屋を利用して特別な魔方陣を用意しただけの場所ですが」

その言葉から、この場所にお宝の類がない事が窺えた。と言うより、もしかしたら元々何かの実験場だったのかもしれない。

「ルルー、場所はどこだ？」

小声で横に立つルルーに奴の場所を聞くと、その答えが返つて来る前に男の声が発せられた。

「ああ、その子供は私の姿が見えるんでしたね。この乱射の光の性能は本物なんですがね……余程特別な瞳を持っている様だ」

そう言いながら、ルルー以外には見えていなかつたであろうその男が姿を現した。

その姿は以前と変わらない黒いローブ姿で、頭にはフードを被つている。

「一応聞いておくが、大人しく捕まるつもりはないよな？」

「当然です。まあ、こうして被検体モルモットがたくさん手に入るのですから、ギルドには感謝しても良いかもせんね」

その言葉を聞いて、嫌な予感がした。ギルドが手を回したと理解しているつて事は、おそらくフレンツ達と会つたと言う事だ。その上でこいつがここにいると言う事は、フレンツ達がやられたと言う事だ。

「では、せっかくなので私の実験の成果を見て頂きましょう」

男のそんな言葉に応える様に、その背後 魔方陣の中心に大きな黒色の四角い塊が現れた。中空に浮いているその底辺から、一人の男が落下して床に落ちた。

「人間の場合はモンスターよりも個人差があるらしく、私の思う様な結果に至つたのはこの男一人ですが……まあ、他も時間の問題でしょう。とりあえずは、彼の性能テストにお付き合い下さい」

男がそう言つと、黒い塊から落ちてきた男がゆっくりと立ち上がつた。その男には、見覚えがあつた……

「クロース……」

その男は間違いなくクロースだ。しかしその目には生氣が感じられない。ゆつたりとした動きで、背中に留め具で括られた斧を抜き構える。

「聖光の炎！」

クロースが向かつてくるよりも速く、メリアが浄化の炎を放つた。が、クロースは炎に焼かれつつも一切気にした様子がなく駆け出した。さっきまでの緩慢な動きとは違う、生糸の戦士の動きとまではいかないがそれでも十分に素早い動き。

「あああああ！」

意味を成さない雄叫びを上げながら斧を振りかぶり、一番近くにいた俺に向かってきた。

クロースが斧を振り下ろそうとしたその瞬間に、俺はクロースの背後へと回る。振り下ろす動きを止める事が出来ずに隙だらけになつたクロースに向かって、背後に回ると同時に左手で抜いた浄化のナイフを振るつた。筋肉への負荷など気にも留めない動きで回避行動を取つたが、ナイフでの一撃がクロースの左腕に当たつた。浅い一撃ではあつたが、その肌に傷を付けるくらいの効果はあつた。しかしその一撃は思った以上の効果があつた。傷口から瘴気が漏れ出したのだ。

「なるほど。モンスターとは違ひ瘴気を完全に内包は出来たものの、多少の傷でも漏れてしまつと……まだまだ改善の余地はありますね」

なんて男が呟くが、今はそれよりもクロースだ。

否、待てよ。奴はさつき何て言つた？ 他も時間の問題？ と言う事は、あの黒い塊の中にはフレンツ達が入つてゐるつて事じゃないのか？ だとすれば、早急に助け出す必要がある。とは言え、対処法が分からぬ上に悩んでいる暇はない。となると、奴を倒すのが先か……

「皆は奴を倒してくれ！ クロースは俺一人で何とかする！」

一番クロースと相性が良いのはレイズかもしれないが、奴の対魔法能力へ対抗する為にレイズを連れて来たんだ。ルルーがどれだけ連携に加われるかは分からぬが、三人がかりならある程度は戦えるだろう。速く助太刀に入る為に、出来る限り速くクロースを何とかしないとならない。

俺は覚悟を決めて、再びこちらに向かって来るクロースへと意識を集中する事にした。

バナッシュ VS クロース

再び襲いかかってきたクロースの一撃を避けたと同時に魔法剣をしまい、背中に鞘を構えたもう一本の魔法剣を抜く。

アリエステス。今回の戦いの為に手に入れた魔法剣。一応試しに素振り等はしたが、実戦ではまだ使っていない。奴との戦いの前に慣らしておく必要もあるだろう。それに、クロースの持つ魔法斧を相手にするのなら、雷の魔法剣よりもアリエステスの方が渡り合えるだろう。

クロースもターゲットを俺に見定めたらしく、俺を真っ直ぐと見据えてきた。変わらずに生気が感じられない瞳だが、それでもしっかりと俺の姿を映している。

アリエステスを抜く為に少し距離を置いたからか、直ぐに襲いかかってくる気配はない。そう感じた瞬間、クロースがおもむろに斧を振り上げた。そしてそれを勢い良く振り下ろした刹那、俺は聞いていたクロースの魔法斧の能力を思い出した。

俺は瞬時に眼前へと迫つて来た目に見える密度の真空刃を避け、そのままクロースへの距離を詰めるべく駆ける。アリエステスを外側から振ると、左腕の箒手でそれを防ぎ、そのまま斧を振るつてきた。俺の一撃で箒手にヒビが入ったのを視認しながら、クロースの斧を避ける。そのまま左手のナイフを振るうと、その一撃を受けてはいけないと理解したのかクロースは後ろに跳んだ。一瞬の間を置いて俺もその後を追うべく跳躍し、アリエステスを振るつ。それを斧で防がれ、お互いにバランスを崩し体勢を立て直すべくお互いに距離を取る。

今の状態に慣れつつあるのか、クロースの動きが次第に良くなっている。これは、益々時間をかけられなくなつたぞ……

「正気に戻つてくれるのが一番楽なんだがな」

そんな咳きを漏らすが、簡単に奇跡みたいな事が起こる訳がない。

体勢を立て直したクロースが、再び斧を振り上げる。間合い外からのその動作が真空刃を放つモーションだと判断し、振り下ろすと同時に斜め前方へと跳躍する。

案の定真空刃は俺の横を通過して行き、クロースの懷に飛び込む直前にアリエステスを鞘にしまう。今必要なのは浄化のナイフだ。俺は腰に括り付けたもう一本のナイフを右手で抜くと同時にクロースへと振るう。その一撃は避けられたが、踏み込んだ右足を軸足にして今度は左手のナイフを振るう。

今度は斧で防がれるが、まだ止めない。再び右のナイフを振るう。斧で防ぐのは間に合わないし、避けられるタイミングでもない。クロースはビビ割れた箇所でそれを防いだが、重さのないその一撃でクロースの左箇所は完全に割れて地面へと落ちる。だが、落下するのを最後まで見届ける必要はない。俺は最短最速の一撃を繰り出すべく左手のナイフを突き出した。それを斧で防ごうとしたのか、クロースは右腕を動かしたがその判断は大きなミスだ。

結果的にクロースの防御行動は間に合わず、俺の一撃がクロースの左腕に突き刺さった。と言つても深く刺した訳ではなく、刃先1センチ程が刺さった程度だろう。だが俺はそのままナイフを外側に振り抜き、その傷を広げる。浄化の効果を受け傷口から瘴気が漏れ出す。

痛みは感じなくても、身体の構造そのものは誤魔化せない。腕を裂かれた傷と浄化の効果を受け、クロースは斧を落とした。

チャンスだ！

一瞬そんな考えが頭に浮かんだが、俺は思い留まつた。クロースはまだ生きている。この隙を突けば殺す事は出来るだろうが、おそらくそのまま本当の不死者になるだけだ。なら、今現在の異常な状態を何とかする方が先決なのではないだろうか。しかし実際に戦つてみて、クロースを助けるのはかなり難しいと思える。なら、一度完全な不死者にしてしまえば、後は単に戦いながら浄化すれば済む話になる。だが……

懸賞金の懸けられた罪人ならともかく、一介の冒険者であるクロースを殺すと言う行為を簡単には受け入れられなかつた。

ダメージを受けたショックで武器を落としたクロースだが、完全に武器を持てなくなつた訳ではない様だ。クロースは既に右手で斧を拾い、俺に向けて斧を振つていた。慌てて後方に跳んでそれを避ける。

着地すると同時にナイフを両方しまい、俺は雷の魔法剣を抜いた。

「生きてるつて事は、氣も失うよな」

それは、一縷の希望と言える内容だ。生きて脳を使って動いているのなら、氣を失う事もあるだろうし、氣を失えば動きを止めるはずだ。その為には、雷の魔法剣が役に立つ。

「死ぬなよ、クロース」

俺はそう呟くと同時に、魔法剣に魔力を込め

「喰らう付く雷！」

再び俺へと接近してきていたクロースに向かつて、蛇を模した雷が襲いかかつた。

雷蛇はクロースへと巻き付きその動きを阻害する。そして頭上へと上がつた頭部分が大きく口を開き、クロースの頭から飲み込む様に落ちた。

雷撃と高熱を受け、鎧に守られていない部分は火傷を負つた様だ。当然強い電流を受け身体はショックを受け、更に痺れさせる事にも成功した。そして何よりも、俺の考えは正しかつたらしくクロースは氣を失いその動きを止めた。痙攣しているから死んではないだろう。

これで、しばらくは無力化出来たはずだ。

一応持つている縄でクロースを縛り、俺はボス戦を繰り広げているであろう方へと視線を向ける。

少なくとも今はまだ、どちらが優勢と言つ事はない様だ。俺は一呼吸だけ置いて、参戦するベグルルー達の元へと向かつた。

少し離れた所で戦うルルー達の様子を、近付きながら観察する。基本的にルルーが男に殴りかかり、メリアとレイズがそれをフォローする形で戦っている様だ。

ルルーの攻撃は単調だが、直撃すればその一撃は十分に重い。ドラゴンの膂力を舐めてはいけない。ドラゴンだと気付いている訳ではないだろうが、おそらくルルーが相当の腕力を持っていると既に理解しているのだろう。もしかしたら一撃くらいは受けたのかもしれない。男はルルーの攻撃を警戒し、当たらない様に立ち回っている。

しかし男がルルーを脅威に感じているのは腕力だけのせいではないはずだ。男が使う魔法は古代語魔法を除けば闇に属する魔法と炎の魔法だった。とすれば、そもそも魔法への耐性が人間よりも高い上、炎に関してルルーは一切受け付けない。それは人の姿をしている今でも変わらない為、ルルーへの決め手に欠けているのが実情だ。おそらく、男はフォローに回っている一人を狙いたいのだろう。が、二人はルルーと違い腕の立つ冒険者だ。上手い具合に立ち回り攻撃を受けない様にしている。しかしメリアの魔法は相殺される事が多く、レイズの矢は無効化こそされないものの普通に魔法で迎撃されている。

現状を見れば、期待以上とは言わないまでもレイズの存在はやはり大きい。少なくとも、男が古代語魔法を放つ暇は与えていない。

俺は握っている雷の魔法剣に魔力を通し、仲間に何をするのか察して貰える様大きな声でキーワードを紡ぐ。

「ジャッジメント裁きの雷！」

男のいる位置よりも少し後ろ その天井近くに現れる巨大な雷球。それがゆっくりと地面へと向かい落ちていく。そのままなら当たらない。しかしメリアもレイズも俺の意を汲んでくれた。

「ファーブレイズ
灼熱の砲撃！」

叫ぶメリアが突き出した両手の先から、凄まじい勢いで一筋の炎が放たれる。直線にしか進まないが、圧縮された炎の威力はかなりのものだろう。それは男へと向かつて放たれた訳ではなく、男の右脇を通過していく。灼熱の砲撃は術者が魔力を途切れさせない限り、その放出を持続させる事が出来る魔法だ。つまり、逃げ道を塞いでいる。

男の左方には剣を構えた俺と弓を構えたレイズ。そして正面からはルルーが突撃を始めている。ルルーの相手をするか、背後に逃げて雷球の餌食となるか。実際に打てる手は色々あるだろうが、簡単に見える答えを一択に絞り、一瞬の判断をさせる。はつきり言って、この一つの手はどちらも俺達に都合が良い。

さあ、どうする……？

「飽くなき探求！」

男はルルーと距離を取ろうと後ろへ跳躍。と同時に魔法を発動し、雷球を無効化しようとする。しかし詠唱せずに発動した程度の魔法では、如何に魔法を無効化する為の魔法と言えど裁きの雷を飲み込む事は出来ない。

それでも威力を削がれ雷球が一回り程小さくなつた。しかし未だに雷球の落下地点は男を捉えている。男もそれは理解しているだろう。右腕を掲げ、おそらくは右腕に嵌めている魔法具へと魔力を通している。

「レイズ！ 今だ！」

男の腕に嵌められた腕輪型の魔法具は、おそらく前回メリアの魔法や俺の魔法剣の能力を無効化した物だ。威力の落ちた裁きの雷なら十分に無効化出来るのだろう。が、それは俺達自身に対する対魔法能力を失うと言つ事だ。

高速で放たれる五本の矢。そして灼熱の砲撃を放つのを止め、メリアが違う魔法を放つ。

「灼熱の怒り！」

「ファーブレイズ
灼熱の怒り！」

「偽りの炎王！」
レッサーイフリート

メリアの魔法に対し後追いで発動した男の魔法によって、男の背後に精靈界における炎の王を模した炎の魔人が現れる。その発動スピードはかなりのもので、レイズの矢が届くよりも速く、炎の魔人が左腕一本で全ての矢を握り潰し、右腕でメリアの炎を掴み取つた。灼熱の怒りは炎の魔法の中では下位の魔法だが、偽りの炎王は上位に位置する魔法だ。それを詠唱せずに簡単に発動してみせる辺り、流石は古代語魔法を扱えるだけの事はある。

偽りの炎王は擬似召喚魔法と呼ばれる魔法で、術者の意を汲みながら半自動で攻防を行なう。発動時に必要な魔力の他に、維持する為に常時微量だが魔力を消費し続けると言う欠点はあるものの、術者からの魔力供給が切れない限りは完全に消滅させるのが難しい。

「流石は、古代語魔法から生き延びただけの事はありますね」

そう言葉を紡ぐ男の声色はどこか余裕そうだ。確かに偽りの炎王を維持している現状は男にとって有利に感じるだろう。しかし、そこまで余裕があるとは思えない。古代語魔法を過信しているのか、それとも他に手があるのか……

「仕方ありません。檻は貴方達に使うとしましょう」

その言葉が何を意味しているのか、何となく想像が付いた。

「解呪」
ディスペル

男がそう呪文を紡いだ刹那、黒い塊が消失した。中に閉じ込められていたであろうフレンツ達がドサリと音を立て地面に落ちる。おそらく、まだクロースの様な状態にはなっていないと思われる。だが安心は出来ない。男は檻を俺達に使うと言つた。それはつまり、あの黒い塊を使って俺達を閉じ込めると言う事だろう。そしておそらく、あの塊は複数同時に展開出来ない。だからこそフレンツ達を解放したはずだ。だったら

「皆、散れ！」

「無駄ですよ……漆黒の牢獄」
ダーカネスブリッド

その言葉が紡がれた刹那、散開した俺達全員の周囲に幾つもの黒

い柱が現れ牢の様な形になる。

くつ……発動時は多重に発動出来たか……完全に俺の失策だ。おそらくは闇の魔法と思しき黒い牢に、メリアは浄化の炎を放ち、レイズもおそらく浄化効果を附加した矢を放つ。だが、その程度で黒い牢は揺るがない。

「ルルーは……どこだ？」

「バナッショウ」

そう考えた瞬間、背後からルルーの声が聞こえてきた。

「これは古代語魔法に近い魔法みたい。多分、魔法具の力を借りて無理矢理強力な魔法にしてるんだと思う」

「つて言う事は、普通の魔法じゃ対抗するのは難しいって事か？」

「うん」

俺の言葉にルルーが頷く。

牢の隙間を縫う様に闇が生まれ、俺達の視界は既に阻まれている。外からの音も聞こえない。だが、自身とルルーの声は聞こえる。同じ牢の中だからだろうか。

「結局、お前の力を借りる事になつたな……」

出来れば、俺達自身の力で解決したかつたが……

「わたしは、バナッショウの力になれて嬉しいよ」

「そうか。まあ、そんな風に思われるのも悪くないかもな」

そう言葉を漏らすと、背中に抱きつかれる感触があつた。見えないが、感触は確かにある。それがルルーのモノだとはつきりと理解出来る。

「ルルー。力を貸してくれ」

「うん」

ルルーが頷くと同時に、その力が　ルルーと言つ存在が俺の中に入つて来た。

「奴を、殲滅する！」

纏いし者へと変貌した俺は、全身から浄化の炎を発する。体外に爆発的に発した浄化の炎によつて、俺を捕らえていたはずの黒い牢

は完全に消滅した。

「なー?」

男の驚愕の表情が目に入ってきた。メリアとレイズは捕らえられたままだが、今はそのままで問題ないだろ。どうやら俺達を捕られた事で、レッサー・イフリート偽りの炎王は解除した様だ。

「その波動……なるほど。纏いし者でしたか。ですがその不自然なまでに強力な力は一体……」

男は纏いし者を見た事があるのだろう。だが、ルルーの正体まではまだ思い至らない様だ。まあ、そんな事は関係ないが。

「お前の魔法は俺には通用しない。諦めるんだな」

「確かに貴方には効かないかもしません。が、そこに倒れている連中にはどうでしようかね?」

男の言葉は、脅しには値しない言葉だつた。俺の動きを抑えるつもりだつたんだろうが、今の俺ならば古代語魔法を放つ前に奴を殺せるだろ。し、例え放たれても瞬時に消滅させる事が出来るだろ。

「もう、終わつたんだよ。お前の実検はな」

そう言葉を発し、俺は躍躍する。俺の言葉が奴の耳に届いたであろう瞬間には、その背後へと回り込む。と同時に雷の魔法剣をしまいアリエステスを抜き構える。

男は俺が背後に回り込んだ事実には気が付いた様だが、振り返るのが精々だった。いや、むしろ戦士ならば振り返らずに回避行動を取り付けていただろ。

「終わりだよ」

そう言いながら、俺はアリエステスを振り下ろした。

驚く程呆気なく、男の首が飛んだ。

事後処理は大変かもしれないが、こうして黒幕が命を落とし、今回この事件は幕を下ろした……

事件解決から一週間が経つた。事後処理も一段落し、俺達はギルドから今回の報酬を貰つた。その後改めて俺達に礼が言いたいと言うフレンツ達の誘いを受け、ギルドの近くにある酒場へと足を運んだ。まだ昼を回つた所だが、奢りで飲めるなら時間なんて関係ない。

「いや、本当に助かつたよ」

フレンツの軽い演説の後に杯を交わし、昼食を兼ねた飲み会が開かれて直ぐにフレンツがそんな言葉を発した。

「結局ほとんど役に立たなかつた拳句、生きた不死者アンデッドにされる所を助けられたんだからね。本当、いくら感謝しても足りないくらいだよ」

と続けたのはエリックだ。フレンツ達は一様に頷く。因みに、この場にはクロースもいる。本調子と言つ訳ではないが外傷は大きくなく、無理矢理に浸透させられた瘴氣も時間をかける事で魔法による浄化が効いた。

「結局、あいつは何者だつたんだろうな？」

フレンツの呟いたその疑問こそが、今回の事件で明らかにならなかつた点だ。名前も分からぬあの魔法使いの男が、一人で外道に落ちただけならばまだ良い。しかし、あれだけ大掛かりな魔方陣や上質な魔法具を持っていた事を考えれば、一から十まで単独で行なつたとは思えない。

「でもまあ、偽りの砂漠にある魔方陣は潰したし、踏破された事でダンジョンの管理もギルドがきちんと行なつてくれるんだ。当面、少なくともあの場所で今回みたいな事件は起きないだろ？」

俺がそう言つと、全員が同意の反応を見せた。

あの男に仲間や協力者がいたとしても、今回程大掛かりな事はしばらく出来ないだろう。問題は、俺達に対する復讐があるかどうかだ。

「なーに難しい顔してるんだよつ。とりあえず今は飯と酒を楽しもうぜ！」

俺の肩に腕を回しながら、既に出来上がっているクロースがそんな風に言つた。

「それもそうだな」

俺は苦笑しながら頷き、周囲の歓談に混ざる事にした……

フレンツ達による謝礼会が終わったのは、完全に日が暮れた頃合いでだった。

完全に酔い潰れたクロースと、途中クロースの挑発に乗つて同じく酔い潰れたフレンツを、おそらくはセーブしていたであるエリックとカートンが抱えて宿へと連れて帰つた。

「エルフってのは皆酒に強いのか？」

俺の記憶が確かなら、このエルフの少女 確かエリザだったかも、クロースやフレンツと同じくらいか、下手したらもつと大量に酒を飲んでいたはずだ。にも関わらず、軽く顔が赤みがかつている程度で呂律もしつかりしている。

「そうね。私の知り合いは皆強かつたから、種族的に人間よりもアルコールに強いかもしないわね」

「今までエルフってのは酒に興味なんて持たないと思つてたんだが、とんだ偏見だったみたいだな」

そう言つて俺が苦笑を浮かべると、ヒリザも小さく笑みを浮かべた。

因みに、メリ亞も相当酒を飲んだらしくしっかりと潰れ、レイズが介抱しながら宿に連れて行つた。ルルーは俺の背中で眠つてゐる。

「それはそうと、改めてお礼を言つわ。ありがとう」

「さつきまでさんざん礼は言われたからもういいよ。いや、そもそもそこまで感謝される様な事じやない。戦力を確保しておきたいつて言う打算だつてあつたんだからな」

「でも、結局貴方達だけで敵を倒した訳だし、私達は助けられただけだもの。エリックも言ってたけど、いくら感謝しても足りないくらいだわ」

「まあ、俺としては気にするなとしか言い様がないなエリザの言葉に俺は再び苦笑を浮かべる。本当に、こんな風に感謝して貰いたい訳じゃない。いつもの人助けにしてもそうだ。結局は、自分が納得する為にやつていてるに過ぎない」

「それで、お願ひがあるんだけど……」

どちらかと言えば強気な雰囲気のあるエリザだったが、どこか畏まつた様に言葉尻を濁しそう言つてきた。

「何だ？」

「私を、仲間に入れて欲しいの」

その言葉は、かなり予想外のものだった。そもそもエルフは多種族と積極的に関わろうとしない。冒険者なんてやってる以上は、エリザは封鎖的な思考はしていないのでだろうが、自分から人間のパーティに参加したいと言つてくるとは思つていなかつた。

「何でまた？」

「貴方に助けられたから。その恩返しがしたいの」

恩返しねえ……

「正直、別にそんなものは期待してない。それに、普段俺はソロで動いてるんだ。メリアとは今回一蓮托生の身だつたに過ぎないし、レイズはメリアの知り合いつて事で力を借りただけなんだよな。一抹の不安はあるものの、一応メリア達とのパーティも解散してるんだぜ？まあ、メリアとレイズはしばらく一緒に行動するみたいだけだな」

つまり、恩返しがしたいなら俺と一緒にじゃなくても良い訳だ。

「さつき私はこう言つたわ。貴方に助けられたから、恩返しがしたい。と」

それはつまり、敵を倒したのが俺だつて知つてるって事か？ あの時、全員気を失つてていると思ってたんだがな……

「貴方がその子と契約を交わしているのも理解しているわ」「なら、半端な力の持ち主じゃあ足手纏いにしかならないって分かってるよな?」

食い下がつてくるエリザに対し、俺はわざと冷たい言葉を向ける。「ええ。その上での申し出よ。それに、エルフの力なら役に立つと思わ」

エルフの力、ね……

確かに、エルフには神秘的な力があると言われている。その真偽は分からぬが、エルフであるエリザ本人が言つていてるのだから、何かしらの能力は秘めているのだろう。

「……分かった。ただし、ルルーが了承したらな」

「それで構わないわ。ありがとう」

「それじゃあ、明日の正午にギルドで落ち合おう。その時までにはルルーの意志を確認しておくれ」

「ええ」

そんな言葉を交わし終えた頃には、お互い泊まっている宿への分かれ道へと差し掛かった。

夜の挨拶を交わし、俺達は別々の帰路へと着く。

こうして、今度こそ本当に今回の事件は幕を下ろした。

今回の報酬で資金にも余裕が出来たし、メリアへの借金も返した。しばらくは、気ままにお宝探しでもしてみるかな……

ベッドの入る頃にはそんな風に考えながら、俺は安らかな眠りへとついた……

エルフからの依頼

深い森の中、生い茂る木々や草木がまるで避ける様に出来た直径3メートル程の穴がある。穴と言つても3メートル程の深さで、冒険者ならば飛び降りても怪我する事なく地面に辿り着ける。穴へと入れば、そこには上部から差し込んで来る日の光以外に光源はなく、その場所が通路になつてゐる事は判別出来るがその奥までは見通す事が出来ない。

穴から降りたその場所は言うなれば通路の入り口で、そこから北へと向かう道が一本あるだけだ。その先にしばらく進むと、待つてゐるのは開けた空間。そして、厳かな雰囲氣のある石造りの神殿だ。

「まさか、封印が解かれたと言つのか……？」

神殿は外觀から受ける印象とは違ひ簡単な造りで、迷う事なくほぼ一本道で最深部まで辿り着く事が出来る。

その最深部で、一人の男がそんな呟きを漏らした。

男の両耳の先端は尖つており、人間の平均よりも十分に整つた顔立ちをしている。人と似て非なる種族、エルフ。

外見は男がエルフだと示し、事実その男がエルフであり更に言えば集落の長と言う立場もある。

エルフは人間よりも寿命が長く、それに応じた歳の重ね方をする。男はエルフとしてはまだ若いが、人間で言えば老人と言える年齢で既に70を超えてゐる。それでも見た目は人間で言えば30から40歳くらいだろう。

そんな彼が、一人で神殿に訪れたのには訳がある。

「ここで暴れた形跡はないが……どこへ消えたと言つのだ……」

男は現実を受け入れ、頭を悩ませる。

男のいる場所は神殿と言うのは名ばかりで、實際には魔獸を封印する為の施設である。遙か昔に現れ、エルフの集落を含めその近隣の森で暴れたとされる巨大な獣を、当時のエルフ達が必死の思いで

封印を施し、その場所を監視する為に神殿を建てたと伝えられている。

「集落に現れた訳でもなく、ただ忽然と姿を消したか……俄かには信じられないが、どちらにせよこのまま放置する訳にもいくまい」
男はそうつて踵を返し、自身の集落へと戻るべく神殿を後にした……

「と言う訳で、これから宜しく頼む」

肩より少し先まで伸ばした金色の髪に、やや細く釣り上がった碧い瞳。先端の尖った両耳が特徴的なエルフの少女 エリザ＝アークウッドに対し、俺 バナッシュ＝ラウズコートは右手を差し出しながらそう言った。

場所はガルニールにある冒険者ギルドの休憩所。エリザと約束した通り時間は正午を過ぎた頃合だ。

「こちらこそよろしくね」

エリザは俺の手を取り、俺達は握手を交わす。

「よろしく」

つい先日までパーティを組んでいたメリアの時とは違い、エリザに対しては割りと好意的な態度を見せ挨拶をしたのは真紅色の髪が特徴的な美しい容姿の少女 ルルーセリア＝エルド＝ガーネット。俺と契約を交わしている正真正銘のドラゴンだ。

「ええ、よろしく」

にこやかに笑みを浮かべ、言葉だけ向けたルルーに対し同じく言葉だけで挨拶を返すエリザ。

エルフと言えば排他的な思考をしていると言われているが、やはり個人差があるのだろうか。少なくとも、エリザは周囲に合わせる事の出来るタイプの様だ。

「さて。それじゃあ早速今後の話をしようと思つ。エリザは何か要望はあるか？」

「特にないわ。私は貴方の手伝いをする為に仲間になつたなんでもの」

「そうか。それなら一つ、受けたい依頼があるんだ」

エリザと合流する前に、俺とルルーはギルドへと足を運び今現在出されている依頼の一覧に目を通した。その中に、一つ気にかかる依頼があつた。エリザの反対がなければ、その依頼を受ける事をルルーも了承している。

「貴方がその依頼を受けると言うのなら、私に異存はないわ」

「まあまあ、一応聞いてくれ。依頼主の名前はルートラス＝アルウツド。ラジャスタの森にあるエルフの集落の族長だ。知つてるか？」

「ええ。面識はあるわ。私はこの地域の生まれじやないから、親しい訳ではないけどね」

なるほど。エリザはこの辺の生まれじやなかつたのか。

「確かに、この街とラジャスタの集落とはそれなりに親交があつたはずよね？ なら、依頼があつてもおかしくはないと思うけど……」

「別に、エルフがギルドに依頼を出した事を不思議に思つてる訳じゃない。俺が気になつてるのは、わざわざ族長自らが依頼を出しているつて点だ。依頼の内容は森に潜伏している魔物の退治。詳細は載つていない。何か秘密があると思わないか？」

「族長自らがつて言う点については、別段おかしくはないと思うけど……わざわざギルドに退治依頼を出す様な魔物が出たのに、その魔物についての情報がないのは確かに気にかかるわね」

「そうだろう。危険性が高い可能性もあるが、放置してエルフへの心象が悪くなるのも問題だしな。エルフからの依頼を受けようつて奴はあまりいらないだろ？ し、エルフであるエリザが仲間にいれば親交も取り易いだろ？ と思つてな。どうだ？」

「さつさつも言つた通り、貴方が受けると決めたのなら私に異存はないわ」

「そうか……」

出来れば、もう少しエリザの本心を探つておきたいんだが……

これ以上は無理そ、うだな。

「それなら、この依頼を受ける事にする。ルルーも良いんだよな？」

「うん」

ルルーが頷くのを確認し、俺は依頼を正式に受けた為にギルドの受付へと向かった……

エルフからの依頼（後書き）

お待たせ致しました。ドラゴン・レイヤー一章開始です。じばら
くは週一回くらいのペースで更新しようと思っています。一章の時
と違い不定期気味ですが宜しくお願ひします。

アルウッドの集落

エルフからの依頼を受けた俺達は、各自準備を整えると言ひ事になり翌朝早朝からラジャスタの森に向かう運びとなつた。

装備の充実している今は特別に準備する物はなく、携帯食等を多少用意する程度で準備を終えた俺とルルーは余つた時間を休息に使い、その翌朝を迎えた。

朝食後にガルニールの南門でエリザと合流し、そのままラジャスタの森へと向かう。

ラジャスタの森は、ガルニールから南に下つた場所にある。

その広さは偽りの砂漠と同じ程 つまり大きな街一つ分と言つた所か。森としてはあまり大きくないだろう。

ラジャスタの森は概ね平和と言えた。モンスターはおらず、危険な野生動物もいない。まだ昼前だと言つのにも関わらず、森の中にあるエルフの集落へも簡単に辿り着く事が出来た。

「なるほど。随分と早くに我々の依頼を受ける人物が現れたと思つたら……アーケウッドのお嬢さんとパーティを組んでいる方でしたか」

そんな第一声で俺達を出迎えたのは、金髪碧眼の男エルフだった。物腰は厳かでありながら柔らかい。人間で言えば見た目は30歳程に見えるが、彼の持つ雰囲気が多くの経験をしてきた事を物語つている。

「どうやら、既にギルドから連絡があつた様だ。

「私はルートラス＝アルウッド。この集落の長を任せれている者です」

そう言つて彼 ルートラスが右手を伸ばしてきた。俺はその手を取り、握手を交わす。

エルフであるエリザではなく俺に対しても手を伸ばしたのは、このパーティの主導権を俺が持つていてそれをきちんと理解しているから

だろう。ここが普段人間と接点のないエルフの集落だつたら、俺を相手に握手を求めてくる可能性はないと言つても過言ではない。

「バナッショ＝ラウズコートです。俺の後ろにいるのがルルーセリア。そしてもう一人が知つての通りエリザ＝アークウッド。今現在このパーティは俺達三人で形成されます。まずは、貴方の依頼に応えられるかどうか判断して貰えますか？」

依頼内容が魔物退治。ルートラスが対象の事をどの程度把握出来ているのか分からぬが、おそらく冒険者が訪れたとしても篩いにかけるつもりがあつたはずだ。

「失礼ですが、後ろのお嬢さんはもしや……」

エリザにはルルーがドラゴンだとバレたが、それは纏いし者としての力を見られたからだと思つていたが……

「どうやら、エルフには特別な瞳があるらしい。」

「……ドラゴンです。俺はその纏いし者。単純な戦力で言えば、それこそドラゴンが相手でも十分戦えると思います。どうですか？」

「……分かりました。どうやら知恵も随分回る様ですし、貴方がたにお願いするとしましょ。詳しい話は私の家でしたいのですが、良いですか？」

「はい」

「それでは改めて……ようこそ、ラジャスタが一家アルウッドの集落へ。我々は、貴方達を歓迎しますよ」

正式にエルフの集落へと招き入れられ、俺達はルートラスの案内の元その家へと向かう事になった。

「所で、一つ聞きたい事があるんですけど良いですか？」

その道中、俺はふと疑問に思つた事がありルートラスにそう尋ねた。

「何でしょ？」

「さつきアルウッドの集落と言つてましたけど……もしかして、この集落に住んでる方は皆アルウッドの姓を名乗つてるんですか？」

あくまでも長であるルートラスの姓と言つ意味で、アルウッドの

集落と言つた可能性もある。しかしその前にラジャスタが一家と言つた。となると、集落全体で一つの家族の様に考へてゐる可能性がある。

「その通りです。アークウッドのお嬢さんは、それ程長い付き合いではない様ですね」

そう答えるながら苦笑を浮かべるルートラス。

どうやら、エルフにとつては常識的な事らしい。

「まだパーティを組んだばかりなんです」

今日組んだばかりとは言わない。

「別に気にする必要はありませんよ。我々からすれば問題を解決して頂けるだけの実力があれば問題ありませんからね」

エリザとの付き合いが短い事でエルフへの心象が悪くなるのでは？ ち言つ俺の心配を読んだのだろう。再び苦笑を浮かべながらルートラスはそう言った。

エルフは元々知力の高い種族と言われているが、集落の長ともなるとやはり一味違つ様だ。

「ここです」

そんな会話をしている内に目的地に着いたらしい。
案内されたのは何とか家と呼べる場所だった。

この場所に辿り着くまでの間に彼等が家と呼ぶ物をいくつか見たが、動物の皮か何かで作られたテントの様な物だった。

ルートラスの家も基本は他と変わらないが、おそらくは動物の骨を利用したであろう柱が何本かあり、皮張りではあるものの少なくとも外觀は他と比べきちんと家の形を成していた。

ルートラスに促され中に入ると、特別に飾りや何がある訳ではなく質素な空間があつた。

「どうぞ」

そう言つて丁度人数分ある切り株に座る様促され、俺達は腰を落ち着けた。

テーブルの様な物はなく、切り株と柱の一本に立てかけてある

以外には植物に関する物が何もない。エルフは自ら植物を殺す事はないと言つ噂は本当の様だ。切り株は、良く見れば座りやすい様に手を入れてある。おそらく、何らかの理由で既に死んでしまった木を利用しているのだろう。以前、弓もそうした木々から作られていましたと聞いた事がある。

「さて。龍を纏いし者がいるとなれば、正直に話しておいた方が良さそうですね」

「その物言いからすると、本来は最初にやつてきた冒険者は捨石にするつもりだつたんですか？」

「ええ。貴方には隠してもその内気付かれそうですから言つておきますが、そのつもりでした。そもそも、我々の依頼を安易に受けようと考える輩程度では殺されるのが目に見えますからね」

俺の言葉にそう答えるルートラスの表情は、丁寧な口調とは違い冷徹さが窺えるものだつた。

しかし同時にルートラスにとつてそれは事実なのだろう。本来ならば依頼をギルドに通す時に、その実力がある程度指定する事が出来る。しかしそれでは、エルフの依頼を受けようと言つ者が少ないと言つ事実がある以上依頼を受ける者が現われない可能性が高い。そこで依頼内容のある程度伏せ、尚且つ依頼のランクも指定しない。これで、少なくともこれを機にエルフに恩を売ろうなどと安易に考える連中が依頼を受ける可能性が出てくる。そいつらが依頼に失敗すれば、事の重要性をギルドが理解するであろうと想えていたのだろう。

「しかし、貴方ならば奴を倒す事が出来るかもしない」

「詳しい話を聞かせて下さい」

ルルーがドラゴンである事を見抜いた瞳を持つエルフが、倒す事が出来るかもしない。そう曖昧にしか結論を出せない相手……少なくとも、下位のドラゴンを相手にするよりもよっぽど強い相手なのだろう。

今になつて嫌な予感を覚えながらも、俺はルートラスから詳しい

話を聞くべくやうに口元した。

「墮神獣と言う存在を知っていますか?」

詳細を尋ねた俺に返ってきた言葉はそんなものだった。

「いいえ」

俺は素直にそう返した。墮神獣なんて聞いた事がない。

「二人はどうだ?」

俺を挟んで左右に座っているルルーとエリザにそう尋ねると、ルルーは即答で首を横に振った。

「知っているわ」

どうやらエリザは知っているらしい。エルフには馴染みのある存在なのだろうか?

「貴方も神獣は知っているでしょう?」

続けてそう聞き返して来るエリザ。

神獣ね……その名の示す様な神に近い存在ではなく、特別な力を持つた獣の事だ。その中でも神獣と呼ばれる獣は知能が高く、その名の通り神聖視されている固体もいるらしい。

「一応はな」

「墮神獣とは、闇に侵食された神獣の事です。理性を失い、しかし高い知能そのものは残り、にも関わらず本能に従う事しか出来ない哀れな獣……それでいて力は並の魔物とは比べ物にならず、且つ固体によつては特殊な能力も持ち合わせている。厄介な相手です」

「現われたのが、その墮神獣と言う事ですか?」

実際に見た事がある訳ではないが、神獣と言えばランク的にはドラゴンと並ぶ。ドラゴン以上に個体差があると言われている上に、数が少ない。果たしてどれ程の強さの獣なのか……

「ええ。ですが、正確に言えば現われた訳ではないのですよ」「どう言つ事ですか?」

「おそらくは、まだこの森のどこかにいるであらうその墮神獣の名

はバルストラルフ。遙か昔は、この森の守護神と言われていた巨大な狼の神獣でした。しかしバルストラルフはある日突然墮神獣へと変貌し、森を喰らい尽くそうとしました。そこで当時この森に住んでいたエルフが力を合わせ、何とか封印したのです

「その封印が、最近になつて解けていたと？」

「はい」

俺の言葉に、ルートラスははつきりと頷いて見せた。その封印とやらを自身で確認したのだろう。

「巨大なと言いましたけど、どれ程の大きさなんですか？」ここに来るまでの間に、それらしき姿は見ませんでしたけど……」

「通常時は普通の狼とそう大差はありませんが、バルストラルフには自身を巨大化させると言う特殊能力があります。最大で小さな山くらいには巨大化出来ると聞いています」

エルフは長命で有名だが、その墮神獣とやらが暴れていたのは随分と昔の話の様だ。ルートラスがエルフとしてはまだ若そうに見えるからそのせいもあるかもしれないが、それでも全て本人の記憶ではなく聞いた話として語つている。

「なるほど。しかし、不穏な空気は感じなかつたんですね……もう森から出た可能性はないんですか？」

「ありません。この森の外周には一種の結界が張られており、森への出入りは全てこちらで把握していますので」

と言う事は、俺達が森に入った時もそれを把握していたつて事か。

「それはどの程度分かるものなんですか？」

「生物が出入りした事を判別するだけの結界です。封印が解かれてからは、私が街に行つた時以外に森の外に出た生物はいません」

「封印が解かれたと氣付くまでに外に出た可能性は？」

「封印は毎日確認してきましたが、解かれていた前日から当口までの間には誰も外出ていませんでした」

となると、やっぱり森の中にいるつて事になる。結界とやらがどこまで信用出来るのかは分からないが、当面は森の中を捜す事にな

りそうだ。

「分かりました。それで、見た目の特徴なんかは分かりますか？」
「分かっているのは、銀色の毛並みをしていると言つ事くらいですね」

「そうですか……分かりました。依頼を受けるに当たつて、しばら
くはこの集落を拠点にしたいんですけど構いませんか？」

それ程遠くない距離とは言え、森の中を捜すのならこの場所に留
まつた方が効率が良い。

「ええ。大きめのテントを用意させましょう」

「ありがとうございます」

礼を伝えて、俺はゆっくりと立ち上がる。それを見て他の面々も
立ち上がった。

「まだ日も高いですし、俺達は早速森の探索を始めます」

「それでしたらその間にテントを用意させるので、戻つたら一度こ
こに来て下さい。用意させた場所に案内しますので」

「分かりました。お願ひします」

「こちらこそ、宜しくお願ひします」

そんな感じでお互いに頭を下げる。

「そうだ。墮神獣を封印していったつて場所を見てみたいんですけど、
場所を教えて貰えますか？」

「封印の神殿はこの集落から西に向かつた所にあります。草木が分
かれ、3メートル程の穴が空いてるので近付けば直ぐに分かると
思いますよ」

俺の質問に、ルートラスは躊躇なく簡単に答える。封印が解かれ
た事で秘匿性がなくなつたのだろうか。

「その穴の中に入れば良いんですか？」

「そうです。3メートル程で地に着き、そこからは一本道になつて
います」

「因みに、封印は無理矢理破られていたんですか？」

正規の手段で封印が解かれていたとなると、それはそれで大問題

だろう。俺がどの様な意図でその質問をしたのか悟つたらしく、しかし怒つた様子もなくルートラスは淡々と答える。

「当然です。しかし、随分綺麗に解かれていました。周囲に損傷の類いもありませんでしたし……」

ルートラスにも色々と思う事があるのだろう。しかし封印を施した当人ではない為、封印の仕組みの詳細は知らない様だ。

「その辺りも、可能な限りこちらで調べてみます」

封印を調べた所で何か分かるとは限らないが、案外周辺にいる可能性もあるしな。

「お力になれず申し訳ありません」

「とんでもないです。それでは、失礼します」

「改めて、宜しくお願ひします」

終始お互いを值踏みする様な感じではあつたが、そんな言葉で俺達の会話は終わつた。

ルートラスの家を出た俺達は、教えられた通り西へと向かう。集落には外壁や柵等の類いがない為、どこからでも出入りが可能だ。集落と森の具体的な境目と言うのはないのが、エルフにとつては普通なのかもしれない。集落の中も多少拓けた場所ではあるものの森の中みたいな感じだしな。

「一応これから予定を伝えておく。まずは封印を調べ、その周辺を捜す。見つかれば戦闘になるだろうから、探索時はあまり離れな様に散開する形でいこうと思う。日が落ち始めたら集落へ戻る。そんな感じで行こうと思うんだが、何か意見はあるか?」

「いいえ。真っ当な考え方だと思うわ」

「わたしもそれで良いよ」

二人の賛同へ得ると、集落と思しき空間から森の中へ入つた様に感じた。もしかしたら集落との境目として結界が張つてあるのかもしない。

「まあ、まずは神殿とやらに向かうとするか」

「じつして、エリザをパーティに迎えて最初の依頼が始まった。

ルートラスが神殿と称したその場所に辿り着くまで、相変わらず森は長閑な様子だった。

正確に言えばまだ神殿に着いた訳ではなく、入り口の穴に辿り着いた段階だ。

「これが入り口で間違いなさそうだな」

「そうね」

俺の言葉にエリザが頷く。

ルルーは物珍しそうに穴を覗き込んでいる。

「落ちるなよ？」

「だいじょーぶ」

こう言う時は相変わらず幼い感じで喋るんだな。

「中、結構暗いね」

ルルーの目はかなり良いはずだし、人間よりは暗所での視覚も優れているはずだ。そんなルルーが暗いと言う以上は、明かりが必要かもしれない。

「全く見えないのか？」

「ううん。わたしは見えるよ」

ルルーの主觀だけじゃあ判断が着かないな。俺はルルーに倣つて穴の中を覗き込む。

「……慣れれば明かりがなくても歩けそうではあるな」

奥まで同じ調子とは限らないが。

一応明かりを灯す魔法具は持っているが、使うべきか悩む所ではあるな。

「明かりの事なら、私に任せて」

そう言つと、エリザがそのまま呪文の詠唱を始める。

「闇は忌むべきもの。闇を祓い、穏やかなる光を灯せ

光源球^{ライト}」

言葉が紡ぎ終わると同時に、エリザの目の前に小さな光の球が現

われた。

光属性の魔法を使える者は珍しい。光源球自体は簡単な魔法な為、余程属性との相性が悪くない限り覚える事は可能らしいが。そう言えば、エリザの能力を確認してなかつたな。

「光の魔法が得意なのか？」

「そう言えば、能力の紹介をしてなかつたわね」

俺の質問から、エリザもその結論に至つたらしい。

「基本的に使う魔法は精霊魔法よ。使えるのは土精霊魔法と風精霊魔法。後はこの光源球みたいな簡単な魔術魔法を少し使える程度ね。一応、剣術も少しは出来るわ」

そう言つて腰の剣を差すエリザ。抜いた姿を確認した訳じやないが、鞘の形や大きさから察するに突剣類の様だ。

魔術魔法と言うのは、エルフの使う精霊魔法と区別する為に人間が編み出した魔法を指す呼称だ。

「俺の戦い方は

「貴方の説明は必要ないわ」

今度は俺の番だなと、自身について語りついた瞬間、エリザは俺の言葉を遮つた。

「戦い振りは前に見せて貰つたし、基本的に私は後衛に就くもの。それなりに状況を見極める目も持つていいつもりよ」
なるほど。確かにエルフの洞察眼は目を張るものがある様だし、細かい説明をするまでもないかも知れないな。特に、今回は集団戦闘や乱戦の類いにはならないだろうから、ある程度の意思疎通を図りながら戦えば足を引っ張り合う事もないだろう。

「その言葉、信じておこつ」

「ありがとう」

「それはさておき。明かりは問題ないって事だな」

「ええ。とりあえず私が先に降りるわ。光源球を私の真上に設置するから、その横に降りて貰える?」

「分かつた」

俺が返事をすると、エリザは早速穴の中に飛び降りた。どうやら怪我なく無事降りる事が出来た様だ。

「良いわよ」

「了解。ルルーは俺が降りてから来てくれ」

「うん」

俺はルルーが頷くのを確認してから、エリザの横に着く様に飛び降りた。

決して広くはないが、動きが阻害される程狭くもない微妙な広さの空間。ルルーくらいなら十分立つスペースはあるが、飛び降りて来るとなると少し狭いかも知れない。

「俺達は少し奥にずれよう

「そうね」

俺の意図を直ぐに汲み、エリザは通路へと進む。俺も少しだけ移動し、ルルーが降り立つ為のスペースを開ける。

「ルルー、これで降りれるか？」

「うん」

そう答えたかと思うと、ルルーは直ぐに飛び降りて来た。

見た目からは想像出来ない程鮮やかに着地し、二口りと俺に笑いかけるルルー。

どことなく褒めて欲しそうにしている気がして、俺は頭を撫でてやつた。

「えへへー」

「エリザ、先行して貰って良いか？」

嬉しそうにするルルーは置いといて、既に通路に入っているエリザにそう声をかけた。

「ええ

通路は穴を降りた空間よりも狭く、位置を入れ替わるのは不可能ではないがきつそうだ。エリザも同じ様に判断したのだろう。俺の言葉に素直に頷いた。

エリザが光源球を頼りに通路を先導して行く。

多少カーブを描く場所もあつたが、殆ど直進で開けた空間へと出た。

「これなら明かりは必要なかつたかもな」

開けた空間の天井部分には所々穴が開いていて、そこから外の光が差し込んでいる。エリザも明かりが不要と判断したのか光源球を消した。

改めて、神殿と呼ばれたその建物を見る。石造りのその建物は、神殿と呼ぶには質素な造りだ。しかし差し込む光の加減からか、醸し出される雰囲気には厳かなものを感じる。

「二人共、何か分かるか？」

正直、俺はルートラスの言う結界とやらがどんなモノなのか分からぬ。森にある結界にも気付かなかつたくらいだ。おそらく、この場所の結界も認識すら出来ないだろう。それでも調べると言つたのは、エリザとルルーがいたからだ。

「ここからじやあ何も分からぬわ」

「わたしも」

「二人も何も感じないらしい。

「となると、奥に行つてみるしかなさそうだな」

元よりそのつもりではあつたが、二人にその意思を伝えるべく言葉にする。

「そうね」

「うん」

一人がそれぞれ頷いたのを見て、俺は神殿へと向かつて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9402t/>

ドラゴン・レイヤー

2011年10月6日15時59分発行